

楽しく悩め!

地方発・一歩先の

地域共生モデル

医療介護福祉の仲間たち、

市民も企業もお役所も。

知恵を絞って考えよう

秋の郷土料理は  
芋煮です

2025  
 10/12 (日)  
 10/13 (月・祝)

NPO地域共生を支える  
 医療・介護・市民  
 全国ネットワーク

第4回  
 全国の集い  
 in 鶴岡

会場  
 マリカ東館・西館  
 〒997-0015 山形県鶴岡市末広町 3-1

大会長 瀬尾 利加子  
 株式会社瀬尾医療連携事務所 代表取締役  
 一般社団法人日本在宅ケアアライアンス  
 業務執行理事

副大会長 蘆野 吉和  
 一般社団法人日本在宅ケアアライアンス  
 業務執行理事

菅原 青  
 鶴岡市健康福祉部部長

高橋 健彦  
 鶴岡商工会議所 専務理事

三嶋 泰之  
 医療法人社団 佐倉の風 理事長

小柳 朋之  
 医療法人社団 佐倉の風 理事

運営委員長 一般社団法人 みどりまわり文庫 理事



プログラム  
抄録集

主催：  
NPO 地域共生を支える  
医療・介護・市民  
全国ネットワーク

医療の現場を  
セコムの  
電子カルテで  
変えてみませんか？

クラウド型電子カルテ

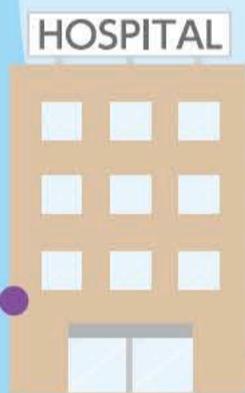


往診先

クラウドが  
あらゆる場所を  
診察室に変える



自宅



HOSPITAL



院内



CLINIC

セコム・ユビキタス  
電子カルテ



- ・診療所～中規模病院まで幅広くカバー
- ・豊富な機能、拡張性に優れ、幅広いカスタマイズが可能
- ・部門システムとの連携が可能
- ・連携医療機関とカルテの共有が可能

セコムOWEL



- ・無床診療所、在宅クリニック向け
- ・シンプルな操作感と手軽な導入を実現
- ・OSを問わず、PCだけでなくタブレットでも利用可能
- ・モバイル専用画面があるから使いやすい

セコム医療システム株式会社

代理店募集中 お問い合わせはこちらへ

03-6261-2883

信頼される安心を、社会へ。

SECOM

# 目 次

大会プログラム	2
ごあいさつ	8
NPO 地域共生を支える医療・介護・市民全国ネットワーク理事名簿一覧	12
第4回大会実行委員名簿	13
旧NPO 在宅ケアを支える診療所全国ネットワークのあゆみ	14
旧地域医療研究会のあゆみ	15
NPO 地域共生を支える医療・介護・市民全国ネットワークのあゆみ	16
会場までのご案内	17
会場案内図	18
参加者へのご案内	19
座長・発表者・講師・シンポジストの方へのご案内	22
大会特別企画	24
企業展示案内	25

## 大会1日目(10月12日(日))

基調講演1～2	28
シンポジウム1～4	30
ワークショップ1	34
スポンサードセミナー1～4	35
実践交流会	
1 口腔ケアと栄養管理・食支援	39
2 緩和ケアと看取り	42
3 人材育成・教育・啓発	46
4 認知症に関する取り組み	50
5 障害や課題を抱える人との共生	53
6 経営の工夫・新しい試み	56
7 医療・介護の地域連携	60
8 こども・生活を支える取り組み	67

## 大会2日目(10月13日(月・祝))

基調講演3	72
シンポジウム5～12	73
ワークショップ2～4	82
スポンサードセミナー5～7	85
助成	90
協賛企業一覧	90
後援一覧	91
入会案内・入会申込書	92
協賛(名刺)広告	94
広告	97

# 第1日目【10月12日(日)】

マリカ西館 3F		マリカ東館 3F
第1会場	第2会場	第3会場
マリカ市民ホール	大会議室	第1研修室
8:30		
開場(受付開始8:40~)		
9:00		
9:10~9:30	開会の辞 大会長挨拶：瀬尾利加子 共同代表挨拶：小倉 和也、亀井 克典	
9:40~10:40	9:40~10:40	9:40~10:40
<b>基調講演 1</b> <b>「出羽三山とウェルネスツーリズム            ~自己啓発を求める旅行者層~」</b> 座長：佐藤 繁義 演者：ミヨ・サラ	<b>基調講演 2</b> <b>「先端生命科学と地域づくり」</b> 座長：高橋 健彦 演者：鶴巻 啓一 中原 拓	<b>シンポジウム 1</b> <b>「“映画”の力でひろく、地域共生の扉」</b> 座長：小倉 和也 シンポジスト：山国 秀幸 佐藤 豊継
10:50~12:20	10:50~12:20	10:50~12:20
<b>シンポジウム 2</b> <b>「医療 DX in 鶴岡~鶴岡地区における            ICTを活用した包括的医療体制の構築~」</b> 座長：三原 一郎 シンポジスト：高橋美香子 阿部 侑司 丸谷 宏 遠藤 貴恵	<b>シンポジウム 3</b> <b>「住民参加サイコウ！」</b> 座長：秋山 美紀 シンポジスト：木佐貫 篤 小林まゆみ 伊藤 玲緒	<b>シンポジウム 4</b> <b>「NPO ネットワークの活動報告            在宅医療の現場における患者・家族から            の暴力・ハラスメント対策研修の開発」</b> 座長：小倉 和也 シンポジスト：三木 明子 柳田 千草 内田 直樹
12:45~13:45	12:45~13:45	12:45~13:45
<b>スポンサードセミナー 1</b> <b>「豪雨災害が導いた地域づくりの転換点            ~現場発・骨太の地域共生社会の実践~」</b> 座長：木佐貫 篤 演者：岩村 正裕 共催：株式会社ストーリーハット	<b>スポンサードセミナー 2</b> <b>「グリーンケア 見えない心に触れる            ~医師と納棺師~」</b> 演者：丸山 裕生 三嶋 泰之 共催：医療法人社団佐倉の風 さくら春色クリニック	<b>スポンサードセミナー 3</b> <b>「認知症の精神療法：            なぜ聴くだけでも効果があるのか」</b> 座長：大澤 誠 演者：繁田 雅弘 共催：一般社団法人栄樹庵
14:00		
14:10~17:50	14:10~15:50	14:10~16:00
<b>実践交流会 7</b> <b>「医療・介護の地域連携」</b> 座長：八森 淳、三原 一郎 (07-1 ~ 07-20)	<b>実践交流会 6</b> <b>「経営の工夫・新しい試み」</b> 座長：亀井 克典、鎌田 剛 (06-1 ~ 06-10)	<b>実践交流会 8</b> <b>「こども・生活を支える取り組み」</b> 座長：菅原 由美、平向 正包 (08-1 ~ 08-11)
16:00		
16:00~16:50		16:10~17:50
<b>実践交流会 1</b> <b>「口腔ケアと栄養管理・食支援」</b> 座長：大川 延也、佐藤 美恵 (01-1 ~ 01-5)		<b>実践交流会 2</b> <b>「緩和ケアと看取り」</b> 座長：三嶋 泰之、小川 貴之 (02-1 ~ 02-10)
17:00		
17:00~18:00		
<b>実践交流会 5</b> <b>「障害や課題を抱える人との共生」</b> 座長：和田 忠志、佐藤 香澄 (05-1 ~ 05-6)		
18:00		
18:30~20:00		
懇親会		

《聴こえに配慮したサポートのご案内》

第1~3会場では、文字表示やスピーカーなど、聴こえに配慮したサポートを行っています。ご希望の方は、どうぞスタッフにお知らせください。

マリカ東館 3F			マリカ広場
第4会場		企業展示	
第3研修室	和室	展示室	
8:30	開 場 (受付開始 8:40~)		
9:00			
10:00			
11:00	10:50~12:20 <b>ワークショップ 1</b> <b>NPO 法人やまごや共催企画</b> <b>「障害平等研修-障害当事者と考える障害理解」</b> 座長：平向 正包 メインファシリテーター/認定障害平等研修ファシリテーター：飯島 邦敏 サブファシリテーター/認定障害平等研修ファシリテーター：梅津真由美 今井 奈央	9:30~16:00 <b>大会特別企画 1</b> <b>「笑顔ひろがる、くらしの保健室 ちょっと一服あがらっしゃい！ 保健室で待ってさげの～」</b> 相談員：栗本 孝雄 猪股 晃博 佐藤 香澄 伊藤 繭子 原田二子	
12:00			
13:00	12:45~13:45 <b>スポンサードセミナー 4</b> <b>「楽しく悩む ～地域で実践困難な状況を ポジティブに変えるための視点と工夫～」</b> 座長：三浦 真弓 演者：岸田 徹 共催：特定非営利活動法人 tomoni なごや	9:00~18:00 <b>企業展示</b>	<b>大会特別企画 2</b> <b>「日本海総合病院の 医療 MaaS 車両展示」</b>
14:00			
15:00	14:10~15:30 <b>実践交流会 4</b> <b>「認知症に関する取り組み」</b> 座長：内門 大丈、三原 美雪 (O4-1 ~ O4-8)		
16:00	16:00~17:40 <b>実践交流会 3</b> <b>「人材育成・教育・啓発」</b> 座長：永原 弘毅、武田 洋 (O3-1 ~ O3-10)		
17:00			
18:00			
18:30~20:00	<b>懇親会</b>		

# 第2日目【10月13日(月・祝)】

マリカ西館 3F		マリカ東館 3F
第1会場	第2会場	第3会場
マリカ市民ホール	大会議室	第1研修室
8:30		
開場(受付開始8:40~)		
9:00	9:00~10:00	9:00~10:30
<b>基調講演 3</b> <b>「健康長寿と幸福長寿の両方の実現に向けて            ~「フレイル予防」はまさに地域づくり~</b> 座長：蘆野 吉和 演者：飯島 勝矢	<b>シンポジウム 5</b> <b>「足元から考える福祉住環境」</b> 座長：小柳 朋之 シンポジスト：植松 茂也 齋藤健太郎 武田 洋	<b>シンポジウム 6</b> <b>「誰もが旅を楽しめる社会へ            ~嚙下障害を持つ方の新たな可能性」</b> 座長：瀬尾利加子 シンポジスト：伊佐津貴之 伊藤 順哉 田口 充 宮本 景子
10:00	10:10~11:40	10:40~11:40
<b>シンポジウム 7</b> <b>「地方の医療 DX」</b> 座長：蘆野 吉和 シンポジスト：鈴木 聡 島貴 隆夫 斎川 克之	<b>シンポジウム 8</b> <b>日本認知症予防学会合同企画</b> <b>「認知症とともによりよく生きることに            向けた各地の取り組み」</b> 座長：内田 直樹 シンポジスト：内門 大丈 齋田 良平 内田 直樹	<b>シンポジウム 9</b> <b>日本在宅事務連絡会合同企画</b> <b>「支え合いの輪で創る未来のまち            ~医療・介護・福祉の連携と診療報酬            改定への実践的対応による地域共生~</b> 座長：奥富 隆生、浅沼 裕子 シンポジスト：石塚 秀俊、鈴木 重良 石塚 美絵
11:00	12:00	12:00
12:10~13:10	12:10~13:10	12:10~13:10
<b>スポンサードセミナー 5</b> <b>「認知症になる前に知ってほしい！            家族信託という選択肢」</b> 座長：小倉 和也 演者：高橋 英之 共催：医療法人はちのへファミリークリニック	<b>スポンサードセミナー 6</b> <b>「虐待の本質的予防について」</b> 座長：和田 忠志 演者：鷺山 拓男 須田 仁 共催：ひだまりホームクリニック	<b>スポンサードセミナー 7</b> <b>「ユースクリニックから考える            性と生殖の健康と権利」</b> 座長：菅原 由美 演者：門間 美佳 共催：地域共生ネットワーク東海共同代表 亀井克典
13:00	13:20~14:20	13:20~14:50
<b>シンポジウム 10</b> <b>「超高齢社会における難聴高齢者との意思            決定支援 ~諦めない看護を目指すキャ            ンパスの活動から~」</b> 座長：菅原 由美 シンポジスト：中石真一路 堀内 真弓	<b>シンポジウム 11</b> <b>「庄内の仲間と一緒に考えよう            ~こころの悩み~」</b> 座長：三原 美雪 シンポジスト：三原 美雪 平向 正包 木津美加子 佐藤 香澄	<b>シンポジウム 12</b> <b>「医療と占いの境界線セッションを            なぜ企画したのか？」</b> 座長：糟谷 明範 シンポジスト：宮崎 詩子 内田 直樹
14:00	14:50~15:10	15:00
<b>閉会式</b>	次期大会長：三嶋 泰之 共同代表挨拶：小倉 和也、亀井 克典 大会長挨拶：瀬尾利加子	

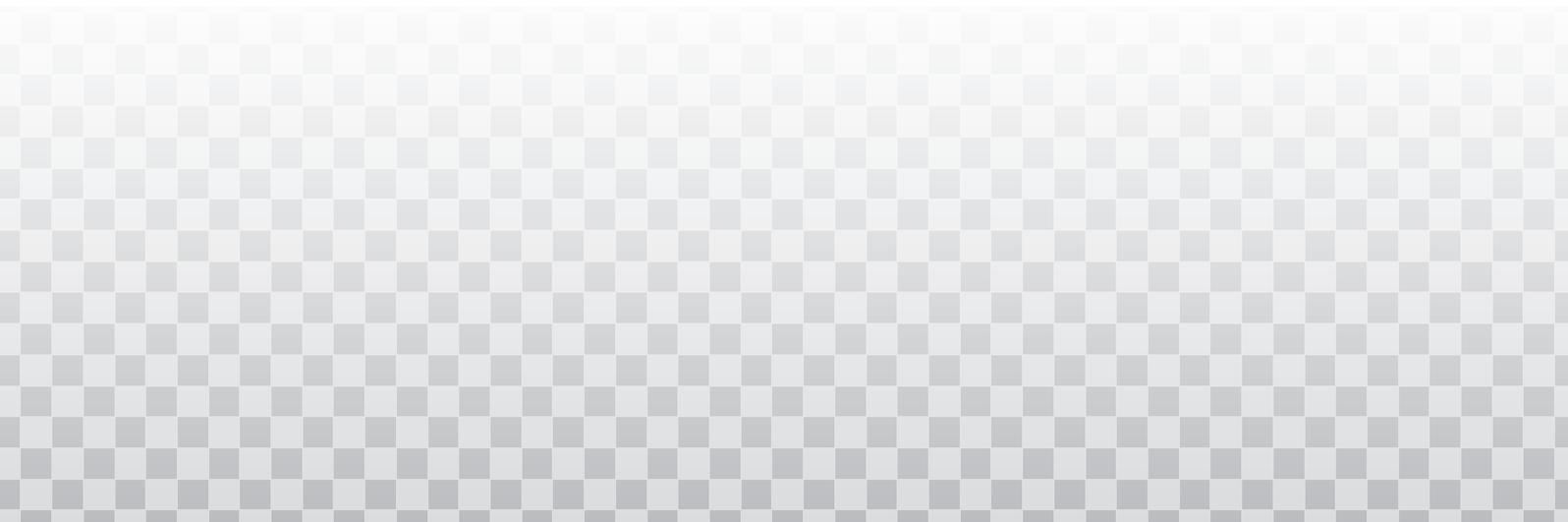
「聴こえに配慮したサポートのご案内」

第1~3会場では、文字表示やスピーカーなど、聴こえに配慮したサポートを行っています。ご希望の方は、どうぞスタッフにお知らせください。

マリカ東館 3F			マリカ広場
第4会場		企業展示	
第3研修室	和室	展示室	
8:30	開 場 (受付開始 8:40~)		
9:00	9:00~10:30 <b>ワークショップ 2</b> 「身寄りのない方への支援について 語り合うワーク」 ファシリテーター：岡江 晃児 池田 幸恵	9:00~12:00 <b>大会特別企画 1</b> 「笑顔ひろがる、くらしの保健室 ちょっと一服あがらっしゃい！ 保健室で待ってさげの～」 相談員：栗本 孝雄 猪股 晃博 佐藤 香澄 伊藤 繭子 原田二子	
10:00			
10:40~11:40	10:40~11:40 <b>ワークショップ 3</b> 「障害のあるなしを越えて、つながるための アート・ワークショップ —群馬の地域文化財・上毛かるたを使って—」 座長：福西 敏宏、大澤 誠 演者：三輪 途道、秋本真由美 福西 敏宏 ※定員40名 会場にて当日先着順	9:00~14:00 <b>企業展示</b>	<b>大会特別企画 2</b> 「日本海総合病院の 医療 MaaS 車両展示」
11:00			
12:00			
13:00			
13:20~14:20	13:20~14:20 <b>ワークショップ 4</b> 「医療と交通問題を考える 対話型ワークショップ」 座長：佐藤 高彦	13:20~14:20 <b>大会特別企画 3</b> 「参加してみようだった？ みんなが思った「地域共生」を語ろう」 座長：瀬尾利加子 ファシリテーショングラフィック：佐藤 美恵	
14:00			
15:00			



# ごあいさつ





NPO 地域共生を支える医療・介護・市民全国ネットワーク

共同代表 **小倉 和也**

(医療法人はちのへファミリークリニック 理事長)

NPO 地域共生を支える医療・介護・市民全国ネットワークは、地域包括ケアおよび地域共生社会の推進を目指して活動してきた旧 NPO 在宅ケアを支える診療所・市民全国ネットワークと、地域医療研究会が 2022 年に合併して誕生した団体です。このたび、合併後第 4 回目となる全国の集いを山形県鶴岡市において開催する運びとなりました。ご後援を賜った皆様、準備に尽力いただいた実行委員会ならびに関係各位に厚く御礼申し上げます。

少子高齢化と人口減少が加速する我が国において、鶴岡市や私が診療を行う八戸市を含む東北地方は、その影響を最も早くかつ強く受けている地域の一つです。高齢化のピークを過ぎた後に顕在化する急激な人口減少や医療・介護資源の縮小といった課題は、首都圏をはじめ都市部が今後直面する状況を先取りするものであり、地域のつながりや知恵を結集して対応が進められています。

なかでも庄内地域は、精神文化や食文化といった豊かな地域資源を基盤とし、人と人との関係性を重視しながら、食支援、ICT 連携、地域医療の集約化など、先進的な実践に取り組んでいる点で注目される地域であり、今回の全国の集いを鶴岡市で開催する意義は極めて大きいものと考えております。

本大会のテーマは「楽しく悩め！地方発・一歩先の地域共生モデル — 医療介護福祉の仲間たち、市民も企業もお役所も。知恵を絞って考えよう —」です。この鶴岡の地で、文化の豊かさと人々のあたたかさに触れながら、皆様と知見を共有し、直面する課題への対応をともに「楽しく悩」みながら話し合うことが、各地における地域共生社会の構築と発展をさらに促進する契機となることを期待いたします。



NPO 地域共生を支える医療・介護・市民全国ネットワーク

### 共同代表 亀井 克典

(医療法人寿会かわな病院在宅ケアセンター長  
覚王山内科・在宅クリニック院長)

このたび瀬尾利加子大会長のもと、山形県鶴岡市において第4回 NPO 地域共生を支える医療・介護・市民全国ネットワーク全国の集いが開催されます。「楽しく悩め！地方発・一歩先の地域共生モデル～医療介護福祉の仲間たち、市民も企業もお役所も。知恵を絞って考えよう～」をテーマに、大変魅力的な多彩なプログラムが組まれています。瀬尾大会長はじめ、大会実行委員会の皆様の献身的なご努力に心から敬意と感謝を申し上げます。

今回の全国の集いは当 NPO 法人にとって二つの新しい取り組みとなりました。

一つは医師、看護師などの医療職でない「市民」の立場として瀬尾さんが大会長をお引き受けいただいたことです。「医療・介護・市民」がフラットにともに地域共生を語り合うという当 NPO 法人の理念が具現化されたとうれしく思っています。プログラムの中身も、医療・看護・介護専門職とは異なる市民の目線での企画が多く生まれ、とても刺激的で楽しみです。

もう一つは大都市部ではなく、人口減少、高齢化に悩む東北の地方都市での開催ということです。地方独自の課題、悩み、将来への展望について全国の皆さんが学び、考える貴重な機会になると思います。

当 NPO 法人の伝統である実践交流会も早々に予定の発表枠が埋まり、8つのカテゴリーそれぞれに、全国の現場での熱い実践報告が集まってきています。

鶴岡の地に集う皆さん！オンデマンドオンラインでご参加いただく皆さん！

トランプ大統領による差別・分断政策、イスラエルによるガザ地区へのジェノサイド、終わらぬウクライナ戦争、「\*\*\*ファースト」を声高に叫ぶ人々の出現、地球環境破壊による異常な猛暑・・・地球の未来、世界の将来、人類の生存が明らかに危機的状況になっている中でも、私たちはひるむことなく「多様性を認め合い、ともに生きる」社会の実現をめざして現場で実践し、語り合い、ともに手を携えていきましょう。





NPO 地域共生を支える医療・介護・市民全国ネットワーク  
第4回全国の集い in 鶴岡 2025

大会長 瀬尾 利加子

(株式会社瀬尾医療連携事務所 代表取締役)

このたび2025年(令和7年)10月12日(日)・13日(月・祝)の2日間、山形県鶴岡市の鶴岡駅前にあるマリカにおいて、NPO 地域共生を支える医療・介護・市民全国ネットワーク第4回全国の集いを開催する運びとなりました。

本ネットワークは、2022年に地域医療研究会とNPO在宅ケアを支える診療所・市民全国ネットワークという長年の歴史をもつ会が合併をして設立された団体です。安心をして最期まで暮らせる地域社会を作るため、市民を含む多職種が連携・協働して、地域共生社会を作ることを活動目的としています。

本大会テーマは「楽しく悩め! 地方発・一歩先の地域共生モデル — 医療介護福祉の仲間たち、市民も企業もお役所も。知恵を絞って考えよう —」としました。

医療・介護だけでなく、市民や企業、行政などの様々な人が参加し、地域の課題に悩みつつも、みんなで「楽しむ」ことが大事だと考えています。全国から「地域共生社会」の構築及び維持発展を目指す多様性あふれる仲間たちと知恵と工夫を持ち寄り、ここ鶴岡から地方発の地域共生モデルをみんなで発信していきましょう。

羽田空港から庄内空港へは1時間で来れる当地は日本海に面し、「出羽三山」、「サムライゆかりのシルク」、「北前船寄港地」の3つの日本遺産を有する城下町です。また国内初の「ユネスコ食文化創造都市」にも認定され、美味しいだけでなく、歴史・文化のストーリーまで味わうことのできるまちです。

皆さまの地域共生社会への思いを手土産に、独特の文化が受け継がれ、そして何より美味しい鶴岡に、ぜひお越しください。実行委員会一同、お待ちしております。

# NPO 地域共生を支える医療・介護・市民全国ネットワーク 2025 年度理事名簿一覧

役職	氏名	法人名(所属団体名)	所在地
会長	小倉和也	医療法人 はちのへファミリークリニック	青森県
会長	亀井克典	医療法人生寿会 かわな病院 / 覚王山内科・在宅クリニック	愛知県
副会長	大澤誠	医療法人あづま会 大井戸診療所	群馬県
副会長	青山壽久	医療法人社団東京石心会 さやま地域ケアクリニック	埼玉県
副会長	三嶋泰之	医療法人社団佐倉の風 さくら春色クリニック	千葉県
事務局長	苛原実	医療法人社団実幸会 いらはら診療所	千葉県
常任理事	石井耕士	社会医療法人財団石心会 埼玉石心会病院	埼玉県
常任理事	内門大丈	医療法人社団彰耀会 メモリーケアクリニック湘南	神奈川県
常任理事	内田直樹	医療法人すずらん会 たろうクリニック	福岡県
常任理事	大石佳能子	株式会社メディヴァ	東京都
常任理事	黒岩巖志	医療法人社団萌気会 萌気園浦佐診療所	新潟県
常任理事	瀬尾利加子	株式会社瀬尾医療連携事務所	山形県
常任理事	春田明郎	神奈川県勤労者医療生活協同組合 横須賀中央診療所	神奈川県
常任理事	和田忠志	ひだまりホームクリニック	千葉県
理事	揚石義夫	医療法人社団 揚石医院	新潟県
理事	安藤親男	諏訪中央病院 北山診療所	長野県
理事	石井映禧	社会医療法人財団石心会	神奈川県
理事	石田一美	医療法人秋櫻 さくらクリニック	長崎県
理事	石田賢二	医療法人秋櫻 さくらクリニック	長崎県
理事	今井拓	諏訪中央病院	長野県
理事	大川延也	大川歯科医院	東京都
理事	大嶋秀一	医療法人徳洲会 四街道徳洲会病院	千葉県
理事	太田秀樹	医療法人アスムス およま城北クリニック	栃木県
理事	大谷学	大谷歯科	大阪府
理事	沖倉紅児	パルシステム生活協同組合連合会	東京都
理事	柏瀬昌史	柏瀬歯科医院	栃木県
理事	北澤彰浩	在モンゴル日本国大使館	モンゴル
理事	楠木司	特定医療法人防治会	高知県
理事	清水聡	社会医療法人健康会 新京都南病院	京都府
理事	菅原由美	NPO 法人キャンナス 全国訪問ボランティアナースの会	神奈川県
理事	東北浩仙	株式会社 WONDER	大阪府
理事	中嶋啓子	医療法人啓友会 なかじま診療所	大阪府
理事	中島肇	中島肇法律事務所	東京都
理事	長縄伸幸	特定医療法人フェニックス フェニックス総合クリニック	岐阜県
理事	永原弘毅	医療法人永原診療会	京都府
理事	畑恒土	医療法人あいち診療会 あいち診療所野並	愛知県
理事	福田善晴	医療法人大和会 福田心臓・消化器内科	高知県
理事	藤田愛	北須磨訪問看護・リハビリセンター	兵庫県
理事	松永平太	医療法人社団優和会 松永醫院	千葉県
理事	宮坂圭一	医療法人清風会 宮坂医院	長野県
理事	宮崎詩子	株式会社 テレノイドケア	東京都
理事	村山善紀	医療法人村山内科 村山内科医院	徳島県
理事	山岸大輔	生活介護サービス株式会社	千葉県
理事	由井和也	JA 長野厚生連 佐久総合病院小海分院	長野県
理事	大河内章三	社会福祉法人四ツ葉会	岡山県
理事	糟谷明範	株式会社シンクハピネス	東京都
理事	八森淳	医療法人 Molead つながるクリニック	神奈川県
理事	大友路子	(株)メディコラボ研究所	神奈川県
監事	黒岩海映	南魚沼法律事務所	新潟県
監事	玉井典子	(株)友愛メディカル	千葉県
名誉会長	黒岩卓夫	医療法人社団萌気会 萌気園浦佐診療所	新潟県
名誉理事	新田國夫	医療法人社団つくし会 新田クリニック	東京都
名誉理事	鎌田實	office MINO ~オフィス・ミノ~	長野県
名誉理事	西嶋公子	医療法人社団公朋会	東京都

## 第4回大会実行委員名簿

大会長	瀬尾利加子（株式会社瀬尾医療連携事務所 代表取締役）
副大会長	蘆野 吉和（一般社団法人 日本在宅ケアアライアンス）
	菅原 青（鶴岡市 健康福祉部長）
	高橋 健彦（鶴岡商工会議所 専務理事）
	三嶋 泰之（医療法人社団佐倉の風 さくら春色クリニック）
実行委員	秋葉 豊（NPO 会員）
	秋山 美紀（慶應義塾大学）
	蘆野 潤子（みどりまち文庫）
	安藤 希祥（東北公益文科大学・学生団体おでこ BASE 共同代表）
	池田 幸恵（新潟県地域医療推進機構 魚沼基幹病院）
	石名坂洋行（みどりまち文庫（山形県庄内総合支庁））
	伊藤 和敏（医療法人社団みつわ会 茅原クリニック 事務係長）
	今井 麻奈（新潟県地域医療推進機構 魚沼基幹病院）
	小川 貴之（一般社団法人 桐生市医師会）
	風神 宏哉（クリアコーポレーション 代表取締役）
	加藤 薫（株式会社蔵王サブライズ 執行役員兼事業部長 / 日本福祉用具供給協会東北支部山形ブロック事務局 執行役員兼事業部長）
	鎌田 剛（新潟医療福祉大学医療経営管理学部 医療情報管理学科 教授）
	小林 美保（訪問看護ステーション bounce / 日本教育クリエイト / 暮らしの保健室やまがた）
	小坂 太一（日本調剤 荘内薬局）
	佐藤 香澄（心のとまり木）
	佐藤 高彦（医療法人健友会 本間病院）
	佐藤 信子（酒田市民）
	佐藤 美恵（鶴岡市社会福祉協議会 包括かたりあい所長）
	鈴木 裕士（鶴岡銀座商店街振興組合 理事長）
	高橋 英之（株式会社あおぼの杜 代表取締役社長）
	武田 洋（B-CHANGE）
	田中 秀典（老人保健施設のぞみの園 係長）
	田中 宏（鶴岡市議会議員、音楽家）
	鶴淵 友香（日本調剤 荘内薬局）
	東北 浩仙（株式会社 WONDER（ワンダー） 代表取締役）
	蓮實 徹也（日本調剤株式会社 東北支店 山形県エリアマネージャー）
	原田二三子（みどりまち文庫）
	平向 正包（NPO 法人やまごや）
	前田 政文（一般社団法人 DEGAM 鶴岡ツーリズムビューロー 事業グループ主任）
	松永 平太（笑顔グループ松永病院 理事長）
	松政 太郎（NPO 会員）
	三原 一郎（三原皮膚科）
	三原 美雪（三原皮膚科）
	村上 直人（NPO ユニグラウンド）
	八鍬 紘治（日本調剤株式会社 在宅医療部 東日本エリア担当 チームマネージャー）
	小澤 栄司（日本調剤株式会社 東北支店 支店長）
	丸山 裕生（あまねや）
運営委員長	小柳 朋之（トテらぼ。）

# 旧 NPO 在宅ケアを支える診療所全国ネットワークのあゆみ

1994年	1月29日	NHK ぐらしのジャーナル「かかりつけ医」特集を契機に、萌気園診療所の呼びかけで、あいち診療所野並・なかじま診療所が交流。「診療所ルネッサンス」を合言葉とする
	7月9日～10日	『ネットワーク結成第1回準備会』を名古屋で開催。以後、岡山・広島・鳥取・郡山（福島）・松本（長野）・東京・松江（鳥根）で準備会を開催。
1995年	9月23日～24日	在宅ケアを支える診療所全国ネットワーク結成全国の集い in 東京 テーマ『在宅医療と診療所医療』
1996年	11月3日～4日	第2回全国の集い in 大阪 テーマ『在宅ケアの連携と診療所の役割』
1997年	5月3日～5日	訪問看護婦リーダー研修会開催
	11月23日～24日	第3回全国の集い in 名古屋 テーマ『安心できる医療と福祉を求めて～診療所への信頼の回復は在宅医療から』
1998年	7月19日～20日	第4回全国の集い in 東京 テーマ『実りある人生を支える在宅ケア 私たちにできること』
1999年	1月・2月	訪問看護婦リーダー研修会・リハビリ職リーダー研修会開催
	9月	「在宅医療実践マニュアル」を編集出版する
	10月10日～11日	第5回全国の集い in 岡山 テーマ『医療に個別の生活を取り戻せるか～よみがえる世紀末診療所』
2000年	9月23日～24日	第6回全国の集い in 京都 テーマ『京都から更なる診療所の維新を』
2001年	10月7日～8日	第7回全国の集い in 東京 テーマ『在宅ケアを定着させるために』
2002年	9月	NPO 法人在宅ケアを支える診療所・市民全国ネットワーク認証
	9月22日～23日	第8回全国の集い in 仙台 テーマ『今できる事を伝えよう』
2003年	9月14日～15日	第9回全国の集い in 岐阜 テーマ『見つめなおそう、われらの役割』 厚生労働省から「痴呆性高齢者の在宅生活医療支援プロジェクト」事業を継続受託
2004年	9月19日～20日	第10回全国の集い in 千葉 テーマ『地域で育てよう、われらの在宅ケア』 厚生労働省から「痴呆性高齢者の在宅生活医療支援プロジェクト」事業を継続受託
2005年	9月18日～19日	第11回全国の集い in 広島 テーマ『いのち輝く在宅ケア～市民とともに地域の暮らしを変えよう～』
2006年	9月17日～18日	第12回全国の集い in 長崎 テーマ『命の大切さと尊厳をいかに守るか』
2007年	8月	機関紙「風の萌」創刊準備号発刊
	9月16日～17日	第13回全国の集い in 東京 テーマ『支え合う地域の創造』
	10月	東京事務局・名古屋事務局・大阪事務局の3つの事務所が統合され、東京都文京区に「事務局」を構える
2008年	9月14日～15日	第14回全国の集い in 京都 テーマ『伝統の京都で100年後の暮らしを考える』
2009年	9月20日～21日	第15回全国の集い in 群馬 テーマ『こころを科学し暮らしに寄り添い地域を創る～多職種協働ネットワークがパラダイムを変える～』
2010年	10月10日～11日	第16回全国の集い in 名古屋 テーマ『家族を大切にできる地域づくり』
2011年	9月18日～19日	第17回全国の集い in しんしゅう テーマ『住みなれた地域で最期まで暮らしつづけるために』
2012年	9月16日～17日	第18回全国の集い in 高知 テーマ『おらんくで自分らしくさいごまで』
2013年	9月22日～23日	第19回全国の集い in 新潟 テーマ『みんなのケアで咲かせよう～地域包括ケアのあるむら・まち～』
2014年	9月14日～15日	第20回全国の集い in 岡山 テーマ『吉備の国から日本が変わる～歴史・文化・人～』
2015年	10月1日～2日	第21回全国の集い in 北海道 テーマ『地域を支えるための育てあい～フロンティアの地北海道から～』
2016年	9月18日～19日	第22回全国の集い in 鹿児島 テーマ『ご近所』が主役おひとりさまも人生100年 きばりやんせ!!
2017年	10月8日～9日	第23回全国の集い in はちのへ テーマ『かだるべし！創るべし！地域のぐらし日本の未来』
2018年	9月23日～24日	第24回全国の集い in Osaka テーマ『ともに生きる・ともに暮らす・めっちゃええ明日』
2019年	9月15日～16日	第25回全国の集い in 東京・地域医療研究会大会合同大会 テーマ『みんなでつくる地域包括ケア～地域共生社会をめざして～』
2021年	9月19日～20日	第26回全国の集い in 長債おむら テーマ『ちゃんと決めんば、自分の最期～すべての人に最期はくる 地域で育む人生会議～』
	11月	地域共生社会実現をめざし、NPO 在宅ケアを支える診療所・市民全国ネットワークと地域医療研究会が合併し新名称「NPO 地域共生を支える医療・介護・市民全国ネットワーク」と変更

# 旧地域医療研究会のあゆみ

年	開催名称	テーマ・特徴
1975	外科医療研究会（長野）	外科の技術的情報交換、医師確保対策
1976	外科医療研究会（長野）	外科の技術的情報交換、医師確保対策
1978	外科医療研究会（長野）	外科の技術的情報交換、医師確保対策
1979	地域医療研究会準備会（長野）	外科以外の医師が参加
1980	第1回地域医療研究会'80（長野）	「私の地域医療」若月俊一、吉澤国雄、徳田虎雄
1982	第2回地域医療研究会'82（長野）	「都市と農村の地域医療の対比」／「地域医療に従事する医師の研修問題」
1983	第3回地域医療研究会'83（千葉）	「都市での地域医療は可能か」
1987	第4回地域医療研究会'87（長野）	世代交代を試みる「諏訪中央病院のすべて」「規約」決議 代表世話人に黒岩卓夫氏
1989	第5回地域医療研究会'89（新潟）	「老人問題と老人保健施設」「ゆきぐに大和総合病院のすべて」 医師以外の多数の参加
1990	2月 会員：五島正規氏衆議院議員に当選	
1991	第6回地域医療研究会'91（京都）	「都市における医療と福祉の相互理解」初めての都市部での会合 事務局設置 / 12月～会報発行を始める
1992	会員：今井澄氏参議院議員に当選	
1993	第7回地域医療研究会'93（大分）	「新たな地域医療の理念を求めて」／「患者のいのちと人権」
1994	会員：医師が白浜はまゆう病院開設	
1995	第8回地域医療研究会'95in 神奈川（神奈川）	「地域医療における多元的ネットワーク」／テーマ毎の交流会を導入 7月 事務局を諏訪中央病院から京都南病院へ移る。
1996	提言集の作成／新たな公的介護システムを創出しよう －介護保険制度をめぐっての提言集－	提言集の作成／新たな公的介護システムを創出しよう －介護保険制度をめぐっての提言集－
1997	第9回地域医療研究会'97in 千葉（千葉）	「転換期の地域医療」地域医療の推進で日本を変えよう！
1998	地域医療シンポジウム（神奈川）	「介護保険と医療」老人ケアと医療の関係はどうあるべきか
1999	第10回地域医療研究会'99（長野） 代表世話人に三上勝利氏就任	真に豊かな社会をめざして－いまこそ必要、あたたかな地域医療－
2000	地域医療シンポジウム（京都）	介護保険をつきぬく病院と診療所との新たな挑戦 シンポジウムⅡ地域ケアを考える－在宅サービスと施設サービスのはざま－ 初の在宅ケアを支える診療所全国ネットワークとのジョイント大会
2001	第11回地域医療研究会 2001in 北海道（北海道）	地域を変える地域医療－北の大地からの発信－
2002	地域医療研究会シンポジウム（東京）	さまよえる長期療養者－医療保険と介護保険の谷間で、どこへ行くのか－
2003	第12回地域医療研究会 2003in 南紀白浜（和歌山） 代表世話人に鎌田實氏就任	「質の高い地域医療・地域ケアの構築を目指して」
2004	11・28 講演とシンポジウム	7・30「介護保険制度見直し」に対する検証
2005	2・27 シンポジウム（東京） 10・9 シンポジウム（名古屋）	「新臨床研修制度を検証する」 「介護予防を考える」
2006	06・11 シンポジウム（東京） 11・5 講演とシンポジウム（東京）	「新医師臨床研修制度を考える」 「日本の医療が危ない」－真に国民のための医療とは－
2007	地域医療研究会 2007in 木更津（千葉） 代表世話人に松本文六氏就任	大会長 和田忠志氏
2008	8・24 講演とパネルディスカッション（東京）	後期高齢者医療制度についての講演とパネルディスカッション
2009	3・15 シンポジウム（愛知） 8・22/23 地域医療研究会 2009in 長野（長野）	「地域医療を守ろう」－愛知の医療を考えるシンポジウム－ 大会長 夏川周介氏、実行委員長 北澤彰浩氏
2010	1・31 シンポジウム 9・26 シンポジウム（東京）	国民皆保険制度を堅持し、安心・信頼の医療制度の確立を目指して 施行10年の介護保険の現状と課題－医療保健と介護保険同時改訂に向けて－
2011	10・29/30 地域医療研究会全国大会 2011in 高知	社会医療と社会保障 少子・高齢化社会での社会保障 そのとき医療は・・・そのとき介護は・・・ 大会長 五島正規氏
2012	12・2 シンポジウム 消費税と医療	消費税と医療
2013	9・15/16 地域医療研究会全国大会 2013in 埼玉	少子高齢化社会における医療・介護・福祉 大会長 青山壽久氏
2014	地域医療研究会講演会（名古屋）1/11	病院機能分化と地域包括ケアの行方 ～現状と今後の方向性～ 全日本病院協会会長 西澤寛俊氏
2015	10・3/4 地域医療研究会全国大会 2015in 大阪	少子超高齢社会における地域医療・地域包括ケアとは 大会長 松村吉庸氏
2017	地域医療研究会シンポジウム（東京）1/15	総合診療研修と専門医のあるべき姿について
2017	9・16-18 地域医療研究会全国大会 2017in 魚沼（新潟）	「地域医療新時代！在宅医療から高度先進医療まで～新潟魚沼の挑戦～」 大会長 黒岩卓夫氏
2019	地域医療研究会シンポジウム（東京）3/17	人生の最終段階における医療
2019	9・15/16 NPO 在宅ケアを支える診療所・市民全国ネットワーク 第25回全国の集い in 東京 2019 地域医療研究会全国大会 in 東京 2019	みんなでつくる地域包括ケア～地域共生社会をめざして～ 大会長 三島泰之氏 春田明郎氏
2021	11/14 地域医療研究会総会 記念講演会・シンポジウム（名古屋）	講演会 「ポストコロナ・環境危機の時代をどう生きるか～持続可能で公正な共生社会を目指して～」 講師：斎藤幸平 シンポジウム 「地域医療研究会の40年～その歩みを振り返り、新たな旅立ちへの思いを語る～」
2021	地域共生社会実現をめざし、NPO 在宅ケアを支える診療所・市民全国ネットワークと地域医療研究会が合併し新名称「NPO 地域共生を支える医療・介護・市民全国ネットワーク」と変更	

# NPO 地域共生を支える医療・介護・市民全国ネットワークのあゆみ

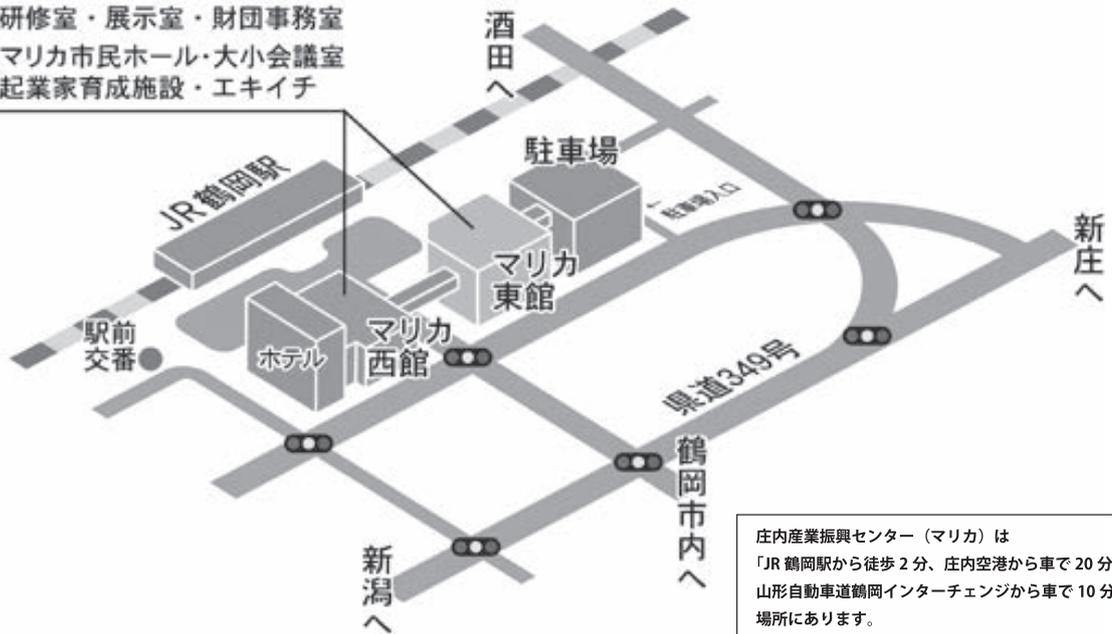
2021年	11月	地域共生社会実現をめざし、NPO 在宅ケアを支える診療所・市民全国ネットワークと地域医療研究会が合併し新名称「NPO 地域共生を支える医療・介護・市民全国ネットワーク」と変更
合併後 2022年より NPO 地域共生を支える医療・介護・市民全国ネットワーク全国の集いと名称を変更して開催		
2022年	9月18日～19日	第1回 NPO 地域共生を支える医療・介護・市民全国ネットワーク 全国の集い in 湘南ひらつか 2022 テーマ『地域共生社会はみんなで支える。誰もが安心して暮らせるまちをつくる。』
2023年	9月17日～18日	第2回 NPO 地域共生を支える医療・介護・市民全国ネットワーク 全国の集い in 名古屋 2023 テーマ『愛と平和がつくる地域共生社会～ともに暮らし、ともに癒し、ともに生きる～』
2024年	11月3日～4日	第3回 NPO 地域共生を支える医療・介護・市民全国ネットワーク 全国の集い in 福岡 2024 テーマ『みんなで考える地域共生』

# 会場までのご案内

## 庄内産業振興センター

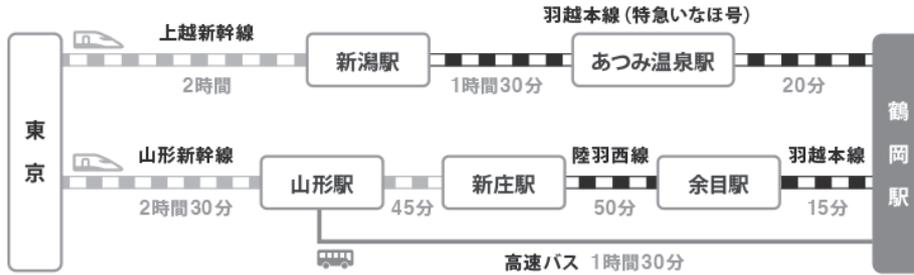
(公財)庄内地域産業振興センター

- 東館 3階 研修室・展示室・財団事務室
- 西館 3階 マリカ市民ホール・大小会議室
- 2階 起業家育成施設・エキイチ

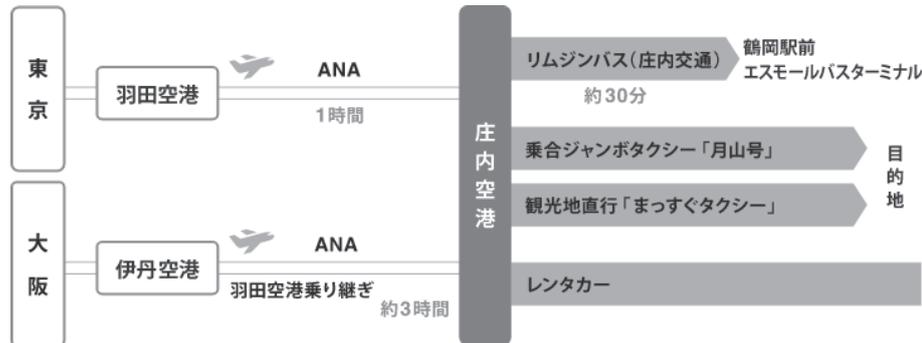


庄内産業振興センター（マリカ）は「JR 鶴岡駅から徒歩 2 分、庄内空港から車で 20 分、山形自動車道鶴岡インターチェンジから車で 10 分」の場所にあります。

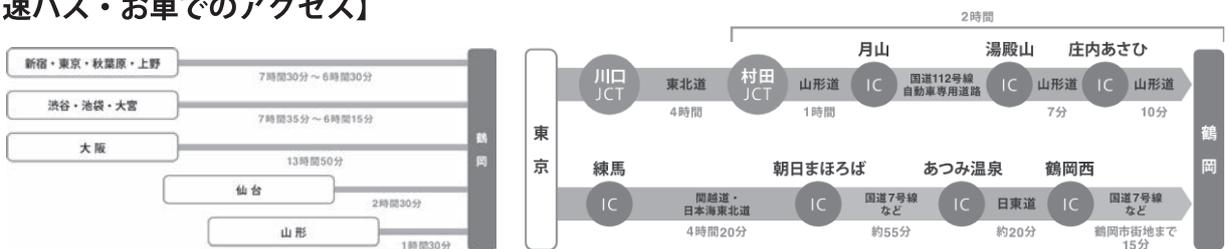
### 【JR・鉄道でのアクセス】



### 【航空機でのアクセス】



### 【高速バス・お車でのアクセス】



1日目

1日目

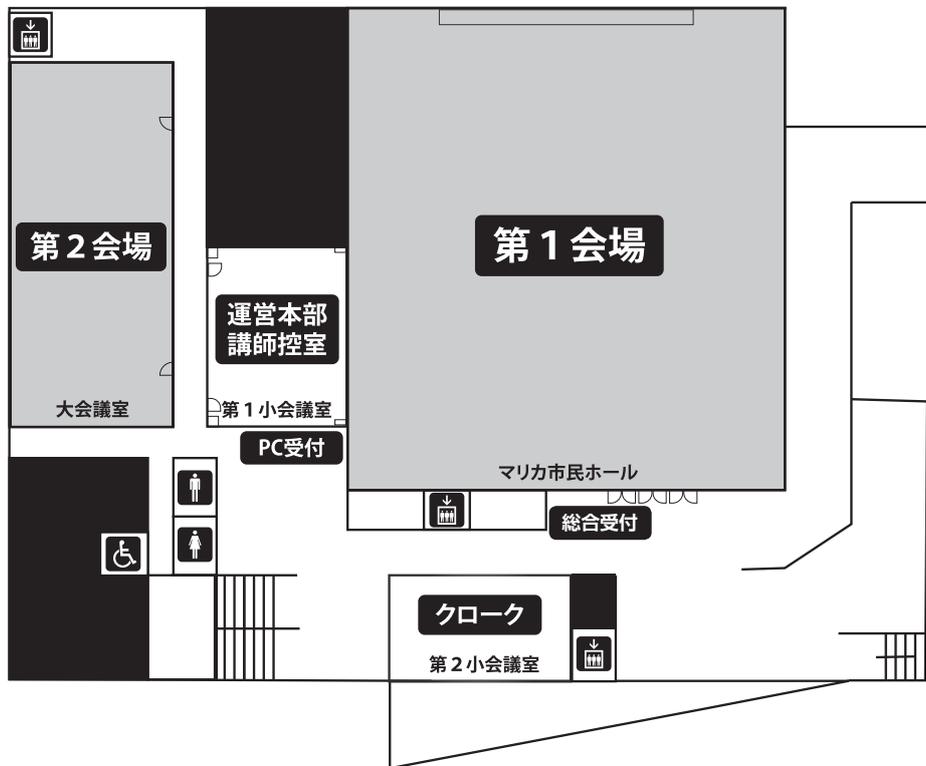
実践交流会

2日目

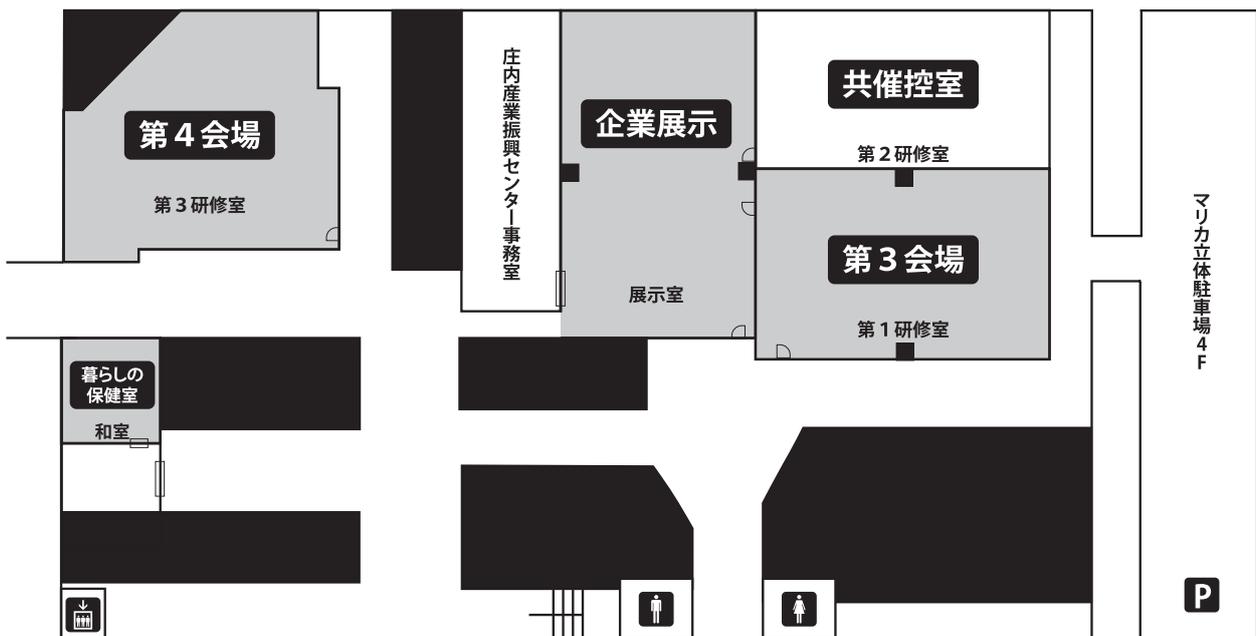
後援・協賛  
広告

# 会場案内図

3F



## 【マリカ西館】



## 【マリカ東館】

# 参加者へのご案内

## 1. 当日受付

### 《受付日時 場所》

日時 2025年10月12日(日) 8:40～18:00  
2025年10月13日(月・祝) 8:40～14:00  
場所 マリカ東館・西館 3F「市民ホール ホワイエ」

### 《参加登録費》

○早期参加登録(8月末で申込締切) ※カード決済ならびに銀行振込

参加区分	現地参加費用	オンデマンド視聴費用	プログラム・抄録集(税込)
会員 医師(不課税)	7,000円	無料※1	別売1,100円
会員 医師以外(不課税)	3,000円	無料※1	別売1,100円
非会員 医師(税込)	7,000円	3,000円※2	別売1,100円
非会員 医師以外(税込)	3,000円	3,000円※2	別売1,100円

○後期・当日参加登録(9月～当日) ※当日登録は現金のみ

参加区分	現地参加費用	オンデマンド視聴費用	プログラム・抄録集(税込)
会員 医師(不課税)	10,000円	無料※1	別売1,100円
会員 医師以外(不課税)	5,000円	無料※1	別売1,100円
非会員 医師(税込)	10,000円	5,000円※2	別売1,100円
非会員 医師以外(税込)	5,000円	5,000円※2	別売1,100円

※1 会員の方はオンデマンド視聴が無料です。現地開催終了後(11月上旬)を目処に、ご登録のメールアドレスへ視聴用ID/パスワードをご案内いたします。

※2 非会員がオンデマンド視聴を希望される場合は別途参加費を頂戴します。また、オンデマンド視聴をお申し込み後に会員申し込みをされても、オンデマンド視聴費用は返金できません。

### 《事前参加登録がお済みの方(web申込)》

- ① 決済完了後の自動送信メールにてQRコード発行いたしますので当日参加受付にご提示ください(画面表示・スクリーンショット・印刷にて対応可)。
- ② QRコードを読み取り後に「ネームカード」をお渡しいたします。
- ③ ネームホルダーは総合受付「記名所」にご用意しております。会場内では必ず着用ください。
- ④ 「参加証明書」は開催後、来場もしくは聴講ログの確認できた方を対象に発行いたします。決済完了後の自動送信メールにダウンロードボタンが表示されますので、そちらから「参加証明書」を取得してください。

### 《事前参加登録がお済みの方(FAX申込)》

- ① 当日、参加受付にて「参加登録申込書」に必要事項をご記入の上、参加受付にご提示ください。
- ② 確認が取れましたら「ネームカード」「参加証明書」をお渡しいたします。
- ③ ネームホルダーは総合受付「記名所」にご用意しております。会場内では必ず着用ください。

### 《当日参加登録される方》

- ① 当日受付にて「参加登録申込書」に必要事項をご記入の上、参加登録費をお支払いください。
- ② 現金のみでのお支払いとなります。クレジットカードはご利用いただけません。
- ③ ネームホルダーは総合受付「記名所」にご用意しております。会場内では必ず着用ください。
- ④ 抄録集をお持ちでない方は、当日受付にて、1,100円（税込）でご購入いただけます。（数量限定）

※ネームカード（参加証明書）に所属・氏名をご記入の上、会期中は必ずご着用ください。

※ネームカードの再発行は行いませんので、紛失なされないようご注意ください。

## 2. プログラム・抄録集について

プログラム抄録集は大会ホームページ上で一般公開します。

印刷版をご希望の方には、参加登録と合わせてお申し込みください。

当日は数量限定で1冊1,100円（税込）で販売いたします。

### 《事前購入の方》

- ① 現地参加者：参加受付時にお渡しします。
- ② オンデマンド配信参加者：印刷版のお渡しはオンデマンド配信開始前までに郵送を予定しております（11月予定）。

## 3. 認定単位について

本会では大会の参加にて下記単位が取得可能です。

単位取得の詳細につきましては、日本認知症予防学会 (<https://ninchishou.jp/>) にお問い合わせください。

- 一般社団法人日本認知症予防学会 認知症予防認知症予防専門医 更新単位 2単位
  - 一般社団法人日本認知症予防学会 認知症予防専門士 更新単位 2単位
  - 一般社団法人日本認知症予防学会 認知症予防専門薬剤師 更新単位 2単位
  - 一般社団法人日本認知症予防学会 認知症予防ナース 更新単位 2単位
- ※ 各種単位更新時には本会の「参加証明書」が必要となります。

## 4. 懇親会

日 時：2025年10月12日（日） 18：30～

場 所：東京第一ホテル鶴岡 1F「鳳凰の間」

〒997-0031 山形県鶴岡市錦町2-10

参加費：7,000円（課税・税込）

※懇親会にて優秀演題賞の発表と表彰式を行います。

※定員に達し次第、締め切らせていただきます。

- ① 事前に懇親会参加のお申し込みをされた方は、懇親会参加シールが貼付されているネームカードを入口にてご提示ください。
- ② 懇親会参加シールが貼付されているネームカードをお持ちでない方はご入場いただけませんので、当日忘れずにお持ちください。

## 5. スポンサーードセミナー

- ① スポンサーードセミナーにお弁当はつきません。
- ② スポンサーードセミナー時の飲食は持ち込み自由です。
- ③ 飲食はスポンサーードセミナー会場または学会の指定する飲食会場でお召し上がりください。
- ④ 大会は公共施設を借用しております。昼食などで出たゴミは販売店に返却するか各自でお持ち替わりください。

## 6. お弁当のご案内

事前申込制です。(当日の販売はございません。)

【受け渡し方法】当日、参加受付（QRコード読み取り）時に「お弁当引換チケット」をお渡しします。  
引換時間になりましたら指定の引換場所にてお弁当をお受け取りください。

【引換時間】1日目：2025年10月12日（日） 11：00～13：30

2日目：2025年10月13日（月・祝） 11：00～13：30

【引換場所】マリカ西館 3F「市民ホール ホワイエ」

【昼食場所】スポンサーードセミナー会場（講演会場）

## 7. クローク

《日時・設置場所》

・10月12日（日） 8：40～18：10 マリカ西館 3F「第2章会議室」

・10月13日（月・祝） 8：40～15：20 マリカ西館 3F「第2章会議室」

※傘や貴重品のお預かりは致しかねます。

## 8. 企業展示

・10月12日（日） 9：00～18：00 企業展示 マリカ東館 3F「展示室」

・10月13日（月・祝） 9：00～14：00 企業展示 マリカ東館 3F「展示室」

## 9. 聴講に関するご案内

○質疑応答について

- ① 質問者は座長の指示に従ってください。質問を始める前に、所属・氏名を述べてください。
- ② 時間の都合上、途中で打ち切ることもありますのでご了承ください。
- ③ 講演会場内では携帯電話はマナーモードに設定の上、通話をご遠慮ください。
- ④ 本大会を広く周知するため、会場にご参加の皆様による写真撮影および SNS への掲載は原則として許可させていただきます。

《聴こえに配慮したサポートについて》

第1～3会場では、文字表示やスピーカーなど、聴こえに配慮したサポートを行っています。ご希望の方は、どうぞスタッフにお知らせください。

## 10. Wi-Fi 環境（無線インターネット環境）について

一般の方（学外の方）にはご利用いただけません。予めご承知おきください。

## 11. 駐車場について

お車の場合は、駅前マリカ立体駐車場または近隣の有料駐車場をご利用ください。

（\*駅前マリカ立体駐車場：入庫から3時間まで無料。以後30分ごと100円。）

---

# 座長・発表者・講師・シンポジストの方へのご案内

---

## 《指定演題：座長・講師・シンポジストの方へ》

事前にご案内のお時間までに マリカ西館 3F 総合受付内「座長・演者受付」までお越しください。

### ○講演時間

- ① セッションにより異なります。別途個別にご連絡いたしました内容をご確認ください。

### ○進 行

- ① 次演者は、セッション開始 10 分前に会場内最前列の次演者席にご着席ください。
- ② 座長は、セッション開始 10 分前までに会場内最前列の次座長席にご着席ください。
- ③ 座長は、開始の合図が入り次第登壇し、セッションを開始してください。
- ④ 進行および質問の選択は座長一任といたしますが、時間厳守でプログラム指定時間内に終了するようご協力をお願いいたします。活発な討論が行われますようご配慮をお願いいたします。

### ○発表方法

- ① 発表は PC プレゼンテーションに限ります。
- ② スライド枚数に制限はありませんが、発表時間内に終了するようにご配慮ください。
- ③ 次演者席を設けますので前演者が登壇されましたら「次演者席」にご着席ください。
- ④ 演台上には、液晶モニター、キーボード、マウスが用意されております。登壇と同時にスライドショーの 1 枚目を投映いたしますので、その後の操作は演者ご自身で行ってください。
- ⑤ 円滑な進行のため、発表者ツールの使用はご遠慮ください。資料が必要な方は、事前にプリントアウトのうえ、ご持参ください。

### ○発表機材とデータ作成（※発表データは事前提出をお願いいたします。）

- ① 会場で使用する PC は Windows11、PowerPoint2021 がインストールされた PC を準備いたします。
- ② スライドサイズは（16：9）を推奨しております。（4：3 も映写可能です。）
- ③ フォントは文字化けを防ぐため標準フォントにて作成してください。
- ④ 動画、音声をご利用の場合は必ず他の PC で再生チェックを行ってください。  
※補足：Windows Media Player12 の初期状態に含まれるコーデックで再生できる動画ファイルで作成ください。（動画ファイルは H 264、AAC 準拠の MP4 か WMV 形式を推奨します）
- ⑤ Macintosh 作成データの場合は予め他の Windows パソコンで試写されてからデータを提出してください。
- ⑥ 発表内容において個人情報保護には十分ご配慮ください。

## 《実践交流会：座長の方へ》

- ① ご担当セッション開始 60 分前までに、マリカ西館 3F 総合受付内「座長・演者受付」までお越しください。
- ② セッション開始 10 分前までに、会場の座長席にご着席ください。
- ③ 実践交流会の発表は 1 演題につき発表 7 分、質疑 3 分の合計 10 分です。
- ④ 発表時間終了 1 分前と終了時にベルにてお知らせします。セッション時間を厳守した進行をお願い致します。
- ⑤ 質問の選択は座長に一任といたします。

## 《実践交流会：発表者の方へ》

- ① 発表データは事前提出となります。
- ② セッション開始の 10 分前までに会場の次演者席にご着席ください。
- ③ 実践交流：1 演題 10 分（発表 7 分、質疑 3 分）です。質疑応答は座長の指示に従ってください。
- ④ 発表時間終了 1 分前と終了時にベルにてお知らせします。セッション時間を厳守した進行をお願い致します。

### ○発表方法

- ① 発表は PC プレゼンテーションに限ります。
- ② スライド枚数に制限はありませんが、発表時間内に終了するようにご配慮ください。
- ③ 次演者席を設けますので前演者が登壇されましたら「次演者席」にご着席ください。
- ④ 演台上には、液晶モニター、キーパッド、マウスが用意されております。登壇と同時にスライドショーの 1 枚目を投映いたしますので、その後の操作は演者ご自身で行ってください。
- ⑤ 円滑な進行のため、発表者ツールの使用はご遠慮ください。資料が必要な方は、事前にプリントアウトのうえ、ご持参ください。

### ○発表機材とデータ作成（※発表データは事前提出をお願いいたします。）

- ① 会場で使用する PC は Windows11、PowerPoint2021 がインストールされた PC を準備いたします。
- ② スライドサイズは（16：9）を推奨しております。（4：3 も映写可能です。）
- ③ フォントは文字化けを防ぐため標準フォントにて作成してください。
- ④ 動画、音声をご利用の場合は必ず他の PC で再生チェックを行ってください。  
※補足：Windows Media Player12 の初期状態に含まれるコーデックで再生できる動画ファイルをお持ちください。（動画ファイルは H 264、AAC 準拠の MP4 か WMV 形式を推奨します）
- ⑤ Macintosh 作成データの場合は予め WindowsPC で試写されてからデータを提出してください。
- ⑥ 発表内容において個人情報保護には十分ご配慮ください。

## 大会特別企画 1

### 笑顔ひろがる、くらしの保健室 ちょっと一服あがらっしゃい！保健室で待つてさげの～

【相談員】栗本 孝雄（みどりまち文庫）  
猪股 晃博（コミュニティーナースやまがた）  
佐藤 香澄（みどりまち文庫・つるおか暮らしの保健室）  
伊藤 繭子（みどりまち文庫・つるおか暮らしの保健室）  
原田二三子（みどりまち文庫・つるおか暮らしの保健室）

地方では少子高齢化が進み、ひとりで悩みを抱える方も増えています。

「暮らしの保健室」は、子供から高齢者まで誰もが気軽に立ち寄れる場所として健康相談やワークショップを行い、参加者同士が交流しながら楽しみつつ、健康について学ぶことが大きな特徴です。

こうした活動を通じて人とのつながりを感じることで孤立感をやわらげ、安心して暮らせる地域づくりにつなげています。

東北・山形の地域にも、みんなの拠り所として「暮らしの保健室」があります。

## 大会特別企画 2

### 日本海総合病院の医療 MaaS 車両展示

当機構の日本海八幡クリニックでは、中山間地域における地域医療の取り組みの一環として、「医療 MaaS（マース）」の運用を行っている。同クリニックで行っている医療 MaaS は、看護師および事務職員が、医療資機材を搭載した医療カーで患者宅を訪問し、看護師が問診やバイタルサインの確認等を行った後、クリニックに待機する医師とオンラインで接続して診療を行うものである。

八幡地区では、路線バスの廃止等に伴い、当該クリニックへのアクセス手段が制限され、受診控えする高齢者が出てきている。そのため、医療 MaaS は、移動手段を持たない高齢者にも継続的な医療を提供可能にする、重要な施策となっている。



車両画像

## 大会特別企画 3

### 参加してみてもうだった？ みんなが思った「地域共生」を語ろう

【座長】瀬尾利加子（株式会社瀬尾医療連携事務所 / 代表取締役）  
【ファシリテーショングラフィック】佐藤 美恵（鶴岡市社会福祉協議会）

「地域共生」って、どんな社会なのだろう？どんな課題があるのだろう？そして、どんな仕組みがあれば、実現できるのだろう？

みなさん一人ひとりが、日々の活動の中で答えを探していることと思います。

今回の全国の集いでの基調講演やシンポジウム、ワークショップ、特別企画で何を感じ、全国の仲間との対話から何を考えましたか？

「自分のやってきたことは間違っていなかった」という確信。「こういう考え方もあったのか」という気づき。そして、未来の社会への希望。そういった想いを、ぜひ聞かせてください。

みなさんの想いをファシリテーショングラフィックで可視化し、みんなで分かち合ひましょう。

### 大井戸診療所と“ミルミルつながるプロジェクト”提供

#### 【展示内容】

「地域共生のための文化資源を使った取り組みーみんなとつながる上毛かるた」  
障害のあるなしを越えて、対話によって感覚を共有する、「みんなとつながる上毛かるた」と、今までの取り組みを紹介するブース

上毛かるた:上毛かるた(じょうもうかるた)は、群馬県の郷土かるたで、1947年に誕生しました。これは群馬県の名所や人物を題材にしたもので、地域の文化を学ぶための楽しい方法として広く親しまれています。上毛かるたは、学校内で毎年大会が開催されるほど人気があり、群馬県内では百人一首よりもメジャーな存在です。

### 株式会社ストローハット

#### 【展示内容】

#### 医療・介護連携を目的としたヘルスケア SNS「Net4U」

医療・介護連携を目的としたヘルスケア SNS「Net4U」を展示します。本システムは厚生労働省ガイドラインに準拠し、多職種間の情報共有・コミュニケーションを支援します。さらに、ご家族との連携やビデオ通話にも対応し、医療介護の現場を幅広く支援します。鶴岡市をはじめ先進地域で導入が進んでおり、単なるシステム提供にとどまらず伴走型での運用・活用支援を特徴とし、地域共生社会の推進に寄与します。

### セコム医療システム株式会社

#### 【展示内容】

#### クラウド型電子カルテ / 「セコム・ユビキタス電子カルテ」「セコム OWEL」

##### ◎セコム・ユビキタス電子カルテ

2001年にクラウド型電子カルテのパイオニアとして販売を開始し、多数の導入実績がある電子カルテ。安全な電子カルテ専用ネットワークの構築・管理等をセコムから提供します。

医療機関同士が地域医療連携を目的に診療録を共有する機能や透析システム連携、再来受付機、リハビリシステム連携、など他部門システムとシームレスに連携できます。

##### ◎セコム OWEL

2015年より販売を開始した無床外来診療所・無床在宅診療所向けに特化した電子カルテ。

直感的に操作しやすいデザインで医師・事務員を問わずどなたでも扱いやすい操作感を実現し、医療機関様だけのシステム導入を目指す商品です。

様々な在宅診療向け機能を有しており、安価な価格帯で、外来診療と在宅診療の双方に対応しています。

## ユニバーサル・サウンドデザイン株式会社／株式会社聴脳科学総合研究所

### 【展示内容】

**対話支援システム コミューンシリーズ**  
**難聴高齢者との意思疎通・意思決定支援をサポートする**  
**耳につけないコミュニケーションロボット**

「聞こえ」の課題は、認知症のリスクや高齢者の生活の質と意思決定に直結します。本ブースでは、難聴高齢者との意思疎通・意思決定支援をサポートする「耳につけないコミュニケーションロボット「コミュニケーションシリーズ」をご紹介します。

このシステムは、聞き取りやすく明瞭度の高い音に変換する技術を搭載した対話支援デバイスです。会話をクリアで聞き取りやすくすることで、高齢者が聴覚を通じて意思疎通を図ることを強力にサポートします。全国の医療機関や介護施設、行政機関など16000台が活用されています。難聴高齢者との意思疎通が説明が可能となり、高齢者の主体的な意思決定を助けます。ぜひ、その効果を体験してください。

## メタジェンセラピューティクス株式会社

### 【展示内容】

**つるおか献便ルームご紹介・腸内細菌ドナー募集**

メタジェンセラピューティクス株式会社は“マイクロバイームサイエンスで患者さんの願いを叶え続ける”ことをパーパスとし、腸内細菌研究に基づく医療と創薬でソーシャルインパクトを生み出す、順天堂大学、慶應義塾大学、東京科学大学発スタートアップ。2025年4月には日本初の献便施設「つるおか献便ルーム」を開所。腸内細菌ドナーから集めた便に含まれる腸内細菌を活用した医薬品で、潰瘍性大腸炎をはじめとする難病の新たな治療法確立を目指し研究開発を行っている。現在、鶴岡市を含む庄内地域で腸内細菌ドナー募集中。鶴岡市立荘内病院を提携医療機関に迎えたほか、地域企業とのさまざまな協力体制を構築している。

ごあいさつ

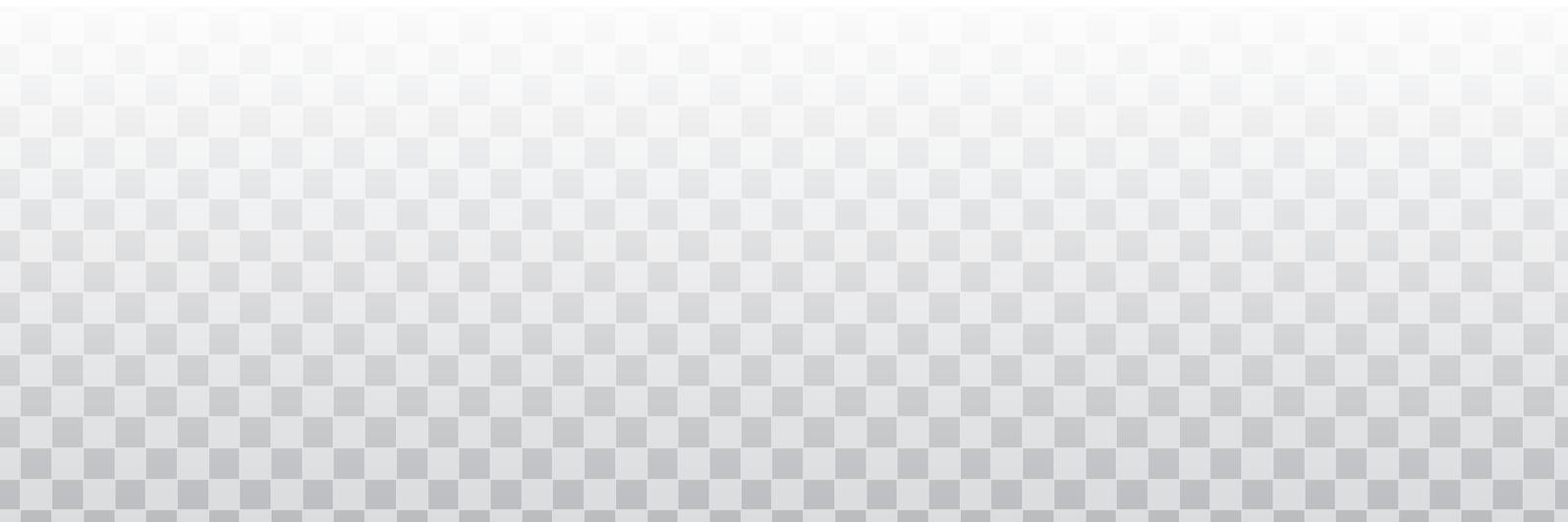
1  
日目

実践  
交流会

2  
日目

助成・協賛  
後援・広告

# 大会 1 日目 プログラム



## 出羽三山とウェルネスツーリズム ～自己啓発を求める旅行者層～

【座長】佐藤 繁義（鶴岡市立荘内病院 / 事務部長）

【演者】ミヨ・サラ（DEGAM 鶴岡ツーリズムビューロー / 事業課係長）

令和6年度、出羽三山を訪れる外国人宿泊者数は令和5年度と比べて倍以上に増加し、史上最高の1万3千人を超えました。特徴的なのは、アジア出身者よりもフランス、ドイツ、アメリカ、スペインなどの欧米豪からの旅行者が多い点です。

日本経済新聞によると、訪日外国人の消費額は増加傾向にあり、特に山形県の伸びが顕著です。観光庁が2024年1月に発表した調査によれば、2023年の訪日外国人旅行消費額は5兆2923億円で、コロナ前の2019年と比べて9.9%増加しました。また、1人当たりの旅行支出は21万2000円で、同33.8%増となっています。月別の伸び率を見ると、山形県は2024年1月に約10.7倍、2月に約11.7倍、3月には約5.2倍となっており、他県の伸びを大きく上回っています。

訪日外国人が旅行先に求めるものはさまざまですが、出羽三山を訪れる多くの方々は特に精神的な気づきやインスピレーションを求めています。これは、1400年以上途絶えることなく継承されてきた出羽三山修験道に根ざしています。神仏分離や修験道禁止などの変遷を経て、出羽三山は独自の強いコミュニティ感と、蝦夷から受け継がれた山岳信仰に基づく唯一無二の精神文化によって存続してきました。そのパワフルな精神文化に触れたいという思いから、多くの人々が訪れ、世界遺産に登録されていなくても認知度は年々高まっています。実際、ローンリープラネットやナショナルジオグラフィックなどの国際的旅行メディアも、2020年に東北を訪れるべき地域として選出し、その中で出羽三山は「東北のおすすめスポット」第1位に挙げられました。また、ウェルネスツーリズムと大きくからまれている「アドベンチャーツーリズム」の特徴と、出羽三山との関連性について触れさせていただきたいと思います。

本日は、出羽三山とウェルネスツーリズムの現状、そしてそこから生まれる可能性や地域への貢献についてお話しさせていただきたいと思います。

### ■略歴

#### ミヨ・サラ

フランス出身、1993年生まれ。2017年来鶴。2歳と1歳児の母。

DEGAM 鶴岡観光局でビジネスチーフとして、フランス語圏・英語圏向けの観光商品開発、プロモーション、販売、地域パートナーシップ構築を担当。政府の持続可能観光プロジェクトやイベント運営も手掛ける。

以前はJETプログラムで鶴岡市役所観光課にて国際観光促進、パンフレット・ウェブ制作、SNS運営に従事。現在は北日本地域でフランス語・英語ガイドとして冒険・文化観光に特化。

学歴：トゥールーズ大学日本学修士1（優）、早稲田大学交換留学、トゥールーズ大学LLCE日本語専攻（優）。

## 先端生命科学と地域づくり

【座長】高橋 健彦 (鶴岡商工会議所 専務理事)  
【演者】鶴巻 啓一 ((株)サリバテック 研究開発部部长)  
中原 拓 (メタジェンセラピューティクス(株) 代表取締役 CEO)

鶴岡市は、多くの地方都市と同様、人口減少が続いており、大きな課題となっています。

鶴岡市では、この課題に対応するため、基幹産業である農業や工業に加え、市内に山形大学農学部など4つの高等教育機関が集積しているという強みを生かし、研究成果の活用による新産業の創出を成長戦略の一つに掲げて、バイオサイエンスを核としたまちづくりを進めています。そうしたバイオクラスターの集積拠点として、鶴岡サイエンスパークを開発してきました。

鶴岡サイエンスパークは、2001年に開設された慶應義塾大学先端生命科学研究所(慶應先端研)を中心に発展してきました。

鶴岡市は、学術産業都市の構築を基本となる戦略政策の柱に据え、大学整備プロジェクトの中で慶應義塾大学の研究所の誘致活動を続け、設置されることとなりました。慶應先端研は、開設以来、慶應義塾と県、鶴岡市の三者協定に基づき、県・市とともに地域活性化に取り組んできました。

鶴岡サイエンスパークでは、慶應先端研のベンチャー企業が現在9社誕生して、順調に事業を展開し、研究者やベンチャー企業のスタッフなど約500名が働くエリアとなっており、年間41.6億円の経済波及効果が生まれています。

また、国立がん研究センター、荘内病院との連携によるがんをはじめとする疾病研究の推進や、遠隔診療システムの構築にも取り組んでいます。

鶴岡商工会議所では、鶴岡サイエンスパークの市民理解の促進や、ベンチャー企業と地元企業との連携の強化を図るため、ベンチャー企業が出展する「鶴岡サイエンスパークまつり」などの事業を展開しています。

このセッションでは、そうしたベンチャー企業、特に健康・医療に関する事業を展開している企業の中から、2社の活動をご紹介します。(株)サリバテックは、だ液を用いた疾患検査技術、メタジェンセラピューティクス(株)は、腸内細菌を活用した医療技術や医薬品の開発事業を展開しています。両社の最新動向について発表いただきます。

**“映画”の力でひらく、地域共生の扉**

【座長】小倉 和也（医療法人はちのへファミリークリニック 理事長・院長）

【シンポジスト】

山国 秀幸（株式会社ワンダーラボラトリー代表取締役）

佐藤 豊継（鶴岡市社会福祉協議会 常務理事・事務局長）

少子高齢化や人口減少が進む中、かつて人々が集う場として存在した地方の映画館は次々と姿を消しています。そんな中、鶴岡市ではまちづくりの一貫として行政も巻き込んだ映画館の存続が実現しています。本シンポジウムでは、この取り組みを進めた鶴岡市社会福祉協議会の田中豊継氏と共に、「ケアニン」「ピア」「オレンジ・ランプ」など、在宅ケアや認知症などの社会課題をテーマにした映画を数多く手がけられている映画プロデューサーの山国秀幸氏を迎え、映画が地域の文化や人々のつながりを育む場を作る上でどのように機能するか、地域共生の新たな形を模索します。

**<山国秀幸（株式会社ワンダーラボラトリー代表取締役）>**

映画館や配信に依存せず、地域に根ざした「市民上映会」という形で映画を届ける取り組みを続けてきました。介護を描いた「ケアニン」シリーズ、在宅医療をテーマにした「ピア」、認知症をテーマにした「オレンジ・ランプ」などを自ら取材・脚本・プロデュースし、上映会は累計5,000回、観客40万人を超えています。市民会館や公民館に人々が集まり、共に笑い、泣き、語り合う体験は、地域の絆を深め、社会課題を“自分ごと”として考える契機となっています。映画は単なる娯楽にとどまらず、地域をつなぎ未来を紡ぐ力を持つ。その実践を踏まえ、映画プロデュースの方法と上映会事例などを紹介させていただきます。

**<佐藤豊継（鶴岡市社会福祉協議会 常務理事・事務局長）>**

鶴岡市では本部移転先を探す鶴岡市社協、経営危機に瀕する映画館「鶴岡まちなかキネマ」、中心市街地活性化を図る行政—それぞれの課題を抱えた3者が協働し、映画館併設の複合施設を創設。3者協定により、従来の枠組みを超えた一貫通貫の課題解決を実現しました。

映画館・商店街をフィールドに展開する市民主体の「山王キネまち大学」では、認知症や聴覚障害などのドキュメンタリー映画とトークショーを組み合わせた「映画×福祉」イベント、防災映画とNPO・教育委員会連携による「映画×防災」フォーラムなど、分野横断を超えた「ごちゃまぜ」アプローチを実践。映画という共通言語が多様な主体を自然に繋ぎ、新たな気づきと地域の絆を創出しています。

## 医療 DX in 鶴岡 ～鶴岡地区における ICT を活用した包括的医療体制の構築～

【座長】三原 一郎（鶴岡地区医師会 / 三原皮膚科）

【シンポジスト】

高橋美香子（鶴岡協立病院）

阿部 侑司（訪問看護ステーション「ハローナース」）

丸谷 宏（鶴岡市立荘内病院）

遠藤 貴恵（地域医療連携室「ほたる」）

山形県鶴岡地域では、広域型地域電子カルテシステム「Net4U」が2001年より運用されています。本システムは、2000年に経済産業省主導の「先進的ITを活用した地域医療ネットワーク構築事業」において開発されたものであり、地域医療情報の集約と共有を目的として設計されています。2012年には、医療提供体制が病院中心型から地域包括ケアシステムへの転換を迎える中、「医療・介護連携を促進するヘルスケア・ソーシャルネットワーク」として大幅な見直しが行われました。

「Net4U」には複数のサブシステムが内包されており、その一つである家族参加型ツール「Note4U」は、スマートフォンやタブレット端末上で稼働するアプリケーションです。これにより、患者およびその家族が「Net4U」を介して医療・介護チームとリアルタイムで情報を共有できる環境が整備されています。既に100件を超える導入実績があり、とくに遠隔地に居住する家族の安心感向上に寄与しています。

また、2006年には地域連携パス推進協議会が設立され、脳卒中や大腿骨近位部骨折など、高度な地域連携を要する疾患については全例登録を原則とした地域連携ITパスが運用されています。

本シンポジウムでは、Net4Uの経緯や現状についての基調講演のほか、医師や訪問療法士による実践事例、神経内科医による脳卒中連携パスの運用報告、最後に情報システムの運用に不可欠な事務局機能についての発表を予定しています。

これらの報告をもとに、医療情報ネットワーク普及の課題や展望について皆様とディスカッションしたいと思います。

## 住民参加サイコウ！

【座長】秋山 美紀（慶應義塾大学 教授 / 「からだ館」プロジェクトリーダー）

【シンポジスト】

木佐貫 篤（宮崎県立日南病院患者支援センター センター長 / にちなん医療市民サポーターズ監修）

小林まゆみ（慶應義塾大学 先端生命科学研究所「からだ館」プロジェクトスタッフ）

伊藤 玲緒（北海道鷹栖町 地域プロジェクトマネージャー /

慶應義塾大学政策・メディア研究科北海道東川町 地域おこし研究員）

住民が主体的にまちづくり等に参加することの重要性が言われているものの、実際のところ行政がお膳立てした場に形だけ参加という例も少なくない。そもそも「住民」とは誰を指すのか、行政職員や医療者は住民に含まないのか、「主体になる」とはどのようなことを指すのか…などなど、疑問が後をたたない。

このセッションは、「地域共生社会」が目指すところの、縦割りや「支え手」「受け手」という関係を超えて、人と人がつながり、地域をともに創っていくこと、すなわち「住民主体のまちづくり」がテーマである。カタカナの「サイコウ」には（おやしギャグ的ではあるが）、住民参加の進め方や概念そのものを捉えなおしてみること（＝再考）により、多様な人々が地域社会に彩りを与え（＝彩光）、ゆくゆくは少子高齢化に苦しむ地域社会を再び活性化（＝再興）につなげる、それができればこんな素晴らしいことはない（＝最高）、というそんな思いを込めた。自分らしい住民参加のかたちや意味を模索していただきたい。

### 木佐貫 篤

宮崎県日南市では2014年から市主催の市民が医療を学ぶ講座「地域医療リーダー養成講座日南塾」を毎年実施している。2017年には日南塾卒業生を中心に「にちなん医療市民サポーターズ」が設立され、医療を学び啓発する活動に継続して取り組む。これらの取り組みに塾長／監修として関わってきた立場より成果などをお話する。

### 小林 まゆみ

慶應義塾大学先端生命科学研究所からだ館のスタッフとして5年目。それ以前は鶴岡市の保健師として36年間、「住民とともに歩む保健師活動」を目指し地域活動に従事してきた。当日はからだ館のテーマ「やさしく、賢く、温かな地域をめざして」にむけ、地域住民と一緒に取り組んできた活動や楽しく学ぶ健康大学などを紹介する。

### 伊藤 玲緒

関係人口施策として「ふるさと住民登録制度」の運用に向けた議論が活発化している。これまでの「与えられるふるさと」から「自ら選び関わるふるさと」へ変化させる時代に突入している今、取り組みが始まった「ひがしかわ若者ふるさと住民制度」等について紹介し、関係人口増加策を議論したい。

## NPO ネットワークの活動報告

## 在宅医療の現場における患者・家族からの暴力・ハラスメント対策研修の開発

【座長】小倉 和也（医療法人はちのへファミリークリニック理事長・院長）

【シンポジスト】

三木 明子（関西医科大学看護学部・看護学研究科教授）

柳田 千草（合同会社 Big Smile びっぐすまいる訪問看護ステーション管理者）

内田 直樹（医療法人すずらん会たろうクリニック理事長・院長）

在宅医療の現場では、患者・家族から医療・介護職に対する暴力やハラスメントが長年にわたり深刻な課題となってきました。2022年には在宅医とスタッフが患者家族により殺傷されるという痛ましい事件も発生し、現場における安全確保と対策の必要性は一層明らかとなりました。ケア提供者の安全は、良質なケアを継続的に提供するための前提であり、対策推進は喫緊の課題です。しかしながら、現場で必要とされる知識や技能を系統的に学ぶ機会は限られており、個人や事業所として実効性のある対策を身につけるための研修プログラムの開発が急務でした。

こうした背景のもと、10年以上にわたり対策と研修に取り組んできた藤田愛氏（医療法人社団慈恵会北須磨訪問看護・リハビリセンター所長／ネットワーク理事）を中心とした専門家グループの協力のもと、NPO 地域共生を支える医療・介護・市民全国ネットワークは、公益財団法人在宅医療助成勇美記念財団の助成を受けて、訪問看護師を主対象とした「訪問看護師が患者・家族から受ける暴力・ハラスメント対策研修」を開発しました。

研修は Basic コースと Advanced コースの2段階で構成され、試行研修を3回実施した上で、参加者のフィードバックを踏まえ改良を重ねました。Basic コースでは①基礎知識・価値基準、②法的理解、③エスカレーション予防、④認知症対応を、Advanced コースでは①リスク評価、②危険予知、③契約の法的性質、④被害者心理と対応、⑤管理者の役割、⑥アクションプラン作成という構成としました。

本シンポジウムでは、研修開発に携わったメンバーがそれぞれの専門的立場から成果を報告します。医療現場における暴力・ハラスメント対策研究の第一人者である三木明子氏、訪問看護ステーションを運営しながら暴力・ハラスメント対策研究に取り組む看護師の柳田千草氏、そして認知症専門医で在宅医療を実践しネットワーク理事でもある内田直樹氏が登壇し、研修開発の経緯と内容を共有します。参加者の皆様と現場感覚をすり合わせながら意見交換を行い、今後の研修普及と対策推進に繋がりたいと考えています。多くの皆様のご参加を心よりお待ちしております。

## 障害平等研修－障害当事者と考える障害理解

【座長】平向 正包 (NPO 法人やまごや / 代表理事)

【メインファシリテーター／認定障害平等研修ファシリテーター】

飯島 邦敏 (DET 群馬 / 代表 NPO 法人障害平等研修フォーラム認定ファシリテーター)

【サブファシリテーター／認定障害平等研修ファシリテーター】

梅津真由美 (難病・障がいコミュニティ にじいろ代表 / NPO 法人障害平等研修フォーラム登録ファシリテーター)

今井 奈央 (NPO 法人やまごや / NPO 法人障害平等研修フォーラム登録ファシリテーター)

本ワークショップは、企業や自治体、NPO、教育機関など、あらゆる組織を対象に、障害のある人を排除しないインクルーシブな組織・社会づくりを参加者自身が主体となって考えていくプログラムです。

近年、障害のある人への配慮や理解の重要性は広く認識されつつあります。しかし、その多くが「助けてあげべき存在」といった同情や、個人の頑張りを求める「医学モデル」の視点に留まっているのが現状です。これに対し、障害平等研修 (Disability Equality Training: DET) では、「障害とは個人の心身機能の違いではなく、社会に存在する様々な障壁 (バリア) によって作りだされるものである」という「障害の社会モデル」の考え方を基本理念に据えています。本研修の目的は、この「社会モデル」の視点を知識として学ぶだけでなく、対話を通じて参加者一人ひとりが状況を分析する視点を獲得し、行動変容へと繋げることにあります。

そのために、DET では講師が一方向的に教える講義形式を採りません。参加者は少人数のグループに分かれ、障害者自身がファシリテーター (進行役) となり、イラストやビデオなどの教材を使いながら対話を進めます。ファシリテーターは答えを提供するのではなく、「何が問題か」「なぜそれが問題なのか」といった問いを投げかけることで、参加者が自らの力で課題を発見し、その本質を探り、解決策を創造していく「発見型学習」のプロセスを導きます。障害のある人との対話の中から生まれるこの「気づき」こそが、理解への第一歩となります。

DET は、英国の障害者自身の権利擁護運動から生まれ、世界に広がりました。日本でもその有効性が評価され、東京 2020 オリンピック・パラリンピック競技大会では約 8 万人の大会ボランティア (フィールドキャスト) 研修に正式導入された実績があります。

今回の全国の集いでは、認定メインファシリテーターである飯島邦敏氏 (DET 群馬代表) を主導役に、開催地である地元庄内を拠点に活動する梅津真由美氏、今井奈央氏がサブファシリテーターとして加わります。90 分という時間の中で、DET の根幹をなす前半部分を体験していただきます。共生社会の実現に向けた本質的なアプローチを、ぜひ会場でご体感ください。

## 豪雨災害が導いた地域づくりの転換点 ～現場発・骨太の地域共生社会の実践～

【座長】木佐貫 篤（宮崎県立日南病院 / 副院長）

【演者】岩村 正裕（宇和島市地域包括支援センター / 所長）

2018年7月の西日本豪雨により、愛媛県宇和島市は甚大な被害を受けた。特に中山間地域である三間地区では、発災直前から進めていた住民主体の地域づくりの取り組みが、災害対応の実践力として発揮された。地域住民が日頃から「もみの木」などの拠点を中心に築いてきた関係性や互助の力が、断水や物資不足といった厳しい状況下でも、自立的かつ機動的な支援活動を可能にした。

この経験を通じて、多職種・多機関による連携が深まり、支援の取り組みは災害対応から生活困窮、高齢化、地域孤立といった平時の地域課題へと自然に広がっていった。こうした動きは、「地域力強化推進事業」や「多機関協働による包括的支援体制構築事業」など、地域共生社会の実現を目指す施策へと接続し、後の「重層的支援体制整備事業」にもつながる多層的な実践へと発展していくこととなった。

本講演では、発災直後の混乱期から、避難所アセスメント、生活再建実務者会議、個別避難計画の作成、そして新たな生活における孤立防止策まで、各フェーズでの現場対応の軌跡を紹介する。これらの取り組みはすべて、災害と福祉の垣根を越え、福祉・防災・まちづくりが一体化した地域づくりの実践であった。

こうした実践は現在も継続・進化しており、災害対応力と日常的な支援ネットワークの強化を両立する手段として、ICTの活用にも注力しており、ヘルスケア SNS、ビデオ通話機能、災害時データベースなどを組み合わせた福祉避難所の開設訓練を継続的に行い、地域の多職種・多主体連携の実効性を高めている。

さらに直近では、JICA 海外協力隊との協働により、海外派遣前の訓練生が地域を訪れ、住民とのふれあいを通じて社会課題を発見・解決に挑む「グローバルプログラム」を実践中である。国際協力の視点を地域課題に活かす、新たな交流と学びの場としても注目されている。

「豪雨災害が導いた地域づくりの転換点」として、現場からの骨太の実践を通じて見えてきた、支援のあり方と持続可能な地域共生社会の構築への道筋を考察する。

共催：株式会社ストローハット

## グリーフケア 見えない心に触れる ～医師と納棺師～

【演者】丸山 裕生（納棺師 / あまねや代表）  
三嶋 泰之（医師 / 医療法人社団佐倉の風理事長）

2019年東京大会以降、シンポジウムや実践交流会など形を変えつつもグリーフケアについて語り合う場を設けてまいりました。本大会では2023年名古屋大会、2024年福岡大会に引き続いてスポンサードセミナーという形式です。

グリーフケアについての説明は不要かもしれませんが、改めて一つご紹介します。「グリーフケアとは、スピリチュアルの領域において、さまざまな喪失を体験し、グリーフ（深い悲しみ、悲嘆、苦悩）を抱えた方々に、心を寄せて、寄り添い、ありのままに受け入れて、その方々が立ち直り、成長し、そして希望を持つことができるように支援すること」（上智大学グリーフケア研究所）

死後に生じる感情や対応のことを示すのがグリーフケアについての一般的理解でしょう。しかし、亡くなった後にいきなり「さあ、グリーフケアだ！」と始めるものではありません。グリーフを抱えた方々に寄り添って支援するには、それまでの経緯やお互いのことをしっかり把握していないといけません。すなわち、グリーフケアはターミナルケアと同様、そうなる以前からの関わりが大切だと考えます。

私（三嶋）がグリーフケアに関心を持つようになったのは、死亡確認をして死亡診断書を渡してそれでおしまいというのが極めて中途半端に感じたことからです。患者さんが亡くなっても、家族の時間はずっと続きます。大きな喪失感、これで良かったのかという葛藤、悲嘆に暮れる日々など、家族のその後の日常がどのようなになっているのか気になって仕方なかったのです。

さて、本セミナーでは、最初に三嶋がお話いたします。内容は、①当院で実施しているグリーフケアの紹介②残された家族の心情、の2点です。グリーフケアには様々なスタイルがあり、どれが正解というものはありません。当診療所では2年に一度、亡くなった患者さんの家族をお招きして偲ぶ会を開催しており、その内容をお伝えいたします。残された家族の心情は当然見えないものですが、それに触れるにはどうしたらよいか皆さんと考えていけたらと思っています。

続いて丸山氏のお話を聞いていただきます。丸山氏はここ鶴岡市出身で、納棺師歴20年のあまねや代表です。“あまねや”という屋号は「あまねく照らす光や、あまねくめぐむ雨のように、どんな人にも分け隔てなく平等に接する、という心構えから名付けたそうです。納棺師とはどういうことをする職業なのか、納棺師という立場からみたグリーフケアとは何なのか、とても興味深い話が聞けることと思います。

最後に、2人のクロストークという形でグリーフケアについて深く切り込んでいく予定です。その日まで関わる医師、その日から関わる納棺師。接点のない者どうしが語り合うことで、何が生まれるのか。サブタイトルに据えた「見えない心に触れる」とはということか。

グリーフケアについて考えることが、当ネットワークの名称「地域共生を支える」そのものになる気がします。元気な時からお節介に関わってこそそのグリーフケアです。今日のここでの話を聞いていただくことで、皆様のグリーフケアへの理解、親近感が深まることを願っております。

共催：医療法人社団佐倉の風 さくら春色クリニック

## 認知症の精神療法：なぜ聴くだけでも効果があるのか

【座長】大澤 誠（医療法人あづま会 大井戸診療所 理事長・院長）

【演者】繁田 雅弘（医療法人社団彰耀会 栄樹庵診療所 院長）

対象が認知症の人か否かに関わらず、精神療法においては、ただ話を聴くだけで一定の効果が得られるとされる。それは、人間関係の中での「聴かれる体験」そのものが、治癒的な意味を持つからである。人は、自らの感情や体験を言語化し、それを他者に受け止められることによって、自分自身の状態を見つめ直し、理解し直すことができる。この過程は、いわば自己理解の深まりであり、それ自体が心理的安定につながるとされる。とくに認知症とともに生きる人は、認知症に罹患したことで、しばしば心に深い傷を繰り返し負い、誰にも話せない苦悩や葛藤を抱えている。そのような中で、否定や評価をされることなく、関心と共感をもって耳を傾けてもらう経験は、孤立感や劣等感を和らげ、自己価値の回復を促すとされる。「そのままの自分でいてよい」、「自分自身を誰かに理解してもらおう」という体験は、治療的な安心感をももたらすものである。また、語ることで自身の感情や記憶が整理され、思考や感情の混乱が次第に構造化されていく。また、たとえば、面接場面で治療者が受容的に接することで、認知症の人の心の中にも「自分を理解しようとする誰か」が形成されていく。その心の中の誰かとともに、自分の感情や記憶を見つめ直したり、つらい感情に耐えたりすることが可能となる。つまり、治療者との関係が、心の中にも取り込まれ、それが自己理解を支える働きをする。すなわち聴かれることによって認知症の人の心の中に新たな視点や意味づけが生まれるのである。たとえ治療者が積極的に助言を行わなくとも、沈黙を尊重しつつ注意深く傾聴する姿勢そのものが信頼関係（治療関係）を築き、その関係性が治癒の場となるのである。このように、精神療法における「聴く」という行為は、単なる受動的な姿勢ではなく、患者の語りを促し、支え、意味づけを可能にする能動的な営みなのである。聴くだけでも効果があるのは、その語りの中にすでに治癒の力が含まれているからである。

共催：一般社団法人栄樹庵

## 楽しく悩む

### ～地域で実践困難な状況をポジティブに変えるための視点と工夫～

【座長】三浦 眞弓（特定非営利活動法人 tomoni なごや 理事）

【演者】岸田 徹（特定非営利活動法人がんノート 代表理事）

本セミナーでは、患者や一般市民が医療や地域社会に求める本音に焦点を当て、その共有を通じて利用者、患者、家族などが対等の立場でお互いのニーズを深く理解し合うための具体的な方法論と実践事例を紹介します。

病気や介護、生活上の困難に直面したとき、私たちはしばしば深い悩みに直面します。その悩みを単に受け入れるだけでなく、今大会のテーマである「楽しく悩む」という視点を持つことで、困難な状況をより建設的に捉え直すことができるのではないのでしょうか。

前半では、がんノート代表の岸田氏より、自身のがん体験を通じて得た気づきと、がん患者インタビュー YouTube 番組「がんノート」設立に至る経緯をお話しします。そのなかでは、がんという病気に直面した際の心理的転換点や、困難を乗り越えるためのレジリエンス（回復力）について、実体験に基づいた具体的なエピソードを交えながらご紹介します。

後半は、パネルディスカッション形式で、実際の患者相談事例を題材に座長である tomoni なごやの三浦氏とともに議論を展開します。例えば、医師とのコミュニケーションの困難さや、治療過程での様々な悩みに対して、患者側と医療従事者側の両方の視点から解決策となるヒントを探ります。また、地域において患者や家族が求める具体的な支援やサービスについても言及し、参加者の皆様とともに地域でできることを考えていきたいと考えています。

本セミナーの特徴は、一方向の講演ではなく、さまざまな視点を交えた双方向を重視することです。医療従事者、福祉関係者、患者、そのご家族、そして一般市民の方々が、それぞれの立場から考え、相互理解を深める場となることを目指しています。

「楽しく悩む」という考え方を基盤に、医療現場や地域社会で実際に活用できる具体的なヒントを見つけ、参加者一人ひとりが自分の地域や日常生活において実践できる方法を持ち帰っていただけるセミナーです。

共催：特定非営利活動法人 tomoni なごや

## 口腔ケアと栄養管理・食支援

ネットワーク理事座長：大川 延也（大川歯科医院）

鶴岡大会座長：佐藤 美恵（鶴岡市社会福祉協議会）

番号	発表者	所属	演題名
1	町山 裕美	医療法人社団実幸会 いらはら診療所 在宅医療部	新規に訪問診療を開始した全患者に対して栄養 アセスメントを行った取り組みについて
2	三原 美雪	南庄内たべるを支援し隊	「南庄内たべるを支援し隊」はたべることの応 援団
3	大谷 学	医療法人 大谷歯科	生きる力を与える義歯治療 ～即日改造義歯～
4	渡辺 ふじ子	お口育ての会	お口育て難民をなくすために ～庄内での0歳からの口育の普及への挑戦～
5	荒金 英樹	京介食推進協議会 会長 愛生会山科病院 外科	京都の食支援によるまちづくりと食支援ネット ワークの構築

## 1

## 新規に訪問診療を開始した全患者に対して栄養アセスメントを行った取り組みについて

発表：町山 裕美

所属：医療法人社団実幸会いらはら診療所 在宅医療部  
共同演者：佐々木 穰史

【背景と目的】食事や栄養に関するリスクを抱える在宅療養患者が多く存在するにもかかわらず、在宅訪問栄養指導が活性化しない傾向にある。これは、在宅において管理栄養士の存在が知られていないことが考えられた。そこで新患全戸訪問を行い、有リスク患者の早期発見及び管理栄養士の訪問制度を知ってもらうこととした。

【方法】2024年4月1日からの1年間、新患全てに対して管理栄養士が訪問した。栄養アセスメントとともに、有リスクと評価した患者に対しては栄養食事指導も併せて実施した。

【結果】アセスメントの結果、栄養指導が必要な患者は61.6%と半数以上であった。また、事後に実施したアンケートでは、管理栄養士の訪問制度を知れた・心強いという意見があった。

【考察】早期の栄養アセスメントが疾病の回避や重症化の予防に一部有効であり、管理栄養士の存在を認識してもらうことで、在宅訪問栄養食事指導の活性化につながる可能性があると考えられた。

## 2

## 「南庄内たべるを支援し隊」はたべることの応援団

発表：三原 美雪

所属：南庄内たべるを支援し隊  
共同演者：田口 充、小川 豊美、足達 香、  
澤田 正佐子

「南庄内たべるを支援し隊」は食べることに困っている方を多職種チームで訪問し、ご本人の希望により沿いながら、栄養・口腔・リハビリ等多方面から取り組んでいる。メンバーは、医師、看護師、歯科医師、歯科衛生士、管理栄養士、薬剤師、言語聴覚士、作業療法士、理学療法士、事務員からなる。特徴は、地域の病院や診療所、専門士会など、多施設から多職種で構成されていることである。広範囲、多人数では難しい情報の共有は、当地区で長年活用されている地域電子カルテ Net4U を利用してリアルタイムに行われている。個々人に合ったきめ細やかな目標を立て「本人・家族用アウトカムカード」を用い共有している。「南庄内たべるを支援し隊」は、誰もが、住み慣れた地域で最後までおいしく食べ、笑顔で暮らすことを全力でサポートしている。ここにその活動を紹介する。

## 3

## 生きる力を与える義歯治療 ～即日改造義歯～

発表：大谷 学

所属：医療法人 大谷歯科

在宅や施設において、義歯に対する順応性が低下した高齢者や、フレイル・認知機能が低下した要介護高齢者に、義歯を新たに作成しても調整に時間がかかるが、満足に使ってもらえないことも多い。このような高齢者に対して、慣れ親しんだ義歯に手を加え改造し、その方の昔の顔に戻すことによって、また義歯の維持・安定を回復させることで、生理的に最も「食べやすい」「飲み込みやすい」「話しやすい」形態を作り上げていくことが大切である。特に施設や在宅で、栄養状態改善を急ぐ場合は即日義歯改造を行なっている。今回は即日義歯を改造し、咀嚼機能の向上による栄養状態の改善だけでなく、患者さん自身が、好きなものを食べられるようになった事により QOL が向上し、そして患者さんへ「生きる力」を与えることができた症例を解説させていただきます。

## 4

## お口育て難民をなくすために ～庄内での0歳からの口育の普及への挑戦～

発表：渡辺 ふじ子

所属：お口育ての会

かつて山形県は、虫歯罹患率ワースト常連の地域でしたが、予防知識の普及により、虫歯予防は“当たり前”になりました。現在、保護者の関心は「歯並び」へと移っていますが、乳幼児期の歯並び予防については、情報が乏しく相談先も不明確な現状があります。私は歯科衛生士として47年目にして、歯並びの多くは環境要因で予防できると知り、「0歳からのおうちでお口育て」の講座を始めました。本発表では、庄内地域での実践報告と、地域の助産師や保育士など多職種との連携によって「お口育ての安全基地」を広げる取り組みを紹介します。地域の子どものための健康のために、今、歯科衛生士ができることを考えます。

## 京都の食支援によるまちづくりと食支援ネットワークの構築

発表：荒金 英樹

所属：京介食推進協議会 会長 愛生会山科病院 外科

共同演者：和田 智仁（京滋摂食嚥下を考える会 代表世話人）

山下 和典（NPO 法人 Life is beautiful 理事長）

障がい者にとって食支援は生活を支える重要な介入だが、一般市民にとって高いハードルに見られ、障がい者の社会参加をはばむ要因となることも少なくない。そこで地元の一般食産業との連携で介護食を開発・提供する活動が全国各地で広がりをみせている。それには地域での医療、介護の連携体制の整備と地域の一般市民の深い理解と支援が不可欠であるが課題も多い。京都では摂食嚥下連絡票を開発、京都府共通基準とすることで地域連携の基盤とし、実践する手段として訪問管理栄養士の活動を支援してきた。そのうえで京都の伝統食産業との連携で様々な新たな介護食を開発し、それを管理する「京介食」というブランドを立ち上げ、京都の旅行プラン作成などの「まちづくり」に取り組んでいる。現在は各地でのこうした活動を支援する交流会や EC サイトの開発などの計画をすすめている。その現状を報告する。

## 緩和ケアと看取り

ネットワーク理事座長：三嶋 泰之（医療法人社団佐倉の風 さくら春色クリニック）

鶴岡大会座長：小川 貴之（一般社団法人 桐生市医師会）

番号	発表者	所属	演題名
1	藤沢 武秀	合同会社 AddCare・ごてんまり 訪問看護ステーション	「秋田モデル」が拓く！在宅緩和ケアと看取り のデジタルトランスフォーメーション ～特定行為研修の戦略的推進と日本で数例の遠 隔死亡診断導入の軌跡～
2	濱田 史代	社会福祉法人山陵会 特別養護老人ホーム フラワーホームショートステイ	短期入所における看取り
3	小泉 美香	萌気園浦佐診療所 看護師	地方都市南魚沼市での小児がん在宅看取りの経 験 ～『Xmasを自宅で過ごしたい』を叶える多 機関・多職種連携～
4	川瀬 真由美	医療法人生寿会 覚王山内科・在宅クリニック 在宅ホスピスかわな 緩和ケアサポートチーム	毎日を快適に過ごすために ～乳がん自壊創の匂いと浸出液のケア方法～
5	梁瀬 文子	あやこことばの相談室/ 日本看取り士会山形研修室	死をタブー視しない取り組み ～言語聴覚士×看取り士
6	亀井 克典	医療法人生寿会 かわな病院在宅ケアセンター	患者が自宅での穏やかな看取りを望まれていた にも関わらず、急変時ご家族が救急搬送を要請 し、望まぬ看取りとなったケースについての考 察
7	小川 越史	医療法人社団満寿会 鶴ヶ島在宅医療診療所	ひとり親の看取りについて
8	長谷川 結	慶應義塾大学先端生命科学研究所 からだ館	「人生の終い方」をテーマとした住民勉強会か らゲームづくりへ
9	佐々木 淑江	鶴岡市立荘内病院地域医療連携室	鶴岡・三川地域における多職種向け研修会「緩 和ケアを学ぼう会」について
10	松木 裕子	社会福祉法人 秦ダイヤライフ福祉会 特別養護老人ホーム あざみの里	業務の効率化（ICT）で看取りケアに活かした こと

## 「秋田モデル」が拓く！在宅緩和ケアと看取りのデジタルトランスフォーメーション ～特定行為研修の戦略的推進と日本で数例の遠隔死亡診断導入の軌跡～

発表：藤沢 武秀

所属：合同会社 AddCare・ごてんまり訪問看護ステーション

共同演者：谷合 久憲（たにあい糖尿病在宅クリニック）

伊藤 久美子（風平診療所）

長堀 孝子（SOMPO ケア由利本荘）

佐藤 智哉（アイン薬局 由利本荘店）

安藤 秀明（秋田大学 大学院医学系研究科）

高い高齢化率を誇る秋田県において、訪問看護ステーションが取り組む在宅緩和ケアと看取りの革新的な取り組み「秋田モデル」を報告する。本モデルの中核は、デジタルトランスフォーメーション（DX）の推進にある。看護記録専用AIとICTを活用した多職種間連携システムは、タイムレスな情報共有を実現し、迅速かつ適切なケア提供を可能とした。質の高い緩和ケア提供のため、特定行為研修を戦略的に推進し、看護師の専門性向上と役割拡大を図った。これにより除痛ラダーに準拠したシステムの下、在宅でもPCAポンプを用いた積極的な疼痛コントロールが可能となり、QOL向上に寄与している。また、日本で数例しか実証されていない遠隔死亡診断の導入。これは、定められた要件の中で、自宅での穏やかな看取りを支える画期的な試みである。本講演では、これらの取り組みの具体的なプロセス、課題、導入の軌跡を詳述し、在宅医療の新たな可能性を提示する。

## 地方都市南魚沼市での小児がん在宅看取りの経験 ～『Xmasを自宅で過ごしたい』を叶える多機関・多職種連携～

発表：小泉 美香

所属：萌気園浦佐診療所 看護師

共同演者：黒岩 巖志（萌気園浦佐診療所 医師）

新潟県では小児がん患者の殆どが病院で最期を迎えている。その特殊性から小児がん終末期患者への訪問診療に抵抗感を持つ在宅医が多いのが一因であろう。県内の小児がん患者の殆どは、県内唯一の大学病院である新潟大学医学総合病院の小児科ないし脳外科での治療歴が有る。新潟大学医学総合病院で治療歴のある小児がん患者で終末期を自宅で過ごすことができたのは2021年の一例目から現在までたったの四例であるがそのうち三例を当院が担当している。今回、新潟大学小児科、当地基幹病院小児科、当市訪問看護ステーション、萌気園浦佐診療所（当院）、当地調剤薬局の多機関がタッグを組み、多職種が密に連携しながら、『Xmasを自宅で過ごしたい』を叶えた、当院三例目の終末期小児がん患者の一例を経験したので紹介する。この報告が、小児がん患者・その家族の『おうちで最期を過ごしたい』を叶える在宅ケアの普及に繋がることを願っている。

## 短期入所における看取り

発表：濱田 史代

所属：社会福祉法人山陵会

特別養護老人ホームフラワーホームショートステイ

鹿児島県では全国的に見ても独居高齢者の割合が高く、在宅診療の継続が困難となるケースが増加している。特に終末期においては、医療と併せて介護のニーズが高まるが、家族介護者による支援が得られない場合も多く、短期入所施設における看取りの役割が注目されている。短期入所施設では、専門職による継続的な支援が可能であり、家族に代わって終末期ケアを支える体制が整っている点が大きな特徴である。病院でもなく、自宅でもない「第3の場」として、本人および家族の安心に寄り添える看取りが可能であることから、地域包括ケアの中で短期入所施設が果たす意義は大きい。

当法人の短期入所における看取りについては、本会ですでに報告した。本報告では、過去3年間に短期入所施設で看取りを行った3事例を対象に、短期入所施設における看取りの有効性と課題について考察する。

## 毎日を快適に過ごすために ～乳がん自壊創の匂いと浸出液のケア方法～

発表：川瀬 真由美

所属：医療法人生寿会 寛王山内科・在宅クリニック

在宅ホスピスカワナ 緩和ケアサポートチーム

がんの転移、または皮下局所に浸潤したがんが皮膚を破って創傷を形成するがん自壊創は、出血・疼痛・滲出液・においの四症状の管理において、患者、医療者共に難渋することが多い。

また、自宅や施設など、病院以外の場所で療養される方にとって、効果以外にも処置方法は簡便で安価なものが望まれる。

202X-1年、乳がん自壊創の拡大とともに浸出液の増加、匂いが問題となった有料老人ホームで生活をする90歳代A氏の乳がん自壊創の処置方法にMohsペーストに似た作用を持ちながらも簡便で安価な亜鉛華でんぶんを使用し一定の効果を得た報告を実践交流会で行った。

今回、A氏のその後の経過と、新たに乳がん自壊創の『匂い』を気にされながらも他者の介入や創部の洗浄に消極的な自宅で生活をされている90歳代、外来通院患者B氏へのケア方法を報告する。

## 死をタブー視しない取り組み ～言語聴覚士×看取り士

発表：梁瀬 文子

所属：あやこことばの相談室 / 日本看取り士会山形研修室

私は言語聴覚士として長年総合病院で働いてきました。現在は訪問リハビリの傍ら看取り士として「明るい死生観」を山形県内で広める活動をしています。病院勤務時代に多くの方がご自分の「死」を意識したり、前もって考えていることが非常に少ないことを感じました。突然の入院後、人生や命の選択を迫られた際に、戸惑ったりあきらめたり、他人任せにするのを目の当たりにしてきました。ご家族や大事な方との日頃のコミュニケーション不足も多く感じました。山形県民の「最期に希望する場所」の調査では自宅は61.1%それに対して実現しているのは14.4%、そこには47ポイントものギャップがあります。そこでお元気なうちに日常の中で気軽に明るく楽しく「死」を考えたり話したりする機会を作りたい、そういう仲間を作りたいと考え、看取り学の講座開催や映画の上映会、お茶会などを開催しています。これまでの活動をまとめ、今後の楽しい企画の妄想をご紹介します。

## ひとり親の看取りについて

発表：小川 越史

所属：医療法人社団満寿会 鶴ヶ島在宅医療診療所  
共同演者：須賀原 裕一、宇田川 清司、新井 尚之

当院は19床のベッドと訪問診療・外来を駆使して地域完結型の医療を目指し日々診療している。今回は、ひとり親で障害をもつ子供の育児に奮闘する中、癌を発症し闘病のすえ看取りとなった症例を経験したので、緩和ケア的視点で考察し報告する。症例は52歳女性、病名は乳癌、子供は一人、11歳男でADHDと診断されている。化学療法が無効となりベストサポータティブケア（BSC）へ移行した段階で訪問診療目的で紹介となった。母親は子供と長く一緒に過ごすことが願いであった。児童相談所と協議し急変時に子供の安全を確保したうえで二人暮らしを継続した。限界まで在宅で過ごした後、当院入院し11病日で他界された。グリーフケアが適切であったかどうかは子の成長の経過をもって判断しなければならぬと思われ現段階では評価できないが、少なくとも警察介入などの社会的問題なく経過したことは適切な対応ができたと考えている。

## 患者が自宅での穏やかな看取りを望まれていたにも関わらず、急変時で家族が救急搬送を要請し、望まぬ看取りとなったケースについての考察

発表：亀井 克典

所属：医療法人生寿会 かわな病院在宅ケアセンター

Do Not Attempt Resuscitation（以下DNAR）に同意し、患者が自宅での穏やかな看取りを望まれていたにも関わらず、急変時に家族が救急搬送を要請し、望まぬ看取りとなったケースを2例経験した。最期の療養場所、看取りのあり方について、医師・多職種が患者・家族と話し合い、合意形成に努めていてもこのような事案が見られる。その原因について振り返るとともに、患者・家族向けの新たな説明ツールの作成と活用について紹介し、患者の思いに沿った在宅療養・看取り支援のあり方について考察する。

患者が最期に望まぬ形での看取りとなることを避けるため、適切なタイミングでの医師・多職種と患者・家族との繰り返しの話し合いと合意形成の努力が必要である。「急変時の対応について」という患者・家族への新たな案内文書を作成・活用した取り組みは一定の効果が期待される。

## 「人生の終い方」をテーマとした住民勉強会からゲームづくりへ

発表：長谷川 結

所属：慶應義塾大学先端生命科学研究科からだ館  
共同演者：瀬尾 利加子、齋藤 彩、小林 まゆみ、  
秋山 美紀

鶴岡市において「人生の終い方」の住民勉強会を2023～2024年で計17回にわたり継続開催した。勉強会の場において住民が自分の人生の終い方をどのように捉え、どのような情報を得たいと考えているのか探索することとした。毎回の勉強会でグループワークや個人ワークを実施し、どのようなことが気になるか、何について学びたいかを付箋に書いてもらう形式で収集した。その結果、住民が望んでいる情報として、お金の終活やお墓のことなど生活に根差したものが最も多く表出された一方、在宅や終末期医療、ケアに関する情報ニーズの表出は少なかった。住民目線でのより良い「人生の終い方」を考えるにあたっては、生活視点の情報を基点としながら、ACPや終末ケアに関する情報をバランス良く伝えていくことが大切であることが示された。この結果を踏まえて、現在は「人生の終い方」のゲームなど楽しく遊びながら必要な情報を得られる方法を検討している。

## 鶴岡・三川地域における多職種向け研修会「緩和ケアを学ぼう会」について

発表：佐々木 淑江

所属：鶴岡市立荘内病院地域医療連携室

共同演者：和泉 典子（鶴岡市立荘内病院内科）

矢野 梨加（介護老人保健施設みずばしょう）

小林 磨加（鶴岡市立湯田川温泉リハビリテーション病院）

遠藤 貴恵（鶴岡地区医師会地域連携室ほたる）

菅原 美穂（居宅介護支援事業所いつき）

上林 沙希子、上野 桃子、鈴木 聡

（鶴岡市立荘内病院院長）

【目的】厚労省がん戦略研究「緩和ケア普及のための地域プロジェクト OPTIM」を契機に2012年度から主に介護職を対象とした「緩和ケアを学ぼう会」を継続している。参加者から見た現状を評価した。

【活動の概要】「緩和ケアを学ぼう会」は地域の多施設・多職種で企画運営している。平日18時30分～20時に荘内病院講堂とオンラインのハイブリットで年3回開催している。内容は、ケアマネジャーや施設職員による看とりの取り組み発表と医療職による緩和ケアの講義とした。

【成果】参加者に無記名式質問紙調査を行いその結果を分析した。開催回数は計34回。参加者は平均84.1名（25～141名）、有用性について「とても役に立つ」「役に立つ」との回答が平均94.8%。参加者は初めての参加者とリピーターに分かれる傾向があった。

【考察】「緩和ケアを学ぼう会」は有用と評価された。課題として近年参加者が減少傾向にある。講師や発表者、テーマの選択など工夫しながら継続したい。

## 業務の効率化（ICT）で看取りケアに活かされたこと

発表：松木 裕子

所属：社会福祉法人 秦ダイヤライフ福祉会  
特別養護老人ホーム あざみの里

施設職員が医療機関や家族を巻き込み話し合いを繰り返してきたのは、本人の意思（家族の意向）を医師につながないと看取り同意書作成のスタート地点にも立てないからである。「どうすれば、望む安らかな最期を迎えられるのか？」とあれほど話し合いを繰り返していたのに結局搬送となり、大往生とは程遠い最期を迎える事例も経験してきた。

去年発表の機会を頂いた際に、人生会議や看取りについて「誰が話を切り出すのかという問題がある」と言ったのは、本人及びその家族の意向がヒエラルキーの頂点で、医師の診断がないと施設で看取れないからである。

そのような大切な連携に時間を割けるよう、業務の効率化（ICT）を続けており、今回は服薬支援にかかわる業務の効率化について報告する。

人材育成・教育・啓発

ネットワーク理事座長：永原 弘毅（医療法人永原診療会）

鶴岡大会座長：武田 洋（B-CHANGE）

番号	発表者	所属	演題名
1	小柳 朋之	トテらぼ。(個人事業主)	地元発「やまがたノーリフティングなにや会」の取り組み
2	瀬尾 利加子	慶應義塾大学先端生命科学研究所以からだ館(プロジェクトスタッフ)	住民理解を深める健康大学「正しく知る認知症と暮らし」の実践報告
3	八鍬 紘治	日本調剤株式会社 在宅医療部	心不全療養指導士育成の取り組みと資格取得後の地域活動
4	木村 知	医療法人社団実幸会 いらはら診療所	在宅医療現場における医学生、研修医、指導医および多職種による協同学習の試み
5	石山 寿子	群馬パース大学 リハビリテーション学部 言語聴覚学科	社会モデルに基づく言語聴覚士養成教育の実践1 —地域参加支援演習の理念と実施—
6	鈴木 倫	群馬パース大学 リハビリテーション学部 言語聴覚学科	社会モデルに基づく言語聴覚士養成教育の実践2 —地域参加支援演習の実践例—
7	白坂 康俊	群馬パース大学 言語聴覚学科	社会モデルに基づく言語聴覚士養成教育の実践3 —地域参加支援演習の教育効果分析と今後の課題
8	齊藤 彩	慶應義塾大学先端生命科学研究所以からだ館	こころのセルフケアについて学ぶ すごろくの制作ワークショップの報告 —住民が学び、作り、遊ぶプロセスで起きた変化とは—
9	宮田 信之	医療法人宮田医院 介護老人保健施設ごぎょうの里	マンマーから特定技能労働者を迎えて —第2報—
10	鎌田 剛	新潟医療福祉大学 医療経営管理学部 医療情報管理学科	医療福祉系学生の当事者意識をどう高めるか？ —認知症カフェに対する参加型研究の経過報告—

## 地元発「やまがたノーリフティングなにや会」の取り組み

発表：小柳 朋之  
 所属：トテらぼ。(個人事業主)  
 共同演者：松田 友美、志田 淳子、宇野 智咲  
 (山形大学大学院医学系研究科看護学専攻  
 在宅看護学分野 医学部看護学科)  
 小川 豊美 (株式会社とよみ)

「やまがたノーリフティングなにや会」は現在、山形県内の在宅現場での「介助者と被介助者双方に優しい」「持ち上げない・抱え上げない・引きずらない」ケア、「ノーリフティングケア」の普及を目指し、研修や実技指導を通じて介助者と利用者双方の負担軽減を図る活動を行っている任意団体である。その前身である「つるおかノーリフティングなにや会」は、鶴岡市を拠点とした有志による勉強会として、ノーリフティングケアの基礎から実践までを学ぶ勉強会を開催してきた。現在は「やまがたノーリフティングなにや会」にその名称を変更、地元自治体や労働局と連携し研修会を開催しているが、今後への課題も存在する。今回、会の結成から現在に至るまでの流れ、今後の課題等について報告させていただく。

## 心不全療養指導士育成の取り組みと資格取得後の地域活動

発表：八鍬 紘治  
 所属：日本調剤株式会社 在宅医療部

現在、心不全患者は約120万人いると推計され、少なくとも2035年まで増加の見込みであり「心不全パンデミック」と呼ばれている。このような現状を踏まえ、2021年度に心不全の発症・重症化予防を目的に療養指導する者の資質向上を目的として「心不全療養指導士」という資格が創設された。保険薬局においても心不全患者は外来、在宅共に増加し、薬剤師による継続的なフォローアップにより、再入院抑制や症状増悪時の早期発見、受診勧奨などに期待がされている。そこで2024年度に社内薬剤師、管理栄養士向けに心不全療養指導士育成研修会を企画、実施したところ全国平均合格率を上回る結果を残すことができた。今年度は他企業の薬剤師、看護師を交えた合同育成研修会を実施中である。資格取得後から心不全啓発に関する地域活動も開始した。医療職、介護職だけでなく、地域住民にも知ってもらうために現状の活動内容について報告する。

## 住民理解を深める健康大学「正しく知る認知症と暮らし」の実践報告

発表：瀬尾 利加子  
 所属：慶應義塾大学先端生命科学研究所からだ館  
 (プロジェクトスタッフ)  
 共同演者：秋山 美紀 (慶應義塾大学 環境情報学部)  
 小林 まゆみ、斎藤 彩、長谷川 結

からだ館では、本人が認知症の診断を納得していないケースへの相談対応をきっかけに、地域住民の認知症への理解と対応力の向上を目的に健康大学「正しく知る認知症と暮らし」を連続講座として開催した。高齢者の参加を想定し、鶴岡市認知症ケアパスの内容を複数回に分けて行政担当者が解説したり、心配事や今後の行動予定をアウトプットするワークの時間を設け、参加者の主体的な理解促進を目指した。初回のワークでは、家族が認知症になった場合と自分が認知症になった場合にそれぞれ何に困るかを記載してもらったところ、家族については「寄り添えるか心配」「対応できるか心配」といった声があり、自分については「家族や周囲への迷惑や負担」「自分が変化することへの不安」が表出された。また講座の感想として、「他の人の体験を聞くことが理解につながった」との声が多く、今後は認知症の当事者を講師に招くなどして認知症共生社会を目指したい。

## 在宅医療現場における医学生、研修医、指導医および多職種による協同学習の試み

発表：木村 知  
 所属：医療法人社団実幸会 いらはら診療所  
 共同演者：苛原 実  
 和田 忠志 (ひだまりホームクリニック)

当院では初期研修医の地域医療研修において、がん在宅療養患者を担当させるとともに当該患者の抱える問題を多角的視点から思考させる教育方略を実践しており、昨年当会でもその実際を発表した。研修医の他に医学部6年生のプライマリケア実習の受け入れも積極的に行っているが、時としてこれらが同時期に重なることがある。ただその場合は人的教育資源の事情もあり学生指導に注力しづらい状況になりがちであった。さらに学生実習においてはアウトカムを明確に規定していなかったことから、大学側に提出する総括評価も指導医の「印象」に基づいたものとなりがちであった。今回、我々はこれらの状況を改善すべく、学生と研修医のニアピア協同学習に多職種を交えたディスカッションを「医師のプロフェッショナルリズム」にフォーカスして行う実習カリキュラムを新たに開発し、アウトカム基盤型教育へと転換する試みを実践したので若干の文献的考察を加えて報告する。

## 社会モデルに基づく言語聴覚士養成教育の実践 1 —地域参加支援演習の理念と実施—

発表：石山 寿子

所属：群馬パース大学

リハビリテーション学部言語聴覚学科

共同演者：白坂 康俊、鈴木 倫、酒井 哲郎、  
及川 翔、岡野 由実、遠藤 俊介、  
齊藤 吉人

先進国のリハビリテーションは障害者権利条約やICFに基づいた社会モデルが主流だが、本邦では医療モデルへの偏りが著しく、社会モデルの理念を実践的に学習できる教育システムが不十分な現状がある。本学科は社会モデルに沿った「共生の社会・街創り」の人材育成を教育理念とし、象徴的科目として「地域参加支援演習」を設定している。2年次後期から3年次前期にかけて、ゼミ毎に「地域参加困難な障がい者の地域・社会への参加支援」を課題に異なる事業を企画・実践・運営している。これまで1期生は5つの対面イベントと啓発リーフレット作成・配布を、2、3期生は6つの対面イベントを実施した。アクティブラーニングを積極的に用いた本科目により、学生は社会モデルの理念を実践的に体得し、地域共生社会の創造に寄与する人材へと成長できる教育システムを構築できた。他には例を見ない学生時代からの取り組みは地域共生に寄与していくものと思われる。

## 社会モデルに基づく言語聴覚士養成教育の実践 3 —地域参加支援演習の教育効果分析と今後の課題

発表：白坂 康俊

所属：群馬パース大学 言語聴覚学科

共同演者：鈴木 倫、石山 寿子、酒井 哲郎、  
齊藤 吉人、及川 翔、遠藤 俊介、岡野 由

本学科は社会モデルの実践教育を実施しており、1期生（2023年度）と2期生（2024年度）の実施状況と教育効果を分析し今後の課題を検討した。一般加者数は1期生605から2期生1447名に、協力団体は、8から25団体と大幅に増加し、クラウドファンディングによる資金調達も達成した。新聞掲載1件から4件、SNS紹介3件、ラジオ紹介6件へとメディア関心も著しく増加した。学生アンケートでは「達成感がかなり大きかった」が1期生29%から2期生44%、「とても楽しかった」が5%から56%、「ST養成カリキュラムにとっても必要」が0%から22%と向上した。一方で、医療モデルに偏るSTの臨床現場や養成現場においては、賛否が分かれ、社会モデル教育の意義を理解させることに課題がある。地域共生の実現には、養成校での社会モデル教育の普及、ひいては、共生の社会づくりの担い手育成が急務であるが、現実にはほど遠い。現在実施中の3期生の結果も含めて考察、報告する。

## 社会モデルに基づく言語聴覚士養成教育の実践 2 —地域参加支援演習の実践例—

発表：鈴木 倫

所属：群馬パース大学

リハビリテーション学部 言語聴覚学科

共同演者：鈴木 倫、石山 寿子、齊藤 吉人、  
酒井 哲郎、及川 翔、遠藤 俊介、  
岡野 由実、白坂 康俊

社会モデルのリハビリテーション教育には、理論と実践を結ぶ具体的で効果的な教育方法が必要である。本学科の「地域参加支援演習」において学生が企画・実施した事業の具体例を紹介する。本演習は社会や地域への働きかけを重視し、「『共に生きる』を、本気で創る」をテーマに、4～5人単位のゼミがショッピングモールでの障がい者体験の実施や、認知症理解のためのカルタ、インクルーシブ社会を伝えるオリジナル絵本、ご当地献立の嚙下食レシピなどの作成や展示を行った。また、クラウドファンディングを展開してより広く啓発活動を行った。事業準備から実施、振り返りまでの一連の流れを通じて、学生がどのように社会モデルの考え方を実践に移し、地域との協働関係を構築しているかを具体的に示す。これらの実践例は、言語聴覚士養成教育における社会モデル導入の具体的方法論として他の養成校でも活用でき、社会モデル教育の普及に寄与すると考える。

## こころのセルフケアについて学ぶ すごろくの制作ワークショップの報告 —住民が学び、作り、遊ぶプロセスで起きた変化とは—

発表：齊藤 彩

所属：慶應義塾大学先端生命科学研究所からだ館

共同演者：小林 まゆみ、長谷川 結、瀬尾 利加子、  
秋山 美紀

山形県の自殺率は全国3位（令和3年）であり、住民の心のケアは重要課題である。慶應義塾大学からだ館では、がんサバイバーのニーズに応えるため、同大学院生でもある臨床心理士より認知行動療法を学ぶ勉強会を2021年1月から2022年3月まで16回実施した。その後、勉強会の参加者から「この学びを家族や地域へ伝えたい」と声上がり、認知行動療法のエッセンスを盛り込んだすごろくを作成することとなった。女性5名が中心となり2022年度に計8回のすごろくづくりワークショップを開催した。特に学びの大きかった内容を抜粋・構成しすごろくのプロトタイプを作成し、参加者が実際に体験し、改善点を見出しては修正を繰り返した。その過程で、参加者に「自己開示」「共感」などの変化が見られ、心理的安全性のもとで深い対話が生まれ、さらに悩みを吐露・傾聴する相互作用が起きた。内省やリカバリーへの可能性、住民同士の相互理解の深化が示唆された。

## ミャンマーから特定技能労働者を迎えて —第2報—

発表：宮田 信之

所属：医療法人宮田医院 介護老人保健施設ごぎょうの里  
共同演者：佐々木 将人、鈴木 圭輔

老人保健施設ごぎょうの里では昨年8月よりミャンマーから介護特定技能労働者3人を受け入れている。昨年の実践交流交流会では、受け入れまでの手続きと来日して2か月間の職場での経過報告を行った。今回は1年を経た現場での実践とクーデター後の母国の政情変化の中での日本での生活、また今年3月の大規模地震後の現地の様子なども報告する。在留資格は特定技能の場合は介護福祉士の資格を取って在留資格「介護」となれば在留期間の上限が実質なくなる。4年間での介護福祉士の資格獲得が彼らの目標であるが、他施設のミャンマー特定技能労働者が3年で受験した今年の合格率は30%と低く、厳しいハードルである。試験問題も回答も日本語であり、語学の問題が大きい。今後の長期的な課題としては、特定介護人材の安定的な育成と、獲得した技能を両国が生かせる仕組みづくりを通して介護分野での両国の好循環を目指したい。

## 医療福祉系学生の当事者意識をどう高めるか？ —認知症カフェに対する参加型研究の経過報告—

発表：鎌田 剛

所属：新潟医療福祉大学 医療経営管理学部  
医療情報管理学科

医系のLabo文化が根強く、還元主義の研究勢力が多数を占める大学に昨春着任した。授業も資格取得のための知識型がほとんどで、学生は教科書的な“答えを教えてください”スタイルに慣れきっている。そこで学生に対し、患者・家族、医療者らと一緒に活動する機会を用意した。“答えを自分で探す”姿勢を育てるためである。

NPO法人みどりの森（新潟市中央区）の「認知症カフェ」に定期参加し、卒業研究として取り組む流れを構築した。昨年度はカフェの機能と運営課題について13の発見を抽出し、財源・人材・広報等の問題に対し提言を行った。2025年度は、課題を実際に解決するためのアクションリサーチに挑戦中である。6月にはカフェ参加者と一緒にアクセサリーを制作し、商店街イベントに出店した。今後も複数回の企画が予定されているので、発表当日は、学生やカフェ参加者・医療者に与えた影響（成果・課題等）を整理し、実践の中間報告とする。

## 認知症に関する取り組み

ネットワーク理事座長：内門 大丈（医療法人社団彰耀会 メモリーケアクリニック湘南）  
鶴岡 大会 座長：三原 美雪（三原皮膚科）

番号	発表者	所属	演題名
1	小川 美幸	医療法人社団 萌気会 しょうたき萌気コム・ソフィ、 萌気園老人ホームすみれ草	出来る事を続けて不安なく過ごしたい
2	盛山 隆平	社会福祉法人 淳涌界 特別養護 老人ホーム おふくろの家	看護的目線で考える私が将来認知症になっても 入りたいと思う特養 Part2
3	五十嵐 利恵	つるおかオレンジサポートの会 (副代表兼事務局)	「つるオレ」と「つるマフ」って何？
4	直正 真子	特定非営利活動法人ゆうらいふ リハビリサポートゆうらいふ	利用者の自主性とは ～尊厳を持って安心して暮らせる社会の実現の ために～
5	板花 昇	山形県立中央病院 RUN 伴山形 2025 実行委員会	認知症になっても住みよいまち作りに向けた RUN 伴山形の活動
6	中石 真一路	ユニバーサル・サウンドデザイン株式会社 聴脳科学総合研究所	難聴高齢者の早期発見と認知症予防への取り組 み ～全国で進むヒアリングフレイル対策事業～
7	吉家 誠人	生活介護サービス株式会社 グループホームさくら草 施設長	まちづくりイベント RUN 伴のその後～参加 者・実行委員の立場から～
8	小泉 峻	医療法人あづま会 ケアマネジメントセンターおおいど	介護支援専門員本人の感情にフォーカスした、 認知症のひとつとその家族への支援について

## 出来る事を続けて不安なく過ごしたい

発表：小川 美幸

所属：医療法人社団 萌気会

しょうたき萌気コム・ソフィ、  
萌気園老人ホームすみれ草

アルツハイマー型認知症のA様を対象とし、こだわりが強く収集癖・物盗られ妄想の精神症状もあり職員の介入も困難だった為、焦点を当てて取り組みをしました。認知症介護実践者研修を通して、様々なツールを活用しA様を理解する事から始め、その結果に基づいて実際にケアを実践しました。

本人視点で考え、職員がA様への見方・関わり方を変えると双方ともに良い変化が現れました。職員の負担も減り、A様の不安の訴えも減少しました。

A様の行動・心理症状は職員側の対応に要因がある事が分かり職員が作り出しているもの、いかに本人視点・困り事ではなく職員視点・困り事として考えていたかが実感でき、職員の対応・ケアが認知症の方に与える影響の大きさに気付く事が出来ました。今後もどの認知症の方に対しても職員のケアを統一し、本人視点で考える事を忘れずにケアを提供していきたいと思えます。

## 「つるオレ」と「つるマフ」って何？

発表：五十嵐 利恵

所属：つるおかオレンジサポートの会（副代表兼事務局）

「つるオレ」紹介

「つるおかオレンジサポートの会」の通称である。2017年（H29）設立され、認知症の人と家族を支える市民有志のボランティア団体である。認知症になっても住み慣れた地域で暮らし続ける事が出来るように、認知症に関する知識の普及や研修会の開催、イベント等への協力をい地域貢献に努めている。

「つるマフ」紹介

認知症マフのことであり、筒状のカラフルにデザインされたニット製品で英国ではT winddle M uffと呼ばれている。毛糸が手を暖かくつつみ、使う人の好みに合わせたモチーフが記憶と感覚を刺激し、編み手とケアする人と認知症のある人をつなぐ。鶴岡市で愛称を公募し「つるマフ」と命名した。市民が編んだ作品を病院や施設、救急車にも搭載しており、編み手の生き甲斐創出にも繋がっている。

## 看護的目線で考える私が将来認知症になっても入りたいと思う特養 Part2

発表：盛山 隆平

所属：社会福祉法人 淳涌界 特別養護老人ホーム  
おふくろの家

私は現在特養で准看として働いており、看護師として働くのが4年目であり当施設で働くのも4年目である。

前回の全国の集いin福岡で発表した演題名『看護的目線で考える私が将来認知症になっても入りたいと思う特養』がフォローアップ賞をいただいたため、前回の続きという形で今回の演題名で発表する。

前回、当施設の認知症への対応の特徴と他の特養での対応の違いや特徴を複数抽出、その後、看護的視点で比較し私自身の理想と兼ね合わせたものを私個人が認知症になっても安心して入所したいと考える特養の理想像である事を発表し、その発表後から当施設での変化前と変化後、変化が足りない面も多く存在するため今後どのように変化をしていくことで少しでもより良い施設に出来、利用者自身及び御家族が安心できるのか私個人の考えを報告という形で発表する。

## 利用者の自主性とは

～尊厳を持って安心して暮らせる社会の実現のために～

発表：直正 真子

所属：特定非営利活動法人ゆうらいふ  
リハビリサポートゆうらいふ

共同演者：小西 沙希

当事業所では運動・口腔・栄養加算に加え、認知症加算を算定している。昼食後から午後活動までの約2時間の過ごし方が確立されておらず「何をしたら良いかわからない」といった受動的な時間が課題だった。そこで利用者が自主的に活動できる仕組みを模索し、充実した時間を提供することを目的とした取り組みを行った。まず利用者の興味関心調査を実施し、その結果に基づき活動用品の配置やリラクソコーナーの設置など施設レイアウトを大幅に変更した。さらに食後口腔ケアの動きからの導線を工夫、作品展示による達成感の提供、個別の声かけといったアプローチを導入した。これらの取り組みの結果、利用者が自ら考え行動する時間が増え、他者との交流が生まれた。自主性の支援は自己決定感を育み生活の質（QOL）の維持向上に不可欠である。利用者の自立（自律）を活かし誰もが「尊厳を持って安心して暮らせる社会」を目指した取り組みを発表する。

## 認知症になっても住みよいまち作りに向けた RUN 伴山形の活動

発表：板花 昇  
所属：山形県立中央病院  
RUN 伴山形 2025 実行委員会

RUN 伴は、日本全国のまちが、認知症になっても安心して暮らせる地域になることをめざして、認知症の人や家族、支援者、一般の人がリレーをしながら、一つのタスキをつなぎゴールを目指すイベントです。本プロジェクトは 2011 年に北海道内で始まり、全国で賛同者が現れ、毎年 1 万人以上が参加し思いを一つにタスキを全国でつなぎました。コロナ禍に伴い活動休止する時期もありましたが、2023 年から県単位での開催となり、山形県でも再開し今年度で RUN 伴山形は 7 回目を迎えています。山形県は 4 つの地域（庄内・最上・村山・置賜）に分かれており、各地域の実行委員を中心に、社会福祉協議会や包括支援センター、介護施設を巻き込みながら、イベントへの参加を頂いています。また、RUN 伴山形では独自に全市町村走破を目指し、毎年少しずつ新しい市町村を開拓して、賛同者を増やす取り組みをしています。より多くの人に理解が得られるように活動を続けていきたい。

## まちづくりイベント RUN 伴のその後 ～参加者・実行委員の立場から～

発表：吉家 誠人  
所属：生活介護サービス株式会社  
グループホームさくら草 施設長  
共同演者：山岸 大輔、干場 理絵

RUN 伴（ランとも）はまちづくりイベントです。今まで認知症の人と接点がなかった地域の住民や企業、商店などが認知症を生きる本人や家族、医療福祉関係者などが参加し「認知症になっても安心して暮らせる地域づくり」を目指し認知症の有無に関わらず、オレンジ T シャツを着て地域内をランニングしてタスキをつないで認知症啓発活動です。参加者・実行委員の立場から参加し数年経過した中で、今年度はこれまでと異なり新たな形で開催することとなりました。地域住民、民間、行政等一体となって活動を行っていく内容を参加者・実行委員の立場からご紹介いたします。

## 難聴高齢者の早期発見と認知症予防への取り組み ～全国で進むヒアリングフレイル対策事業～

発表：中石 真一路  
所属：ユニバーサル・サウンドデザイン株式会社  
聴脳科学総合研究所

超高齢化社会の影響で高齢の難聴者が増加する一方、日本における補聴器所有率は低く、地域における難聴高齢者との意思疎通と意思決定支援における課題が顕在化している。Lancet 国際委員会も難聴を認知症の修正可能なリスク要因の筆頭に挙げており、日本においては 2024 年 9 月に、高齢社会対策大綱改定で難聴への対応が追加されるなど、自治体による対策が求められています。難聴は社会的孤立や認知症のリスクを高めるため、2019 年より当研究所では 2020 年より「ヒアリングフレイル」の啓発を行なっています。

2021 年から自治体と連携し「みんなの聴脳力チェック」を用いた高齢者向け聴覚スクリーニング事業のサポートをスタート。難聴の早期発見、耳鼻科への受診勧奨、自治体による補聴器補助金制度活用の実現につながっています。地域全体で難聴高齢者を支えるシステムを構築している大阪府豊中市様の事例を報告させていただきます。

## 介護支援専門員本人の感情にフォーカスした、認知症のひととその家族への支援について

発表：小泉 峻  
所属：医療法人あづま会  
ケアマネジメントセンターおおいど  
共同演者：竹田 靖子

【はじめに】介護支援専門員として利用者、家族と関わりを持つ中で、利用者、家族の感情だけでなく、介護支援専門員本人の感情にもフォーカスを当ててケアマネジメントを行う事が大切だと気付きました。

【取り組み】認知症の方においては、本人の不安や混乱だけでなく、家族の戸惑いや心労にも丁寧に寄り添う姿勢が求められます。その場面に寄り添う時の介護支援専門員本人の感情の動きに注目し、様々なケースに経験をもとに、どのようにその不安に向き合い、安心感がある生活につなげられたのかを考察しました。

【結果・考察】介護支援専門員が否定的な感情を抱かず寄り添うことで本人の「できないこと」よりも「できていること」に光を当て、さりげない関わりの中に信頼関係を育んでいく過程がありました。また、家族の抱える葛藤にも耳を傾けることで、介護の負担だけでなく気持ちの負担も軽減されていきました。

【今後の課題】介護支援専門員の仕事をしていく上でも気持ちを冷静に保ち、的確な支援が常にできるかという難しい面があると思います。支援する側の心のゆとりや専門性を保つために、研修や相談の場の充実が必要です。

障害や課題を抱える人との共生

ネットワーク理事座長：和田 忠志 (ひだまりホームクリニック)  
鶴岡大会座長：佐藤 香澄 (心のとまり木)

番号	発表者	所属	演題名
1	小柳 朋之	トテらぼ。(個人事業主)	自治体独自の訪問型在宅介護サポート事業に関わって
2	阿部 かおり	NPO法人たすけ愛京築	行政措置により施設入所となった障害者の事例から考える支援と権利擁護
3	市川 直樹	社会福祉法人 淳涌界 特別養護老人ホーム おふくろの家・医務課	悲しみから嬉しみの涙へ変えた！！一度は諦めかけた命を救えた症例
4	長縄 康浩	社会福祉法人フェニックス 医師	誰もが輪に入れる“ゆるやかにつながるコミュニティ”の実践 ～GOZARE が描く多様性包摂型まちづくり～
5	長崎 泰生	医療法人あいち診療会 あいち診療所野並	花嫁の父として「立つ」ことの意味～重度パーキンソン病患者における参加支援の実践
6	黒田 禮奈	RDD in 酒田西高実行委員会・委員長	高校生の自主的活動による「希少・難治性疾患と地域をつなぐプロジェクト」 ～企業内 RD 環境イベントをとおした社会共創の試み～

## 1

## 自治体独自の訪問型在宅介護サポート事業に関わって

発表：小柳 朋之  
所属：トテらぼ。(個人事業主)

今回組織に属さない個人事業主の理学療法士として、自治体独自の保険外訪問型在宅サポート介護事業に関わる機会を得た。リハビリ病院退院直後だが介護保険制度などの在宅サービス導入に至っていなかった事例に対し、住宅改修及び福祉用具の活用、退院時に病院側から指導された自主練習プログラムを在宅生活に合わせたものにアップデートするなど、状況に合わせた提案を計4回に分けて実施。本制度は従来の公的制度の枠に縛られない柔軟な支援が可能である一方、自治体や地域包括支援センターなどとの横の連携、また必要時次の事業所に繋ぐ縦の連携の重要性を改めて感じた。理学療法士や作業療法士など、リハビリテーション専門職も含めた医療・介護専門職による保険外事業は、決して大多数の方々のニーズを満たすものではない。しかし従来の保険内事業に生じている隙間を少しでも埋める可能性はあるのではないかと感じている。

## 3

## 悲しみから喜びの涙へ変えた！！一度は諦めかけた命を救えた症例

発表：市川 直樹  
所属：社会福祉法人 淳涌界 特別養護老人ホーム  
おふくろの家・医務課  
共同演者：橋爪 明美

誤嚥性肺炎で総合病院へ入院した後当特養へ帰所された症例様。ご自身で食事を召し上がることが可能だった状態から入院中に自力摂取が困難となった。治療により状態が落ち着き退院となり帰所された時には経口摂取も困難な為に胃瘻が検討された。しかし造設予定の病院からは「廃用により自力での摂取ができなくなった場合は胃瘻の適応外」と断られてしまい命をつなげる事が一時的に困難となりそれを聞いた家族は悲しみと諦めの涙を流された。胃瘻なしの状態でも経口摂取ができないとなると残された時間が限られてくるのは容易に想像ができる。胃瘻の意味の理解が困難で単語レベルで意思表示が可能なか、何度も単純な質問を投げかける「元気で長生きしたい？」何度も何度も質問を投げかけると大きな声で「生きたい」と意思表示があった。そこから理学療法士として取り組んできた事とその変化をこの時間をお借りして発表をしたいと思えます。

## 2

## 行政措置により施設入所となった障害者の事例から考える支援と権利擁護

発表：阿部 かおり  
所属：NPO 法人たすけ愛京築  
共同演者：阿部 朋恵

令和6年に行政判断により施設入所となった、重度の障害を持つ女性の事例を取り上げる。本人は、通所サービス利用中に行動の混乱や身体症状を示し、通報等を契機に「ネグレクト」の疑いが行政により認定され、家族との同居から施設入所に至った。しかし、通報の多くが短期間に集中している点や、施設利用中に見られた混乱等が、環境変化や意思表示の困難性によるものと考えられる点、また家族への十分な説明や本人意思の確認が行われなかった点などから、措置の妥当性について複数の論点が生じている。本事例を通して、障害者虐待防止法の運用、相談支援の機能、家族支援・意思決定支援の在り方、そして障害者の権利擁護と地域共生の実現に向けた制度的課題について検討する。個別支援の事例から制度的・構造的な問題を考える材料としたい。

## 4

## 誰もが輪に入れる“ゆるやかにつながるコミュニティ”の実践 ～GOZAREが描く多様性包摂型まちづくり～

発表：長縄 康浩  
所属：社会福祉法人フェニックス 医師  
共同演者：吉田 理、守田 笙馬

フェニックスグループでは、地域共生社会の実現を目指してGOZAREプロジェクトに取り組んでいます。GOZAREプロジェクトは、障害の有無や年齢、立場を問わず、子どもから大人、高齢者まで誰もがゆるやかにつながり合える、多様性を包摂したコミュニティづくりを進めています。当法人が運営する就労移行支援や就労継続支援B型事業所でも、障害のある方も同じコミュニティの一員として「支援する・される」という枠にとらわれず、互いに対等な立場で、どのような役割や関わりができるかを日々模索しています。それぞれが自分らしく関わり、得意なことや想いを持ち寄ることで、多彩な出会いや活動が生まれ、自然と温かなつながりや居場所が広がっています。GOZAREは、これからも多様な人が混ざり合い、誰もが安心して参加できる共創コミュニティのかたちを探求し続けます。

## 花嫁の父として「立つ」ことの意味 ～重度パーキンソン病者における参加支援の実践

発表：長崎 泰生

所属：医療法人あいち診療会 あいち診療所野並

共同演者：大竹 功剛

今回、結婚式を控えた娘をもつパーキンソン病ステージ5の方に、訪問理学療法士として介入の機会を得た。娘からは「父と一緒にバーจินロードを歩きたい」という希望が聞かれ、それを目標に介入を始めたが、進行した病期のため達成が現実的ではないと判断せざるを得なかった。そこで残存機能に着目し介助量の軽減や家族による介助方法の体得により、「花嫁の父としてお辞儀をする」ことが出来るのではと考え、ご本人を含めた家族へ提案し目標を再共有した。結果、結婚式では家族サポートのもと自身の足で立ちお辞儀をして役割を果たすことができた。これは機能訓練の成果にとどまらず、「父として娘を送り出す」という役割を果たしたいという思いからなる参加の実現であり、理学療法士としての関わり支援内容をここに報告する。

## 高校生の自主的活動による「希少・難治性疾患と地域をつなぐプロジェクト」 ～企業内 RD 環境イベントをととした社会共創の試み～

発表：黒田 禮奈

所属：RDD in 酒田西高実行委員会・委員長

わたしたちは、6年前から自主的に希少・難治性疾患（Rare Disease：RD）の認知向上の活動に取り組む高校生です。近年は、RD 当事者の「安心してあわせなくらし」を可能にするための企業内環境構築を目指し、市役所や商工会議所と連携して活動を展開しています。企業が RD 対応に抱える課題を市民とともに考えるため、「企業内インクルーシブ体験」、「企業内 RD 環境セミナー」、「企業内 RD 環境フォーラム」といったイベントを企画・実施してきました。働く上での RD の課題を多くの市民が「自分ごと」と捉え行動することは、よりよいまちづくりへの社会共創に参画することに繋がります。酒田市は「日本一女性が働きやすいまち」を宣言していますが、わたしたちはこのことを、女性だけでなく困難を抱える全ての人々の不都合を取り除くことと捉えています。2年半の活動と其中で明らかになった課題を報告します。

経営の工夫・新しい試み

ネットワーク理事座長：亀井 克典（医療法人生寿会 かわな病院）

鶴岡大会座長：鎌田 剛（新潟医療福祉大学医療経営管理学部 医療情報管理学科）

番号	発表者	所属	演題名
1	松政 太郎	アステラス製薬株式会社 泌尿器がん第1営業部	地域・組織・職種の垣根を超えた学びと情報共有のプラットフォーム ～医療貢献研究会のこれまでと、これから～
2	大友 路子	医療法人 Molead つながるクリニック	横浜発「つながるクリニック」における地域共生モデルの挑戦
3	秋葉 豊	ゆめのたね放送局 東京スタジオ	地域共生における「継続的な対話」の意義 ～インターネットラジオ番組の制作を通じて見えた地域とのつながり～
4	菅原 崇	鶴岡市建設部都市計画課 (発表内容は個人・地域の活動です)	暮らしを愉しみ、元気に住み続けられる田川を目指して
5	芹澤 彩香	医療法人 MoLead つながるクリニック	想いをかたちに遺す“パピー餃子”プロジェクト ～医療×広報による在宅終末期の社会的処方への取り組み～
6	高柳 麻衣子	医療法人あづま会 在宅包括サービスおおいど (看護小規模多機能型居宅介護)	よりよい看多機を目指して ～管理者を看護師に変更することによる看多機再建～
7	松永 良介	医療法人あいち診療会 あいち診療所野並	主体性伸化への取り組み
8	谷合 久憲	たにあい糖尿病 在宅クリニック	SNS をインフラとした多法人・多職種による地域連携 ～食支援、糖尿病療養、COVID-19感染症、そして災害医療へ～
9	齋藤 健太郎	株式会社ブルー 一般社団法人ナカマチラボ	シニア男性の生き場所「さかた男塾」解散までの7年間
10	小川 豊美	株式会社 とよみ	地域ニーズの声を拾う経営

## 地域・組織・職種の垣根を超えた学びと情報共有のプラットフォーム ～医療貢献研究会のこれまでと、これから～

発表：松政 太郎

所属：アステラス製薬株式会社 泌尿器がん第1営業部

医療貢献研究会は、「地域・企業・職種の垣根を超えて、医療貢献・患者貢献を考え実践し、患者さんや社会に対して新たな価値を創造する」ことを目的として、コロナ禍の2022年に発足しました。製薬企業、医薬品卸会社、医療系ベンチャー企業、医療機関、介護施設、行政機関、アカデミアなどに所属するメンバーが参画しています。活動は、月1回のヘルスケア領域の様々な分野の専門家を招いたWEBセミナー、年1回のリアル講演会と交流会、定期的な活動事例発表会を行なっています。地域・業種・職種の垣根を超えた学びと情報共有、交流のプラットフォームとなっており、気づきや学びを各々が組織に持ち帰って実践しています。今後は先進的な取り組みを行なっている、医療機関や地域の見学会も予定しています。入会費や年会費、参加費等は一切徴収せず、講師にはボランティアで引き受けてもらっていることが、サステナブルな運営につながっています。

## 地域共生における「継続的な対話」の意義 ～インターネットラジオ番組の制作を通じて見えた地域とのつながり～

発表：秋葉 豊

所属：ゆめのたね放送局 東京スタジオ

第3回全国の集いでフォローアップ賞を頂いた発表から1年、当初描いた展望への進捗は正直なところ限定的である。しかし、毎週、1年間で24番組制作を継続し、医療関係者をゲストに招いた番組も制作してきた。

5年間で129番組を超える制作を通じて見えてきたのは、劇的な変化や拡大よりも、「継続すること」そのものが持つ静かな力である。ゲスト一人ひとりの想いや日常を30分の番組に込めることで、その声は確実に誰かに届いている。

本発表では、進捗の遅さを率直に認めつつ、継続的な活動から得られた気づきを共有する。地域共生社会の実現は、大きな変革だけでなく、小さな対話の積み重ねからも生まれることを、インターネットラジオという身近なメディアを通じて考察する。「毎日が全力疾走」という番組名のとおり、派手さはなくとも着実に歩み続けることの意味を、報告したい。

## 横浜発「つながるクリニック」における地域共生モデルの挑戦

発表：大友 路子

所属：医療法人 Molead つながるクリニック

共同演者：八森 淳、萩原 由貴子、芹澤 彩香

横浜市に位置する「つながるクリニック」は、通常の医療に加え、住民参加型の健康・地域づくりを推進しています。地域ニーズを把握するためマインドマップを用いた地域診断を実施した結果、大規模団地における高齢化に伴うサークル活動の維持困難が浮上しました。これを受け、当院カフェで「コーラスカフェ」を企画したところ、定員を超える参加があり、認知症の有無に関わらず多くの住民が交流する場となりました。参加者からは「久しぶりに家族で歌えて楽しかった」との声も聞かれ、地域におけるニーズと手応えを感じています。ほかには、男性も気軽に集える「スポーツバー」や、夜間の交流の場としての「ピアノバー」なども実践中です。現在はクリニックスタッフが運営を担っていますが、将来的には地域住民が主体的に関わるボランティアの仕組みを構築し、持続可能な地域共生モデルの実現を目指します。

## 暮らしを愉しみ、元気に住み続けられる田川を目指して

発表：菅原 崇

所属：鶴岡市建設部都市計画課

(発表内容は個人・地域の活動です)

私は、生まれ育ち、現在も暮らす鶴岡市田川地区で「田川くらし@営業部」という任意団体を有志7名とともに運営しています。田川地区は人口約680人・世帯数249・高齢化率40%超、市内から約10kmの中山間地域です。田川小学校の閉校を機に、住民の「閉校後の田川を明るくしたい」「自分の意欲があることで関わりたい」「ゆるく交流しながら愉しく暮らしたい」という想いの抛りどころとなり、活動するため平成28年度に発足しました。

主な活動は、小学校校舎を再利用したコミセン2階での憩いの場「たがわん」の運営、コミセン敷地や隣接する農村公園の環境整備、子どもたちの思い出づくりの夏祭りの開催、電子回覧板「たがわんLINE」による情報発信、そば打ちの担い手育成、地区のアーカイブ写真展の開催などで、自治振興会や一般社団法人「田川そばの郷」等と連携して取り組んでいます。

「日々の暮らしを愉しめる」ことに重点を置き、元気に住み続けられる田川を目指して、今後も活動を続けていきたいと考えています。

## 想いをかたちに遺す“パピー餃子”プロジェクト ～医療×広報による在宅終末期の社会的処方 の取り組み～

発表：芹澤 彩香  
所属：医療法人 MoLead つながるクリニック  
共同演者：八森 淳、大友 路子、萩原 由貴子

当クリニックは、大規模団地を主たる診療圏とし、訪問診療を軸に予防と地域づくりを重視した地域密着型医療を展開している。医療にとどまらず、患者や家族の「こんなことがしたい」という想いに寄り添う個別支援を大切にしている。本報告では、末期がんの男性患者が「娘にパピー直伝の餃子レシピを伝えたい」と語った事例を紹介する。今回の支援は、クリニックの広報担当である演者が、社会的処方の一環として主体的に関わった点に特徴がある。病状が進行し外出困難となる中、自宅でのレシピ本作成、動画撮影、YouTube 配信に至るまで、医療職と連携しながら患者の「やりたい」を形にするプロセスを伴走した。完成した動画は、患者本人のQOLを高めただけでなく、娘にとっても深い意味を持つ贈り物となった。医療職以外のスタッフが関わることで広がる社会的処方の可能性と、在宅医療における多職種連携の可能性を示す実践として報告する。

## 主体性伸化への取り組み

発表：松永 良介  
所属：医療法人あいち診療会 あいち診療所野並  
共同演者：大竹 功剛

数多ある介護サービスの中で、理想のサービスとは？ご利用者と密な関係性を築き、毎日のレクリエーションや体操で活性化を図ることも大切であるが、当通所リハビリテーションでは、ご利用者の「夢」を追いかけることが生活の質を充足させるのに最も貢献できるのではないかと考えている。

「あいち診療会の約束」の一つに「私たちの目標は幸せの追求です。自身とご利用者一人一人の幸せを考えます」と掲げている。この理念に基づき、今回ご利用者同士で「夢」を出し合っていた。その中の一つを当通所リハビリテーションの目標として設定し、達成に向けて各ご利用者に役割を担っていただいた。

これにより、受け身であったご利用者間の交流が深まる結果となった。

さらに主体性が伸びて自信の形成に繋がり、「次はあれもしてみたい！」と笑顔が増えた。上記について、縦断的に取り組んだ内容を報告する。

## よりよい看多機を目指して ～管理者を看護師に変更することによる看多機再建～

発表：高柳 麻衣子  
所属：医療法人あづま会 在宅包括サービスおおいど  
(看護小規模多機能型居宅介護)  
共同演者：伊藤 慎一  
山崎 澄美、大澤 誠(外来)

【はじめに】2023年12月1日に看多機を開設した。開設から1年が経過し、医療ニーズの高い利用者が増え、それに対応するため2025年4月1日より管理者が看護師に交代となった。

【取り組みと経過】交代前は、医療ニーズの高い利用者への対応不足と共に、一部の職員に業務が集中したり、職員間の連携が不足したりするなどの課題があった。そのため、業務の見直しを行うと共に、看護師が管理業務に介入することで役割分担を明確にし、医療的・看護的視点を取り入れたケア体制を整えた。

【結果・考察】医療機関との連携がスムーズになり、医療ニーズの高い利用者への対応力が高まった。多職種との情報共有もスムーズになり、連携が強化された。また、看護師が管理者となったことで職員の安心感につながった。

【今後の課題】利用者一人ひとりに質の高い継続したケアを提供できるよう職員のスキルアップを図りたい。

## SNSをインフラとした多法人・多職種による地域連携 ～食支援、糖尿病療養、COVID-19感染症、そして災害医療へ～

発表：谷合 久憲 所属：たにあい糖尿病 在宅クリニック  
共同演者：齋藤 瑠衣子、安藤 秀明  
(秋田大学大学院医学系研究科保健学専攻)  
後藤 尚、小山 昌平(秋田赤十字病院)  
岡部 留美(第一病院訪問看護ステーション)  
藤沢 武秀(ごてんまり訪問看護ステーション)  
八織 紘治(日本調剤)  
佐藤 智哉(アイン薬局)  
長堀 孝子(SOMPO ケア由利本荘)  
石塚 久美子(定期巡回 naniku24)

骨太方針2025の全世代型社会保障の構築では、「持続可能な社会保障制度のための改革を実行し、現役世代の保険料負担を含む国民負担軽減を実現するため、OTC類似薬の保険給付の在り方の見直しや、地域フォーミュラーの全国展開、新たな地域医療構想に向けた病床削減、医療DXを通じた効率的で質の高い医療の実現、現役世代に負担が偏りがちな構造の見直しによる応能負担の徹底、がんを含む生活習慣病の重症化予防とデータヘルスの推進などの改革」について言及されている。これに対応する為には、「生活習慣病の重症化予防や合併症による入院抑制」や「がんの早期発見や治療」、「DXを利活用した医療の質の向上と効率化及び経営改善や福利厚生」に取り組んでいく必要がある。10万人の旧二次医療圏での家族や行政を巻き込んだ多法人・多職種での医療・介護用SNSをインフラとした災害医療にも対応できる地域医療の取り組みを報告する。

## シニア男性の生き場所「さかた男塾」解散までの7年間

発表：齋藤 健太郎

所属：株式会社ブルー

一般社団法人ナカマチラボ

「退職した男性はなぜ地域行事や介護予防講座に参加しないのか」という疑問からスタートした『さかた男塾』。最初はウンチク好きの男性に向けた「学びの場」、それがやがて「様々な経験を持つシニア男性のスキルや興味を活かす場」そして「新たな仲間達との交流の場」と目的を少しずつ変えながら活動を続けてきた男塾に訪れた“コロナ禍”という試練。

それでも男塾は「軒先での野菜の無人販売」という新たなアイデアを契機に、『集う場』から『ソーシャルビジネスの実践の場』へ更なる変化を見せ、活動を続けた。

だが、やがてその新たな事業が会員の関係性に軋轢を生むことに・・・

「さかた男塾」の誕生から解散までの歩みを振り返りながら、社会人として経験を重ねて重責を担ってきた男性の、セカンドキャリアの在り方について考察します。

## 地域ニーズの声を拾う経営

発表：小川 豊美

所属：株式会社 とよみ

2010年3月に合同会社とよみ管理栄養士事務所を起業し翌年株式会社とよみを立ち上げた。いち管理栄養士が「地域の為になにができるか」の挑戦がスタートした。戦略も無くただただ困りごとに耳を傾け多業種・異業種の方々に支えて頂きようやく15年経過した。たべる事への執念が突き動かす経営。その基軸を強化するには数字と地域ニーズのマッチング・国の動向を見据える三つの目が必要である。と、同時になにより一人一人が幸せの笑顔になる。このことが更に原動力となる。日々の小さい事の積み重ねが次に繋がりをお互い物心両面が豊かになる事が最終到達目標である。たべるを通しての今までの事業と今後の活動等含めて報告させて頂く。

医療・介護の地域連携

ネットワーク理事座長：八森 淳 (医療法人 MoLead つながるクリニック)

鶴岡大会座長：三原 一郎 (三原皮膚科)

番号	発表者	所属	演題名
1	佐藤 香澄	つるおか暮らしの保健室	地域に根差す健康の場 —つるおか暮らしの保健室とコミュニティナースやまがたの取り組み—
2	大山 香奈	医療法人防治会 高知市秦地域包括支援センター	地域の“困った”を“よかった”に変える！ ～生活支援コーディネーターの挑戦と「集いの場」復活への道のり～
3	入江 真大	岡山の在宅医療と在宅福祉を考える会 / 一般社団法人土屋雉翔会 はれのくに在宅クリニック杜の街	コロナ禍を契機とした地域共生社会の実現 ～岡山の在宅医療と在宅福祉を考える会の継続的取り組み～
4	今井 大志	医療法人社団萌気会 萌気園通所リハビリセンター浦佐	デイケアにおける個別リハビリ対応 ～萌気園通所リハビリセンター浦佐での関わり～
5	福村 修示	友愛薬局小金原店	老々・認認介護における服薬アドヒアランス向上を目指した薬剤師の訪問指導と介護者教育の実践
6	佐々木 穰史	医療法人社団実幸会 いらはら診療所	在宅療養支援診療所のMSWとしての活動報告と地域に果たす役割
7	小内 裕	チームいすいーっす！	全人的医療で紡ぐ、地域と患者の未来 ～最上発・新しいチーム医療の挑戦～
8	久保 みゆき	社会福祉法人聖霊会 聖霊病院 地域医療連携センター	在宅療養を支えた家族支援専門看護師の実践 —地域共生と専門職連携の視点からの考察—
9	弘中 智子	医療法人生寿会 サービス付き 高齢者向け住宅アンジュかわな	サービス付き高齢者向け住宅における多職種連携を促進するワークシートの活用
10	小林 正和	株式会社連携創造研究所 シニアライフ相談サロン めーぶる_江戸川西店	医療と介護では埋まらない“すき間”を支える 新たな地域の力 ～シニアライフ相談サロンめーぶるの実践から～

番号	発表者	所属	演題名
11	榎本 望	医療法人社団揚石医院 こぶしリハビリセンター 支援相談員	医療 - 介護の連携強化に向けて：通所リハビリテーション事業所の立場から考えること
12	東條 信之	とまと薬局 (株式会社 メディコ)	介護施設職員と薬局薬剤師が連携した服薬アドヒアランス向上への取り組み
13	齋藤 瑠衣子	たにあい糖尿病・在宅クリニック	医療・介護・福祉だけでなく地域住民とも見える関係づくりへ
14	佐々木 歩美	日本調剤 盛岡本宮薬局 (日本調剤株式会社)	薬剤師による診察同行がもたらすもの
15	鈴木 圭輔	医療法人宮田医院 介護老人保健施設ごぎょうの里	あなただったら何処に行きたいですか？
16	茂木 菜々絵	爪 labo BELL NAIL	“爪” から考える地域包括ケア ～医療×民間の新しい連携モデル～
17	後藤 弥生	医療法人生寿会 かわな病院 在宅ケアセンター	訪問診療における医療ソーシャルワーカーの可能性 ～アンケート調査から見たもの～
18	鈴木 哲	株式会社ストローハット	病院を起点とした医療介護連携の実装 ——入退院支援モデル事業と協力医療機関連携から見えてきた新潮流
19	瀬尾 利加子	株式会社瀬尾医療連携事務所 代表取締役	地域共生、小池さんちの車庫でやってみた
20	上野 雅仁	上野ファミリークリニック	ICT を活用しての在宅医療の実践報告

## 1

## 地域に根差す健康の場 一つのおか暮らしの保健室とコミュニティナース やまがたの取り組み～

発表：佐藤 香澄  
所属：つるおか暮らしの保健室  
共同演者：猪股 晃博（コミュニティナースやまがた）  
伊藤 繭子（つるおか暮らしの保健室）

少子高齢化や地域での孤立が進む中、誰もが気軽に健康や暮らしについて語り合える場が求められている。私たちはコミュニティナースとして、鶴岡市で「つるおか暮らしの保健室」、山形市で「コミュニティナースやまがた」を運営している。両活動では健康相談に加え、交流やワークショップを通して子どもから高齢者まで幅広い世代が楽しみながら健康を学んでいる。参加者からは「開催を心待ちにしている」との声が多く、地域に根ざした温かなつながりが形成されている。これらの活動は孤立感の軽減や安心感の醸成に寄与しており、今後は地域間の連携を深め、持続可能な仕組みを築くことで、誰もが安心して暮らせる地域の実現を目指したい。

## 3

## コロナ禍を契機とした地域共生社会の実現 ～岡山の在宅医療と在宅福祉を考える会の継続的 取り組み～

発表：入江 真大  
所属：岡山の在宅医療と在宅福祉を考える会 /  
一般社団法人土屋雉翔会  
はれのくに在宅クリニック杜の街

コロナ禍を契機に在宅医療・福祉の連携不足を実感し、顔の見える関係性構築を目的に昨年秋に「岡山の在宅医療と在宅福祉を考える会」を発足した。地域共生社会の実現を目指し、定期的に勉強会を開催している。**【活動実績】**第1回（2024年11月）では、神経難病患者家族に対する24時間介護「さくらモデル」を紹介した。第2回（2025年2月）では、小児難病患者家族を招き、小児難病と在宅支援の連携や新生児スクリーニングの重要性を議論した。第3回（2025年6月）では、発達障がい児の支援をテーマに、作業療法士の視点から多職種連携の実践を学んだ。**【成果と展望】**各回ともハイブリッド開催により、専門職のみならず利用者・家族・地域住民も参加している。包括的支援の視点が浸透し、顔の見える連携と地域共生モデルの確立が進んでいる。今後も継続的な活動を通じて、地域共生社会の実現を目指す。

## 2

## 地域の“困った”を“よかった”に変える！ ～生活支援コーディネーターの挑戦と「集いの場」 復活への道のり～

発表：大山 香奈  
所属：医療法人防治会 高知市秦地域包括支援センター  
共同演者：遠近 瑠美

高知市では、令和5年度より市内14の地域包括支援センターへ、生活支援コーディネーター（SC）が段階的に専従で配置されています。私は、病院勤務の理学療法士から転身し、SCとして活動を始めました。試行的に取り組む中で、地域住民とともに暮らしやすい地域づくりをサポートする役割を徐々に体得してきました。

所属する高知市秦地域包括支援センターで開催している地域ケア会議。秦地区の一町内の事例に絞り、地域ケア会議を積み重ねたことで、地域課題『集いの場の再建』が浮き彫りになりました。その課題に対し、地域住民の声を丁寧に聴き、関係機関と連携しながら、「いきいき百歳体操」の会場を立ち上げることができました。住民同士の交流の場が出来たことで、地域の絆の再構築に繋がっています。

SCとして、地域課題を解決するために試行錯誤し、地域住民とともに歩んだ経験をここに報告いたします。

## 4

## デイケアにおける個別リハビリ対応 ～萌気園通所リハビリセンター浦佐での関わり～

発表：今井 大志  
所属：医療法人社団萌気会  
気園通所リハビリセンター浦佐

デイケアにおける個別リハビリ加算が包括化され、個別リハビリの介入頻度・時間はリハビリ職員によって決定されている。当施設は個別リハビリに重点をおき、関わりを深くしてきた。しかし、感染症や急な子どもの体調不良などでリハビリ職員が不在となることが多い。他のリハビリ職員で代行しきれず、時に不満の声が上がる。職員の働きやすさと利用者への効果的なサービス提供を両立させるにはどうしたらよいか？と考え、当施設では個別リハビリの中で、自立性を促す観点から自主トレ指導を重要視している。自主トレを担当リハビリ職員不在時や自宅にて実施してもらうようリハビリ計画書を作成し説明する。利用者の中には、指導通りに自主トレをしっかりと行う方もいれば、リハビリ職員に依存し、自主トレを実施しない方もいる。その場合、リハビリ職員で相談する場を設け、リハビリの目的、指導内容、対応方法を検討し、自立性を促している。当施設での関わり方を、事例を交え発表する。

## 老々・認認介護における服薬アドヒアランス向上を目指した薬剤師の訪問指導と介護者教育の実践

発表：福村 修示

所属：友愛薬局小金原店

共同演者：三谷 貴子

秋元 義幸、玉井 典子、武藏 汐里

(株式会社友愛メディカル)

高齢化に伴い、老々・認認介護が増加し、介護者が十分な薬剤知識や服薬技能を持たないまま在宅療養を支える状況が拡大している。特に多剤服用を必要とする認知症患者では、薬の取り違えや投与時間のズレによる誤服薬や服薬中断が患者のQOL低下や健康悪化を招き、結果として介護者の負担も増加している。

当薬局では地域連携を図りながら、薬剤師が患者宅への定期訪問を行い、患者および介護者への服薬目的や副作用の説明、具体的な服薬手技や薬剤管理方法を指導している。また、ケアマネージャーや訪問看護師とも情報共有を行い、患者状況に応じた柔軟な対応を心掛けている。

訪問時間や教育機会に制約がある中でも、継続的な関与と多職種間での情報共有・連携強化により、服薬アドヒアランスの向上と介護者の負担軽減に寄与した事例が確認されている。

本報告では、薬剤師の訪問支援における介護者教育および多職種連携における薬剤師の役割について考察する。

## 全人的医療で紡ぐ、地域と患者の未来 ～最上発・新しいチーム医療の挑戦～

発表：小内 裕

所属：チームいすいーっす！

共同演者：小川 佳恵、佐藤 美咲樹、黒坂 郁恵、

秋葉 和枝、土田 美幸、橋見 みどり、

小林 拓哉、丸山 進、山下 修、星 利佳、

中沼 仁、加藤 智華

山形県最上地域は医師数が少なく、慢性的な人材不足により糖尿病診療体制の充実が依然として大きな課題となっている。演者は、こうした現状を打開するために、地域包括的な「ダイアベティスサポートチーム」を結成し、患者支援の多様かつ継続的な取り組みを積極的に展開してきた。本講演では、地域特性を踏まえた全人的医療の実践に加え、「ダイアベティス」(糖尿病)に対する偏見や不安といったスティグマの軽減に向けた具体的な活動を紹介する。こうした課題解決の一環として、患者同士が支え合う場として友の会「ブルースノー最上」を設立し、講演会や交流会、各種啓発活動を通じて、患者や地域住民の理解促進と意識改革に取り組んでいる。さらに、これらの活動の成果と残された課題を共有し、地域資源や多職種連携を最大限に活用したチーム医療の可能性と今後のさらなる展望についても議論する予定である。

## 在宅療養支援診療所のMSWとしての活動報告と地域に果たす役割

発表：佐々木 穰史

所属：医療法人社団実幸会 いらはら診療所

当院は千葉県松戸市にある在宅療養支援診療所です。当院には医療ソーシャルワーカー(以下MSW)が3名在籍しており、在宅・外来を2名、病棟を1名の体制で関係機関との連携を行っています。

近年のMSWに求められる役割は、より多様化・複雑化しており、多職種と連携する機会も増えていきます。特に、地域共生社会を実現するための「我が事・丸ごと」の包括的支援においては、分野横断的なスキルが求められ、活動の幅もミクロなケースワークから院内・院外連携や地域活動などのメゾ・マクロな視点での活動へ広げていく必要性を感じています。

当院では、行政との協働による個別避難計画の作成、ICTツールを使用した入退院連携や在宅支援チームとのコミュニケーション、地域ケア会議を通しての地域課題の整理などを行っています。

このような活動を通し、当院の理念でもある地域に貢献する医療提供、医療と介護を通じた地域づくりに果たす役割について考察します。

## 在宅療養を支えた家族支援専門看護師の実践 —地域共生と専門職連携の視点からの考察—

発表：久保 みゆき

所属：社会福祉法人聖霊会

聖霊病院 地域医療連携センター

共同演者：高橋 佳香

(社会福祉法人聖霊会 聖霊病院訪問看護ステーション)

浅岡 裕子(日本福祉大学 看護学部看護学科)

終末期患者とその家族が望む在宅療養の実現には、意思決定支援と地域包括ケアに携わる専門職の連携が重要である。事例の患者は、偶然発見されたがんの精査・治療を拒否していたが、生命危機に陥り入院加療を受け一命をとりとめた。その後もがんに関する加療を拒否し、退院を希望した。家族は、在宅療養への移行に不安を抱き、医療者に自らの思いを代弁して欲しいと希望した。家族支援専門看護師(FCNS)は、患者と家族が対話を重ねたうえで意思決定できるよう支援し、「1か月間施設で過ごす」という選択に至った。施設移行から1か月後、患者は自らの意思で退所した。施設長から連絡を受け、FCNSは多職種に在宅療養支援を依頼し、自らは揺らぐ家族の思いに焦点を当てて支援を継続した。その結果、穏やかな在宅での看取りが実現した。本発表では、FCNSが行った家族支援の実際と、コーディネーターとして果たした役割について報告する。

## サービス付き高齢者向け住宅における多職種連携を促進するワークシートの活用

発表：弘中 智子

所属：医療法人生寿会

サービス付き高齢者向け住宅アンジュかわな

共同演者：橋本 智帆

背景：「サービス付き高齢者向け住宅では介護・医療保険を活用した多職種サービス提供が行われているがスケジュール調整や情報共有が課題である。本研究は改善したワークシートの効果を検証する。」

目的：アンジュかわなでは多職種（看護師・介護士・セラピスト・医師等）がワークシートを用いて情報共有を行っているが、現在のワークシートではスケジュール調整の効率性に課題がある。本研究は改善したワークシートの効果を検証する。

方法：「アンジュかわなでは介護士、看護師、セラピスト等が改善されたワークシートを用いて情報共有を実施。2025年6月～7月にスケジュール調整の効率性と情報共有の正確性を定量的に評価した。

結果：改善したワークシートの活用で、スケジュール調整の所要時間が短縮でき情報共有の漏れが減少した。結論：ワークシートは多職種連携を効率化し質の高いサービス提供に寄与する。今後もワークシートの検証を進める。

## 医療・介護の連携強化に向けて：通所リハビリテーション事業所の立場から考えること

発表：榎本 望

所属：医療法人社団揚石医院 こぶしリハビリセンター  
支援相談員

超高齢社会において、医療から介護への円滑な移行は、生活の質を左右する重要な要素である。令和6年度介護報酬改定により、入院中にリハビリテーションを受けていた方が、退院後に通所（訪問）リハビリテーションを開始する際、医療機関からリハビリテーション計画書等を受領し、その内容を把握することが義務付けられた。これにより、医療と介護の連携の重要性が改めて示された。

本発表では、退院・利用開始時の情報共有がリハビリテーション計画書等の書面中心であった事例と、退院前カンファレンスにより、本人・家族の希望や環境を的確に把握したうえで支援が展開された事例を比較検討する。これらの経験から、通所リハビリテーション事業所としては、退院前カンファレンスの開催や生活像の積極的な共有を病院側に期待したい。また、病院職員と顔の見える関係性を築き、連携を積極的に図っていききたい。

## 医療と介護では埋まらない“すき間”を支える新たな地域の力

～シニアライフ相談サロンめーぶるの実践から～

発表：小林 正和

所属：株式会社連携創造研究所

シニアライフ相談サロン めーぶる \_ 江戸川西店

地域包括ケアシステムの推進において、医療と介護の連携、多職種協働が求められているが、実際には制度の枠を超えた生活課題に直面することも多い。私は、医療と介護では対応できない課題に着目し、地域の中で多業種が連携して支援する仕組みが必要と考え、「シニアライフカウンセラー協会」を立ち上げるとともに当協会が運営する相談拠点「シニアライフ相談サロンめーぶる」を開設した。

「めーぶる」では、シニアライフカウンセラー協会が認定するスタッフ（シニアライフカウンセラー）が無料相談を受け、生活支援・身元保証・相続・住まい・生前整理・遺品整理・葬儀・お墓など多様な困りごとに対して信頼できる専門職と連携し、ワンストップで対応している。

今回は、医療ソーシャルワーカー（MSW）からの相談をきっかけに、医療・介護では解決が難しかった事例に対して支援した経緯を紹介し、地域共生に向けた実践の一例として報告する。

## 介護施設職員と薬局薬剤師が連携した服薬アドヒアランス向上への取り組み

発表：東條 信之

所属：とまと薬局（株式会社 メディコ）

介護施設職員と薬局薬剤師が服薬情報を共有することは、入居者の服薬を適正に管理する上で重要である。しかし、お互いが多忙な業務の中、薬物治療に関する情報を綿密に共有する機会は決して多くない。そこで今回、入居者の服薬アドヒアランス向上を目的に、特別養護老人ホームあざみの里の職員ととまと薬局（以下、当薬局）の職員で多職種参加型の処方検討会を実施したので報告する。

対象期間は令和6年11月～令和7年3月とし、当薬局で処方箋応需した入居者12名を対象とした。期間内に処方検討会を3回実施し、患者状態、服用時点、調剤方法、減薬等を考慮し、処方医師に処方提案を行った。その結果、服用時点の変更が7名、調剤方法の変更が6名、休薬が1名、減量が3名行われた。定期的な多職種参加型の処方検討会を通して、今後も介護施設職員と薬局薬剤師が直接的な連携を実施することで入居者の服薬アドヒアランスの向上に寄与していきたい。

## 医療・介護・福祉だけでなく地域住民とも見える関係づくりへ

発表：齋藤 瑠衣子

所属：たにあい糖尿病・在宅クリニック

共同演者：谷合 久憲

藤沢 武秀（ごてんまり訪問看護ステーション）

岡部 留美（第一病院訪問看護ステーション）

長堀 孝子（SOMPO ケア由利本荘）

八鍬 紘治（日本調剤）

佐藤 智哉（アイン薬局）

「骨太方針 2025」の中で、「新たな地域医療構想に向けた病床削減、医療DXを通じた効率的で質の高い医療の実現が求められている。令和6年度の診療報酬・介護報酬・障害福祉サービス等の同時改定でも、在宅療養支援病院・診療所において、管理栄養士が訪問栄養指導を行う体制整備が評価され、在宅医療における栄養管理の重要性が改めて示された。栄養指導や要介護状態に対するリハビリテーション等、地域が多職種での介入が不可欠である。地域で利用できる医療・介護用 SNS を運用することで、多法人・多職種のリアルタイムな連携に寄与している。訪問栄養指導の報告、情報共有にも医療用 SNS を活用し、地域連携を行っている。また、ICT 活用だけでなく、顔と腕が見える関係づくりとして、町づくりに協力することで地域連携を行っている。これは災害時にも大いに役立つため、管理栄養士として地域とつながるため、2つの市民イベントに参加した。

## あなただったら何処に行きたいですか？

発表：鈴木 圭輔

所属：医療法人宮田医院 介護老人保健施設ごぎょうの里

介護老人保健施設は、高齢者が安心して住み慣れた地域で暮らし続けられるよう、医療と介護が連携してサポートする場所です。医師や看護師、リハビリの専門スタッフなど、多職種が協力しながら、医療的なケアだけでなく、食事や排泄、入浴など日常生活の支援も行います。また、その人の暮らしを大切に考え、「やりたいことができる」「行きたいところへ行ける」「逢いたい人に逢える」そんな想いを実現できるよう、趣味やレクリエーションを通じて心のケアも大事にしています。地域の医療機関や在宅サービスとも密に連携し、一人ひとりの暮らしに合った個別のケアプランを行い、在宅復帰後の生活を支えています。ICT の活用はその一部として取り入れられていますが、基本的には人と人との連携やきめ細やかなケアを重視し、地域の医療・介護のつながりを深める役割を果たしていると言えます。

## 薬剤師による診察同行がもたらすもの

発表：佐々木 歩美

所属：日本調剤 盛岡本宮薬局（日本調剤株式会社）

高齢化の進展に伴い、在宅医療の重要性が増す中、薬剤師が果たすべき役割も多様化している。特に高齢者における多剤服用の問題は、QOL の低下や薬物有害事象につながる懸念がある。当薬局では医師の診察に同行し、服薬状況の確認、薬剤の整理、副作用のモニタリング、ポリファーマシーの是正、嘔下等の患者の状態に合わせた薬剤の提案など、薬学的視点から支援を行っている。その結果、服薬アドヒアランスの向上や副作用の軽減、服薬負担の軽減といった成果が得られた。本報告では、具体的な症例を交えて、薬剤師が在宅医療において果たす役割と、診察同行の実際について紹介し、今後の地域連携のあり方を考察する。

## “爪”から考える地域包括ケア ～医療×民間の新しい連携モデル～

発表：茂木 菜々絵

所属：爪 labo BELL NAIL

ネイリストとして20年、手足の爪や指先のケアに携わってきた。一般的なネイルサロンとは異なり「健康・運動・美容」の3本の柱を軸に、10年以上巻き爪をはじめとした爪指先の悩み、高齢者のフットケアにも力を注いできた。多くの方が「誰に相談していいかわからず何年も放置し悪化してしまった」と話す。特に足は身体の土台であり、巻き爪や肥厚爪などトラブルを放置すれば歩行障害や転倒を引き起こし、寝たきりや健康寿命の短縮にもつながる。最近では市内の整形外科に協力していただき、医療が必要な方を紹介し、逆に医療機関からサロンケアが適したケースを紹介してもらった体制が整いつつある。介護施設とも連携し、看護師、介護士への高齢者フットケア講習会も開催した。今後は医療と介護、民間が連携しそれぞれの強みを生かすことで、悩みを抱える多くの人々に適切なサポートを広く届けられると信じている。

## 訪問診療における医療ソーシャルワーカーの可能性 ～アンケート調査から見たもの～

発表：後藤 弥生

所属：医療法人生寿会 かわな病院 在宅ケアセンター  
共同演者：神納 あや

医療ソーシャルワーカーは、医療機関に配置され、療養上の相談、退院支援に関わるイメージがある。

高齢化社会や地域包括ケアシステムが推進される中で在宅医療は欠かせず、その重要性や必要性の認識も進んできている。それに伴い、訪問診療を行う病院やクリニックが増加しているが、医療ソーシャルワーカーの配置については地域差や医療機関ごとに大きく異なっているのが現状である。

在宅で療養される方が増えることにより、それぞれの抱える問題の多様化も浮き彫りになり、訪問診療においても医療ソーシャルワーカーの活躍場面も増えているように思う。

今回、関係機関や、他の訪問診療担当する医療ソーシャルワーカーへのアンケート実施。訪問診療の医療ソーシャルワーカーの役割や必要性、期待されること、今後の課題などを考察したため、発表する。

## 地域共生、小池さんちの車庫でやってみた

発表：瀬尾 利加子

所属：株式会社瀬尾医療連携事務所 代表取締役  
共同演者：北本 久仁子、伊藤 江里香、渡辺 ふじ子、  
足達 香、小柳 朋之  
(みどりまち文庫 ゆるっとcafé)

高齢者世帯や認知症介護家庭が多い地域に暮らす中、演者は両親の変化をきっかけに、自宅に隣接する「小池さんちの車庫」を活用した身近な健康支援を企画した。地域で活動している「みどりまち文庫 ゆるっとカフェ」と協働し、薬剤師・理学療法士によるお茶の提供、鍼灸師によるお灸体験、歯科衛生士の口腔ケア紹介、管理栄養士との食生活に関する対話（地元野菜のマフィン添え）など、多職種による交流の場を実現。SNS やポスターに加え、母の声かけが参加につながり、9名（うち子ども3名）が集った。熊被害、腰痛、食生活など地域の健康課題が自然に語られ、「知り合いの家に遊びに来たような気軽さ」が安心感と参加意欲を高めた。広くもおしゃれでもない場所だからこそ、ふらっと立ち寄れる身近な拠点となり得た。自宅の一角から始めることで、地域共生の可能性がより現実的に見えてきた。

## 病院を起点とした医療介護連携の実装 ——入退院支援モデル事業と協力医療機関連携から見えてきた新潮流

発表：鈴木 哲

所属：株式会社ストローハット

佐久地域における入退院支援モデル事業と、他地域で実践中の協力医療機関連携を取り上げ、ICTを活用した医療介護連携の展開を検討する。前者では、ケアマネジャーによる入院時情報提供のICT化から始まった取り組みが、病院側の判断により退院支援まで拡張され、加算算定にもつながる仕組みへと発展した。後者では、日常的な入所者情報の共有により、定期的な会議の頻度を減らし、病院の負担軽減が実現されつつある。これらの実践は、病院を地域が巻き込むのではなく、病院が起点となって動くための体制整備こそが、今後の医療介護連携の新潮流であることを示唆している。

## ICT を活用しての在宅医療の実践報告

発表：上野 雅仁

所属：上野ファミリークリニック  
共同演者：米村 美香、瀬尾 利加子（瀬尾医療連携事務所）  
齋藤 里枝

緒言：当院は内科、整形外科などを標榜する総合診療クリニックとして外来・訪問診療を実践している。開院後3年間で約70名の在宅・施設患者を訪問診療し、うち32名の看取りを行った。

目的と方法：在宅での質の高い終末期医療を提供するためには、医師、コメディカル、ケアマネジャー、介護職ら多職種間の密な連携が不可欠である。この課題に対し、当地域では情報共有システム「NET4u」を多職種で閲覧可能な共通カルテとして活用し、円滑な連携体制の構築を図っている。

結論：本報告では、このNET4uを活用した連携体制について、当院で経験した実例を基に、その具体的な効果と今後の課題について考察する。

こども・生活を支える取り組み

ネットワーク理事座長：菅原 由美（NPO 法人キャンナス 全国訪問ボランティアナースの会）  
鶴岡大会座長：平向 正包（NPO 法人やまごや）

番号	発表者	所属	演題名
1	茂木 菜々絵	爪 labo BELL NAIL	子どもたちの好きを続ける力を支える ～新たなスポーツ障害予防と爪指先から考える 成長支援～
2	武田 洋	B-CHANGE（ビーチェンジ）	予防における足育活動 ～こどもの健やかな成長に繋がる正しい靴選び と正しい靴の履き方～
3	菊地 愛美	特定非営利活動法人 赤ちゃん食堂プロジェクトままな	赤ちゃん食堂を全国へ ～産後誰もが孤立しない社会を目指して～
4	丸茂 ひろみ	社会福祉法人みどの福祉会 地域貢献事業部 代表	制度の狭間に挑戦 ～フードバンクや子ども食堂から始まった居場 所づくり～
5	伊藤 祐輔	ボディビルジム パワーゲート	筋肉は和顔愛語に通ず
6	佐藤 幸子	POO マスター山形	親子を対象とした「うんちを知ろう」イベント 実践報告
7	宮部 朋子	社会福祉法人山辺町社会福祉協 議会 東南村山地域生活自立支援セ ンター	ひみつ基地誕生の経緯とこれから 生活困窮者自立支援事業展開から生まれた地域 活動について
8	平向 正包	NPO 法人やまごや	制度、非制度を組み合わせた訪問支援事業 ～ NPO 法人やまごやの取り組み～
9	高木 知里	万場町ほこてんプロジェクト	空き家おこしから地域おこしへ ～よろず市・夜市への展開～
10	田中 恭子	一般市民	実家 IT 化大作戦！ ～高齢の親を見守る、わが家の工夫～
11	田中 宏	みどりまち文庫会員／ 鶴岡市議会議員／ おしゃべり音楽家	「歌声は最高の調味料！」 ～音楽と食で紡ぐ、地方発・地域共生の輪～

## 1

## 子どもたちの好きを続ける力を支える ～新たなスポーツ障害予防と爪指先から考える成長支援～

発表：茂木 菜々絵  
所属：爪 labo BELL NAIL

10年以上プロ野球選手や高校大学野球部を主にアスリートの爪指先ケアトレーナーをしている。爪割れやマメタコのケアをはじめ指先ケアを通して肩や肘、膝、腰などのケガを未然に防ぎ本来の力を最大限発揮できるよう支えてきた。その中で実感したのが、幼少期からの正しい爪切りや深爪予防、靴の履き方などがスポーツ障害予防に直結する事だ。近年ジュニア世代のパフォーマンス向上とケガ予防を目的に親子で学べる「正しい爪切り・指先ケア講習会」を広く開催している。子どもはまだ爪も骨も未発達であり、小さな不具合が影響し将来的なスポーツ障害や身体の歪みにも繋がりがかねない。好きなスポーツに夢中で打ち込み、元気に生活を送るためにも「爪を整える」ことは大切であり、生涯自分の足で歩き続ける力にも繋がっていく。子ども達の健やかな成長と人生を支える“からだの土台”として、もっと家庭や地域で正しい爪指先ケアを習慣化する視点が広がってほしいと願っている。

## 3

## 赤ちゃん食堂を全国へ ～産後誰もが孤立しない社会を目指して～

発表：菊地 愛美  
所属：特定非営利活動法人  
赤ちゃん食堂プロジェクトまな

核家族化が顕著となる現在社会において、産後の母親は育児の不安を抱えながら、社会的孤立に直面することが少なくない。産後の孤立は、産後うつや虐待などのリスクをはらんでおり、赤ちゃんの命へと直結する深刻な課題である。

これらの社会問題に取り組むべく、当団体は子ども食堂の赤ちゃん版「赤ちゃん食堂」を全国へ先駆け実施。産後母子が専門職者や地域とつながる「安心できる居場所」を提供し、食を通じた支援で地域で子どもと家庭が育つ環境づくりを進めている。産後一年の基盤を地域でしっかりつくることで、復職、第二子、三子への意欲につながりその効果を発揮するようになってきた。

また近年、赤ちゃん食堂は単なる居場所だけでなく、経済的困窮を抱える家庭への支援も強化しセイフティネットの役割も担っている。多機関連携と継続的な支援体制の構築を目指し、取りこぼしのない産後支援のかたちを全国に普及すべく、当団体の取り組みを報告する。

## 2

## 予防における足育活動 ～こどもの健やかな成長に繋がる正しい靴選びと正しい靴の履き方～

発表：武田 洋  
所属：B-CHANGE (ビーチェンジ)

昨今、こどもの足トラブルが増えていると、各メディアで見かけることが多くなっています。身体の中で唯一地面に接している部分、それが「足」です。こどもの頃の足はほとんどが軟骨であり、アーチ形成前であればなお不安定です。そんな身体の土台である足元からバランスが崩れてしまうことによって、こどもの健やかな成長を妨げることにも繋がりがかねません。現代の日本では、こどもたちの靴教育がうまく進んでいないことが大きな影響を及ぼしていると考え、私はこどもの頃からの正しい靴選びと正しい靴の履き方を伝える「足育活動」を行っています。ありがたいことに幼稚園や保育園・子育て支援センター等から足育講座・足と靴の相談会の開催依頼をいただく機会も増えており、こどもたちの健康を足元から守るべく、日々活動しています。足と靴の専門家としての「予防における足育活動」をご報告させていただきます。

## 4

## 制度の狭間に挑戦 ～フードバンクや子ども食堂から始まった居場所づくり～

発表：丸茂 ひろみ  
所属：社会福祉法人みどの福祉会 地域貢献事業部 代表

現在の子ども・若者を取り巻く課題は多岐にわたっていますが、特に不登校児童数は過去最高 34 万人、子どもの貧困も 9 人に 1 人と言われています。虐待やヤングケラー、若者の自死も気になる現状です。子どもが子どもらしく安心安全に成長できる社会を目指したいものです。そのためには大人が幸せであり、子育てが楽しめることや、地域多世代交流があり、顔の見える関係性により支え合う地域づくりが必要です。困ったときに「助けて」と言えることが「自立」と言えるのではないのでしょうか。「居場所」としてサードプレイスが注目されているなか、地域貢献としてできることはわずかですが、ひとりの声を聴き、そのニーズに合わせた居場所づくりを小さく始めています。本日はそれらの活動の紹介をさせていただきます。

## 筋肉は和顔愛語に通ず

発表：伊藤 祐輔

所属：ボディビルジム パワーゲート

鶴岡市のボディビルジム パワーゲートの伊藤と申します。

37年前にジムを開き、現在会員は10代から80代まで老若男女300名ほど。そのほか26年前から、高齢者対象の健康教室（5才若返り体）を年間250回以上行い、地域の筋肉づくりをさせていただいています。

筋トレは単に筋肉を鍛えるだけのものではなく、筋肉の声を聴きながらトレーニングをすることで、全身の様々な「はたらき」の力を向上させ、心と体を調和させていくものです。

筋肉の調和がとれるようになると姿勢が調い、姿勢が調ってくると呼吸も調い、呼吸が調うと、心も言葉も表情も調ってきます。

そんな「筋肉は和顔愛語に通ず」を当日参加されるみなさんには体験していただきます。お楽しみに！

## ひみつ基地誕生の経緯とこれから

### 生活困窮者自立支援事業展開から生まれた地域活動について

発表：宮部 朋子

所属：社会福祉法人山辺町社会福祉協議会  
東南村山地域生活自立支援センター

山辺町社会福祉協議会では平成31年度から2町を対象として生活困窮者自立支援事業自立相談支援機関を山形県より受託し相談支援活動を行っております。

本事業は生活に困窮している方やそのおそれがある方を対象にして、オーダーメイドのプランを作成し生活を立て直すお手伝いを行うものですが、この事業を展開する中で相談者と私達支援者が一緒につくる相談者のための居場所「ひみつ基地」が出来上がりました。

このケースでは相談の個別ニーズを追いかけていった結果、とても自然なカタチで地域での活動へ広がっていき、それが自助グループのような効果をもたらしながら、相談者の自立のきっかけをつくる場として現在も存在しております。個別ケースが地域を耕す種となりヒントをくれる事例ともなりましたので報告をしたいと思います。

## 親子を対象とした「うんちを知ろう」イベント実践報告

発表：佐藤 幸子

所属：POOマスター山形

共同演者：池田 渚、伊藤 礼子、岩崎 優、

大竹 まり子、幸野 真希、日野 尚子、

牧野 しのぶ

<はじめに>日本トイレ研究所が実施した調査によると、便秘状態と思われる小学生の保護者のうち、子どもが便秘であると認識している保護者の数は56.4%という報告がある。この結果から、43.6%の小学生は便秘に対する対応が遅れ慢性化する恐れがある。そこで、親子で楽しく排泄について学び、幼児期から便に関心を持ち、気持ち良い排便につながる生活習慣を伝えたいと考え、児童遊戯施設と図書館で親子対象のイベントを開催した。その実践を報告する。

<実践内容>山形県内の2施設で、絵本の読み聞かせと相談会を開催した。終了時に参加家族1組ごとに無記名のアンケートを実施、市立図書館については、1か月間の便関係の図書の貸し出し数を評価とした。<結果>アンケートより、便に関心がもてたこと、排泄について困っていることとして便秘しやすい、下痢しやすいという結果が得られた。

<考察>定期的なイベントの開催や相談に繋げる仕組みづくりが課題である。

## 制度、非制度を組み合わせた訪問支援事業 ～NPO法人やまごやの取り組み～

発表：平向 正包

所属：NPO法人やまごや

共同演者：白幡 祐子

NPO法人やまごやは、医療的ケア児、発達障害、不登校など困難に直面する子どもを対象に、家庭・園・学校・地域をつなぐ訪問支援を展開しています。医療制度（訪問看護事業）、児童福祉制度（保育所等訪問支援事業・居宅訪問型児童発達支援事業）、自治体独自制度（山形県医療的ケア児通院支援事業、鶴岡市医療的ケア児（者）看護師派遣事業）を制度横断的に活用しています。さらに山形県教育庁やこども園等からの委託により、作業療法士が学校・園・学童保育へ訪問しています。制度と非制度の組み合わせにより制度の隙間を埋め、アウトリーチを強化することで、切れ目ない支援体制の構築に向けて取り組んでいます。本発表では、この地域共生社会の実現に向けた子どもへの訪問支援の実践を報告します。

## 空き家おこしから地域おこしへ ～よろず市・夜市への展開～

発表：高木 知里

所属：万場町ほこてんプロジェクト

2018年新庄市万場町の一軒の空き家をリノベーションする取組みがスタートしました。2019年「万場町のくらし」としてカフェやレンタルスペースとして再生し、地域の「学びたい」「伝えたい」を中心にまちづくりの勉強会やイベントを開催してきました。一緒に活動する仲間たち（万場町ほこてんプロジェクト）で昭和50年代頃まで万場町商店街で開催されていた「十日市」を2022年7月から、年4回「よろず市」として復活しました。また、2023年7月から「夜市」を開催しています。一軒の空き家おこし（リノベーション）を通じて地域おこし（エリアリノベーション）に興味のある人々が集い、そこから新しいイベントを生み出し、地域の方々も巻き込みコロナ渦を乗り越え活き活きと生活していくことができています。誰でも参加できる「よろず市・夜市」を目指し高校生が出店等で参加しています。

## 「歌声は最高の調味料！」 ～音楽と食で紡ぐ、地方発・地域共生の輪～

発表：田中 宏

所属：みどりまち文庫会員／鶴岡市議会議員／  
おしゃべり音楽家

鶴岡市第三学区では、孤立しがちな独居高齢者の交流を目的に「交流会食会」が30数年にわたり毎月開催されている。かつてボランティアとして支える側だった方が参加者となるなど、地域の支え合いの循環を体現している。

私は毎年1回【歌って元気】プログラムを担当。鶴岡の豊かな季節感にちなんだ名曲を選曲し、楽しいトークを交えながら会場全体で歌う50分間。歌唱前には口や舌のウォーミングアップを行い、嚥下機能向上にも配慮している。

音楽と会話が潤滑油となり、参加者からは「みんなで歌うと、いつもより食欲が湧くの～」との声が聞かれる。住民から提供された新鮮な野菜を、ボランティアが工夫して調理。「支える側」「支えられる側」の垣根を超えた自然な交流が生まれ、地域の一体感も育まれている。

食と音楽という万人の共通言語で地域の絆を育む本実践が、「地方発・一歩先の地域共生モデル」を考える一助となることを願う。

## 実家 IT 化大作戦！ ～高齢の親を見守る、わが家の工夫～

発表：田中 恭子

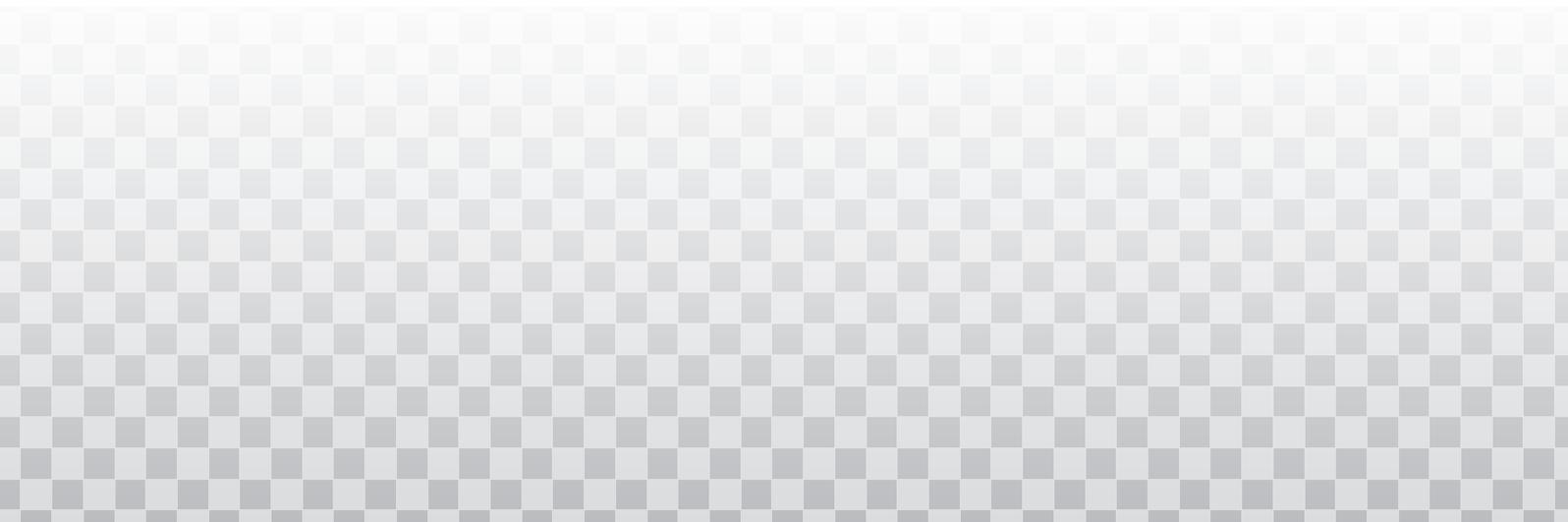
所属：一般市民

高齢の親に関する不便や不安を「安価に、プロに頼らず、自分で改善する」をモットーに、市販のIT機器で実家の暮らしを便利にする「実家IT化大作戦」を実践した。

3000円前後で購入できる見守りカメラは、遠隔操作で録画や通話もでき、数ヶ所に設置しても負担が少なく、動線や危険箇所の確認も可能である。また、使わなくなったスマホを見守りカメラとして再活用したり、スマートスピーカーを導入してタイマーや遠隔操作を活用したり、LEDセンサーライトやスマートロックも取り入れている。どれも工夫次第で、暮らしの不便や不安を減らせる。固定電話の着信転送機能により詐欺電話対策も強化した。

市民向けシェア会を開催し、同様の悩みを持つ家族への情報提供も行っている。技術の力を借りて、遠くに住んでいても、外出先からでも、親の安心をそっと支える《ゆるやかな介護》。地域共生に向けて、小さいけれど大切な実践として広げていきたい。

# 大会2日目 プログラム



## 健康長寿と幸福長寿の両方の実現に向けて ～「フレイル予防」はまさに地域づくり～

【座長】 蘆野 吉和（一般社団法人 日本在宅ケアアライアンス / 業務執行理事）

【演者】 飯島 勝矢（東京大学 高齢社会総合研究機構 機構長・未来ビジョン研究センター 教授）

人生100年時代といわれる中で、心身機能を維持しながらいつまでも自立した日常生活を過ごしたい。これは全ての国民の願いなのでしょう。しかし、そこには物理的な身体健康だけでなく、生きがいも含めたウェルビーイングも充実している必要がある。この直近15年間くらいを見ても、平均寿命と健康寿命の差（男女平均：約10年）はあまり短縮できておらず、政府からの骨太の方でも2040年までに健康寿命を3歳以上延ばすというビジョンが掲げられ、健康寿命延伸プラン（厚労省）も2019年に出ている。健康長寿を実現するために、国民の一人ひとりの行動変容も期待されるが、それと同時に、住民が住んでいる地域コミュニティのあり方も改めて問われる。

「フレイル」概念は多面的（身体的・精神心理的 / 認知的・社会的）な問題が重複しながら負の連鎖を招きやすい状態であるが、まだ可逆性もある状態である。このフレイルを2014年に世の中に出し約10年以上が経過したが、最前線の推進役として、はたしてこのフレイル概念は地域にどのような好循環を引き起こすことが出来たのであろう。包括的なフレイル予防をより早期から実現していくためには、従来の医療の視点を今まで以上に強化するだけでは不十分であり、ポピュレーションアプローチとして国民に行動変容を促すことが重要である。ただし、ここで重要になってくるのが、最新の科学的根拠（エビデンス）を十分踏まえながら、理にかなったことを伝える必要もある。現在、新施策「高齢者の保健事業と介護予防の一体的実施」が全自治体で取り組まれ、高齢者の特性を踏まえた形でポピュレーションアプローチからハイリスクアプローチまでをシームレスで実現できるように取り組んでいる最中である。従来の医療の底上げだけではなく、住民主体のフレイル予防活動をいかに地域に落とし込み根付く運動（ムーブメント）として成長させ、新たな自助・互助のスタイルを介して「健康長寿と幸福長寿の両方」を地域づくりとして実現したい。WHOが「Decade of healthy ageing (2020-2030)」の推進を掲げており、人生100年時代のウェルビーイング重視の健康長寿実現に向けて、わが国も『フレイル予防はまさに地域づくり』という意識を持ち、産官学協働によるコミュニティのリデザインを推し進める時期に来ている。

## 足元から考える福祉住環境

【座長】小柳 朋之 (トテらぼ。 / 代表)

【シンポジスト】

植松 茂也 ((有) 山形義肢研究所 / 代表取締役)

齋藤健太郎 ((株) ブルー / 代表取締役)

武田 洋 (B-CHANGE / 代表)

今回のテーマである「福祉住環境」は「高齢者や障害者にとって住みやすい環境」。今回福祉住環境、及び環境に直接接する身体部位のひとつ「足」に関わる立場の異なる専門職達を交え、意見交換を中心としたシンポジウムを行います。私達の暮らす住環境について足という視点から一緒に考えられれば幸いです。

### 植松 茂也 (義肢装具士) 「足元を整えて健康になろう！」

足は身体を支える大事な土台です。足が不調をきたすと足だけではなく膝や腰なども痛くなり全身に影響が及びます。では皆さんは足を健康に保つにはどのような方法があるかご存じでしょうか？例えば、ウォーキングやマッサージをする、足にいい靴を履くなど様々あるでしょう。

私は義肢装具士として怪我・病気の方へサポーターやインソールを装着しています。しかしサポーターやインソールは怪我・病気になる前の予防に使用できることはご存じでしょうか？

今回は義肢装具士の視点から足元を整えて健康になるための1つの方法としてサポーター・インソールをどのように活用するかを伝えたいと思います。

### 齋藤健太郎 (福祉住環境コーディネーター 1級) 「『建物』ができること ～足元に優しい環境づくり」

玄関、階段、敷居、浴室・建物の中には沢山の段差があります。また、フローリング、タイル、畳、カーペットなど、床の仕上げ方も様々です。そしてこれらには全て理由があります。

福祉住環境コーディネーターとして数多くのお客様と接する中で、住まいには家族の想いが詰まっていることを感じています。利用者にとって最善の住環境を実現することは最優先事項ですが、その方法はありません。過去の事例や様々な材料を紹介しながら、皆さんと一緒に足元の住環境を考えていきたいと思っています。

### 武田 洋 (理学療法士) 「誰も知らない?! 歩いているときの「足」の秘密」

からだの中で唯一地面に接している部分、それが「足」です。そんな身体の土台である足元から歩くバランスが崩れて、様々なトラブルへ繋がっている人がとても多いのです。皆さんは歩いているときの「足」がどうなっているのか、想像したことはありますか？立っているときの足だけを見て、“私の足は幅が広い”と、勘違いしていませんか？歩いているときは、体重がかかっている状態と、空中に浮いている状態に分けられます。それぞれの状態で、実は足の形、太さや幅、アーチの高さまでも大きく変化しています。この歩いているときの「足」の秘密を、詳しくお伝えしていきます。

## 誰もが旅を楽しめる社会へ —嚥下障害を持つ方の新たな可能性

【座長】瀬尾利加子（株式会社瀬尾医療連携事務所 / 代表取締役）

【シンポジスト】

伊佐津貴之（やわらかい旅行社 歯科医師）

伊藤 順哉（一般社団法人日本介護旅行サポーターズ協会 理事）

田口 充（鶴岡食材を使った嚥下食を考える研究会 共同代表 言語聴覚士）

宮本 景子（医療法人社団みつわ会 管理栄養士）

旅行は人生を豊かにするもの。しかし、嚥下障害を持つ方にとって、「旅」は時に困難を伴い、選択肢から外れてしまうこともあります。本セッションでは、旅行の壁を取り除き、誰もが安心して旅を楽しめる社会の実現を目指します。各地で先進的な取り組みを行う4人の演者からは、現場での実践や課題への工夫、未来への展望を語っていただきます。

「旅行をあきらめない」ための環境整備、支援の形、食の工夫について知ること、嚥下障害を持つ方の自由な移動を支えるヒントを得る場にしたいと考えています。福祉・旅行・食の分野を超えた連携の可能性を探り、共に新たな未来を描きましょう。

### ■演者プロフィール

#### 伊佐津 貴之 氏

やわらかい旅行社プロジェクトリーダー／アバンドンデンタル名古屋 院長。異業種と連携し、嚥下障害や嚥下食に配慮した旅行支援を通じて、誰もが旅を楽しめる社会を目指している。

#### 伊藤 順哉 氏

身体が不自由になっても「旅」を諦める必要はない！介護施設つるかめグループの経営の傍ら、旅行×介護（障がい）の可能性を広げ、全国で「旅行介助士」養成を行い、地元山形では旅行会社とユニバーサルツアーや温泉組合と協業して温泉入浴を楽しめるサービスを提供している。

#### 田口 充 氏

医療生協やまがた 鶴岡協立リハビリテーション病院 地域リハビリテーション連携室長  
鶴岡協立病院 事務局長補佐（地域連携担当） 言語聴覚士 摂食嚥下リハビリテーション学会認定士  
病院勤務の傍ら地域の「食」にかかわる支援の団体を構成し活動している。

#### 宮本 景子 氏

医療法人社団みつわ会の管理栄養士。施設の嚥下チームの一員として、嚥下食の充実に注力し、安全で美味しい食事の提供を通じて、ご利用者様に「食べる喜び」を支援している。

## 地方の医療 DX

【座長】 蘆野 吉和（一般社団法人 日本在宅ケアアライアンス）

【シンポジスト】

鈴木 聡（鶴岡市立荘内病院 / 院長）

島貫 隆夫（地方独立行政法人 山形県・酒田市病院機構 日本海総合病院）

斎川 克之（一般社団法人 新潟市医師会）

鈴木 聡（鶴岡市立荘内病院 / 院長）

## 心をつなぐ医療 Dx ～遠隔アシスト手術とオンラインがん相談～

【はじめに】医療の質の向上や業務の効率化など、医療 Dx が地域医療に与える影響は大きい。当院は、がん医療の高度化を図る目的で、2020年7月に国立がん研究センター東病院（以下、東病院、千葉県柏市）と医療連携協定を締結した。そのうちDxの取り組みとして、「遠隔アシスト手術」と「オンラインがん相談」を紹介し、医療Dxを臨床現場でうまく機能させるためには何が必要かについて考える。

【遠隔アシスト手術】2022年12月に当院の外科・婦人科医が執刀し、東病院の専門医が遠隔で指導する、腹腔鏡下大腸切除術・腹腔鏡下子宮全摘術に対するリアルタイム遠隔手術指導（テレメンタリング）を導入した。テレメンタリングの意義は、医師不足の当院としては、医療レベルの均てん化と若手外科医の手術教育ができること。患者側としては、地元にながら専門知識と経験に裏打ちされた手術が受けられることや、専門医のもう一つの目が加わることで医療の安全性がさらに担保でき、安心感が増すメリットがあること。平均月1～2例の手術症例で、現在まで手術合併症やシステムトラブルはほとんどなく安全に行われている。しかし、テレメンタリングを成功に導くには、指導者と受講者（当院の術者と助手医師）の信頼感や相性も大きな問題となり、それらを克服するための取り組みが必要である。課題は、指導医の負担や疲労感への対応、報酬の問題、受講者側のスキルアップの評価など。

【オンラインがん相談】連携開始当初からセカンドオピニオン外来として「がん相談外来」を開設。東病院の医師が月1回当院で担当しているが、今年6月から新たに「オンラインがん相談」を開始した。対面での「がん相談外来」の受診まで待てない患者の利用を勧めている。「オンラインがん相談」の特徴は、当院の診察室で当院の看護師が同席するD to P with N方式をとり、看護師が患者の理解度を確認しながら相談が進められること。相談申し込み手続きや使用機器の手配などは全て当院スタッフが対応し、ICT機器の使用に不安な患者も安心して利用できること。すなわち、Dx導入に関連する不都合な点にあえて人を介入させることで問題解決を図っている。課題は自費診療であること、など。

【おわりに】今後、地域医療の問題解決には医療Dxの導入と推進は欠かせないが、そのためには地域住民（患者）と医療スタッフ間、連携病院間の医療スタッフ同士の強い信頼関係の構築が必要である。患者に寄り添う医療を持続可能なものにするために、引き続き「心をつなぐ医療Dx」を目指していきたい。

島貫 隆夫（地方独立行政法人 山形県・酒田市病院機構 / 理事長）

## 地域医療を支える医療DX・医療MaaSの未来

2040年を見据えて、複合ニーズをもつ患者の需要増大とマンパワー不足は大きな課題であり、需給ミスマッチが長期に及ぶと運営自体が困難になるため、早期の解決が肝要である。山形県庄内地域では医療機能の再編・集約化・連携をはかりながら機能分化とネットワーク化による地域全体最適化に取り組んできた。全体最適化を面で支えるための医療DXの推進、さらに2024年より導入した医療MaaSについて報告する。2008年に、経営効率化、再編・ネットワーク化、経営形態見直しを取り入れ県立・市立の2病院の統合・再編を行い、日本海総合病院が誕生した。2018年には、医療・介護・福祉の切れ目のないサービスを将来にわたって安定的に提供する目的で地域医療連携推進法人「日本海ヘルスケアネット」を設立した。さらに地域の全体最適化を面で支えるために医療DXを積極的に推進し、医療・介護情報を共有することで生産性の向上に務めている。さらに国の進める全国医療情報プラットフォームにも積極的に参画している。ICTを

活用しながら、地域全体最適化のためのフラットな地域医療・介護マネジメントの実現に取り組んでいる。その一方、急速に進む高齢化・過疎化に対して受診困難患者への対応も課題となっている。そのような患者に対して医療をアウトリーチする目的で、2024年5月から中山間地域において医療 MaaS を開始した。特定個人から D to P with N でスタートし、2025年6月からはコミセンでの対応（特定多数人）を実施している。当地域における医療 MaaS の適応患者は、①自立（免許返納などで通院困難）、②フレイル（身体・認知機能に衰え）、③転倒リスク・疲労・軽度認知症、④要支援～要介護1、としている。診察前に看護師が症状や残薬を確認し、問題点を整理して電子カルテにあらかじめ入力するため、医師は外来診察の合間に効率的にオンライン診療を実施することができる。患者にとっては通院の負担が、医師にとっては移動の負担が軽減された。医療 MaaS 関連の収支では、2024年12月からは単月で黒字となった。今後は、病院の統合・合併などで発生する空白地帯において、医療 MaaS が通院困難患者へのサポートとして活用される可能性があるのではないかと考えている。

#### 齋川 克之（一般社団法人 新潟市医師会 / 医療課長）

#### 新潟市におけるヘルスケア SNS「SWAN ネット」活用の意義

新潟市では、在宅医療・介護の多職種情報共有ツール「SWAN ネット」（システム名「Net4U」の新潟での愛称）が導入されており、新潟市医師会（医療課在宅医療係）が事務局を担うことで、専任職員による安定した運営と支援体制が確保されている。SWAN ネットは、医師、歯科医師、訪問看護師、薬剤師、ケアマネジャー、医療ソーシャルワーカー等の在宅関連職種が参加し、日常の療養支援、退院支援、急変時対応、看取りなど多様な場面で多職種間の情報共有を可能にしている。単なる医療介護者間の業務効率化ではなく、多職種が対等に意見交換できる設計が、在宅療養支援における質の向上と継続性の確保につながっている。

特徴的な仕組みとして「Net4U note」（以下、note）がある。これは患者・家族が日常の介護状況や困りごとを記録し、SWAN ネット上の専門職と共有できる仕組みであり、情報の一方的な提供から、患者・家族自身が情報共有の“参加者”となる点に意義がある。離れて暮らす家族とも情報共有が可能であり、「何かあれば支えてくれる」という安心感につながっている。note で記録された家族のコメントは SWAN ネットと連携し、多職種が即座に状況を把握できる体制となっている。一方で、note 機能自体の利用者は現時点で限られており、活用の広がりとは言いえない。周知不足や ICT リテラシーの課題とも関連しており、今後の普及に向けた取り組みが求められる。

こうした note 機能の導入・運用について、新潟市では医師会内に常設の事務局があり、加えて「SWAN ネット運営部会」という多職種による協議の場を設け、継続的に活発な議論と改善を重ねてきた点が大きな強みである。現場に即した実践と、制度としての運用が一体で機能していることで、地域に根ざした持続可能な ICT 活用が可能となっている。今後も、SWAN ネットと note が「住民参加型 ICT 基盤」として、地域包括ケアの中核を担う存在となるよう、さらなる改善と地方型医療 DX の実践を重ねていきたい。

## 認知症とともによりよく生きることに向けた各地の取り組み

【座長】内田 直樹 (医療法人すずらん会 たろうクリニック)

【シンポジスト】

内門 大丈 (医療法人社団彰耀会 メモリーケアクリニック湘南)

鷺田 良平 (公益社団法人 認知症の人と家族の会 山形県支部)

内田 直樹 (医療法人すずらん会 たろうクリニック)

認知症基本法が施行され、認知症の人を含めた国民一人ひとりがその個性と能力を十分に発揮し、相互に人格と個性を尊重しつつ支え合いながら共生する社会の実現が目指されている。本シンポジウムでは、認知症と診断された後も、その人らしく尊厳を保ち地域で生活を継続するための各地の取り組みを共有し、今後の共生社会のあり方について議論を深めることを目的とする。

まず、メモリーケアクリニック湘南の理事長・院長である内門大丈先生からは、認知症初期集中支援事業を通じた早期発見・早期対応の重要性や、「SHIGETA ハウスプロジェクト」のような地域コミュニティとの連携を通じた多職種による包括的なケアの実践についてご紹介いただく。次に、公益社団法人認知症の人と家族の会山形県支部世話人副代表であり、自身の著書『わっしーメモ』でも知られる鷺田良平氏より、母親の認知症介護体験に基づき、「つらい介護を笑いに変える」という視点や、ブログでの情報発信を通じたストレス対処法、そして認知症当事者やその家族が直面する困難やニーズ、ピアサポート活動の意義、一人で悩まず行政の相談窓口や地域の交流会、家族会へ相談することの重要性について、実体験に基づいたご提言をいただく。最後に、座長も務める医療法人すずらん会たろうクリニックの内田直樹からは、かかりつけ医として、認知症の人の生活を医療の面から支える取り組みや、認知症とともによりよく暮らせるまちづくりに向けた取り組みについてお話しする。

本シンポジウムを通じて得られる各地の知見が、認知症基本法の理念である「認知症の人を含めた国民一人ひとりがその個性と能力を十分に発揮し、相互に人格と個性を尊重しつつ支え合いながら共生する活力ある社会」の実現に向けた具体的なアクションへと繋がり、参加者一人ひとりが自身の地域や立場でできることを考える一助となれば幸いである。

本シンポジウムは日本認知症予防学会との合同企画である。

## 支え合いの輪で創る未来のまち

### —医療・介護・福祉の連携と診療報酬改定への実践的対応による地域共生—

【座長】奥富 隆生(まりあクリニック/事務長)

浅沼 裕子(医療法人社団実幸会いらはら診療所/事務長)

【シンポジスト】

石塚 秀俊(医療法人社団ゆみのハートクリニック部長/一般社団法人日本在宅医療事務連絡会代表)

鈴木 重良(公益財団法人豊田地域医療センター/理事/法人事務局長/事務長)

石塚 美絵(めぐみ在宅クリニック/事務長)

本シンポジウムでは、医療・介護・福祉の分野を横断する現場実践の知見と課題を共有し、地域に根ざした共生のあり方を模索します。

近年の診療報酬改定では、医療と介護の連携や情報共有の取り組みに対する評価・強化が継続して進められており、現場における対応と創意工夫がますます重要となっています。こうした背景を踏まえ、連携における最新の情報と直面する課題について石塚氏より報告を行い、制度改定や政策動向が地域連携に与える影響を整理します。

鈴木氏からは特別養護老人ホームとの連携やいわゆる「30日ルール」への対応について事例と共に紹介し、制度に即した運用と現場の工夫について共有します。さらに、石塚美絵氏からは医療広告ガイドラインの改正点や、在宅医療に関するホームページの情報発信のあり方について取り上げ、地域住民とのコミュニケーションの観点からも実践的な示唆を提示します。

制度の変化に柔軟に対応しつつ、医療・介護・福祉の有機的な連携によって地域共生をどう実現していくか。参加者と共に今後の方向性を考える機会とします。

## 超高齢社会における難聴高齢者との意思決定支援 ～諦めない看護を目指すキャンナスの活動から～

【座長】菅原 由美（全国訪問ボランティアナースの会）

【シンポジスト】

中石真一路（聴脳科学総合研究所）

堀内 真弓（キャンナス 潮来）

【演題名】超高齢社会における「聞こえ」の課題と看護師による支援の実例：ALD（アシスティブリスニングデバイス）導入事例の報告

【目的】超高齢社会において、加齢性難聴は高齢者の生活の質（QOL）を著しく低下させる要因である。本研究は、難聴による社会的孤立や意欲・認知機能の低下といった課題に対し、\*ALD（Assistive Listening Devices）\*\*の導入と看護師による継続的な支援が、高齢者のコミュニケーションやQOLに与える影響を明らかにすることを目的とする。

【方法】看護師が多職種と連携しながら、ALDの一種である\*\*「comuoon コミューンスピーカー」\*\*の導入支援を実施した事例を報告する。対象は加齢性難聴のため会話やレクリエーションへの参加に消極的であった高齢者とし、機器の導入支援過程、使用状況、および導入前後の言動や行動の変化について事例を通して詳細に分析した。支援は、対象者やその家族に寄り添い、ALDの試用から適切な使用方法の習得までを伴走する形で実施した。

【結果】ALD導入前は、聴取困難から家族の声かけを「怒られている」と誤解したり、デイサービスの活動に参加できないなど、コミュニケーションに困難を抱えていた。看護師による継続的な支援の下、ALDを使用開始した結果、対象者は明瞭な音声を認識できるようになり、自己効力感の回復が見られた。導入後には、歌や会話に積極的に参加するようになり、以前は諦めていた活動にも意欲的に取り組むといった行動変容が確認された。

【考察】補聴器の装用を断念したケースにおいても、使用場面が限定されるALDは導入のハードルが低く、有効な選択肢となり得る。本事例から、単なる機器提供にとどまらず、看護師が寄り添いながら対象者個々に合わせた方法を探索し、使用を支援することが重要であることが示唆された。「聞こえ」を回復させることは、心の孤立を防ぎ、社会参加を促す上で極めて重要であり、看護師はそれを支援する重要な役割を担うと言える。

【結論】本報告は、看護師によるALD導入支援が、加齢性難聴を抱える高齢者のコミュニケーション能力とQOLを向上させる上で有効な手段であることを示す。今後、同様の支援モデルを広め、より多くの高齢者の「聞こえ」の課題解決に貢献できる可能性が示された。

## 庄内の仲間と一緒に考えよう～こころの悩み～

【座長】三原 美雪 (三原皮膚科 レーザー担当看護師・鶴岡市こころの健康相談員)

【シンポジスト】

三原 美雪 (三原皮膚科 レーザー担当看護師・鶴岡市こころの健康相談員)

平向 正包 (NPO 法人やまごや)

木津美加子 (鶴岡市健康課 教育委員会学校教育課)

佐藤 香澄 (こころのとまり木)

精神科看護師として定年退職後は三原皮膚科で働きつつ、鶴岡市こころの健康相談員として活動中。相談業務の難しさに直面し、アドラー心理学や禅、マインドフルネスなどを学び、雑念をわきに置いて「ただ聴く」姿勢を実践している。その中でも、居場所のない若者やグレーゾーンの方々への支援の必要性を感じている。「精神障害にも対応した地域包括ケアシステム」いわゆる「にも包括」制度は、精神障害の有無にかかわらず、誰もが地域で安心して暮らせるよう支援する仕組みで、令和6年(2024年)4月1日に施行された。庄内でも市町村を中心に、相談支援やピアサポート、居住支援などを連携して展開し、孤立を防ぎながら本人の自立と社会参加を促進している。しかし、精神障害の枠に入らないで、「生きづらさ」を感じている人たちへの支援にはまだまだ至っていないのではないだろうか。庄内では、薬物療法以外の認知行動療法など具体的支援が乏しく、精神疾患への偏見も根強い。ひとり一人に必要な支援を届けるためにはどんなものが必要だろうか？という視点で会場の皆さんのご意見も伺いながら座談会を開いてみる。庄内の問題は、実は日本のどの地域にもある問題なのではないか、と推察しながら。

**佐藤香澄：メンタルヘルスコーチ・カウンセラー**

精神科看護師として20年以上の経験と自身のバーンアウト体験から、「心の健康は予防が何より大切」と実感。現在はフリーで高校生や企業向けにメンタルヘルス支援を実施。認知行動療法と感情教育を基盤に、感情との向き合い方・ストレス対処・孤立予防など日常に活かせる支援の工夫を、実践例とともにみなさんと共有します。

**平向正包 (ひらむき まさかね)：特定非営利活動法人やまごや 代表理事**

統合失調症の父との生活を原点に作業療法士となり、青年海外協力隊で障害児支援に従事。帰国後、地域に不足する医療的・教育的支援体制を補うため、副代表と共にNPO法人やまごやを設立。庄内地域を拠点に訪問看護や保育所等訪問支援を展開。「障害は個人ではなく社会の仕組みの問題」と捉え、多様な人がその人らしく暮らせる地域づくりを目指し、制度にとらわれない柔軟な支援を模索しています。

**木津美加子：鶴岡市若者ひきこもり相談員 スクールソーシャルワーカー 社会福祉士・精神保健福祉士・JECA 子育て支援教育カウンセラー**

自身も一度仕事を離れ悩んだ経験から、現在はスクールソーシャルワーカーと若者ひきこもり相談を兼務。地方特有の閉鎖性や限られた選択肢の中で、支援の「方法」へとつながることが回復への一歩になると実感。相談に来られた時点で既に大切な一歩を踏み出しているという視点で、寄り添い支援を続けています。

## 医療と占いの境界線セッションをなぜ企画したのか？

【座長】糟谷 明範（株式会社シンクハピネス 代表取締役）

【シンポジスト】

宮崎 詩子（株式会社テレノイドケア 代表取締役）

内田 直樹（医療法人すずらん会たろうクリニック 理事長）

本会の会員心得には、すべての会員が当事者意識を持ち主体的に参加し、職種や立場を越えて協働し、広く社会に啓発して活動と連携の輪を広げることが掲げられている。2022年湘南ひらつか大会では都市における「サードプレイス」の可能性を探り、2023年名古屋大会では在宅医療における多職種連携の断絶を当事者体験から浮き彫りにし、医療保険外の多様な試みを紹介した。2024年福岡大会では「医療と占いの境界線」をテーマに、医師・占い師・プログラマーの三者が助言のあり方を論じ、市民生活に根ざした新たな視座を提示した。これらの企画に携わってきた宮崎詩子氏は、自身の療養支援体験を通じ、成功の鍵は「合意形成と意思決定」にあり、その背景には「秘密をデザインすること」があると述べる。患者や家族は必ずしも本音を医師に語らないが、それは信頼不足ではなく「秘密を共有する相手ではない」と捉えているためである。したがって単なる情報連携では不十分であり、共生を実現するためには「秘密情報の流通をいかにデザインするか」が最重要課題となる。

本セッションでは宮崎詩子氏に加え、過去セッションに参加をした糟谷明範氏、内田直樹氏と共に、会場を交えたトーク形式で「秘密情報」について考える機会としたい。

## 身寄りのない方への支援について語り合うワーク

【ファシリテーター】岡江 晃児（全国終身サポート事業ソーシャルワーカー研究会／一般社団愛の会）  
池田 幸恵（新潟県地域医療推進機構 魚沼基幹病院 がん相談支援センター）

我が国では、急速な高齢化と核家族化の進展に伴い、身寄りのない方等が増加しています。身寄りのない方等の増加にともない懸念されているのは、身寄りのない方等に対する尊厳ある支援の確保です。身寄りのない高齢者は、介護施設入居時や入院時の身元保証人がいない、頼れる人がいないことによる精神的な不安や孤独を抱える、体調の変化に気づきにくい、意思判断力の低下による金銭管理や各種支払いを適切に行うことができない、葬儀やお墓の手配をする人がいない、死亡後の手続きや遺品整理をする人がいない、遺産が本人の意図しない形で相続される可能性がある、といった不安や課題が挙げられます。

そのような現状をふまえ、家族や親族に変わって支援する高齢者等終身サポート事業者の需要は増えています。高齢者等終身サポート事業については、サービス内容が多岐にわたりますが、主に、①身元保証等サービス、②死後事務サービス、③日常生活支援サービスがあり、身寄りのない方を支援する上で重要な社会資源の一つとなります。

そこで本ワークショップでは、高齢者等終身サポート事業のソーシャルワーカーの事例を通して、身寄りのない方への支援を行う上で大切な想いや葛藤等について参加者同士が語り合う場となればと思います。多数の参加をお待ちしています。

## ■略歴

## 岡江 晃児

平成17年4月 国立病院機構大分医療センター

平成30年4月 杵築市役所医療介護連携課

令和4年10月 公益財団法人がん研究会有明病院

令和6年10月 最首総合事務所グループ一般社団法人愛の会 主任ソーシャルワーカー・社会福祉士  
現在至る

・全国終身サポート事業ソーシャルワーカー研究会共同代表

・大分大学大学院福祉社会科学部研究科修士課程修了（福祉社会科学）

・日本文理大学非常勤講師

## 池田 幸恵

昭和64年4月 大和町立ゆきぐに大和病院（看護師）

平成1年3月 医療法人越南会 介護老人保健施設越南苑、五日町病院、居宅介護支援事業所

平成21年4月 魚沼市立堀之内病院

平成27年4月 新潟県地域医療推進機構 魚沼基幹病院 地域医療部患者サポートセンターを経て現職  
・新潟医療福祉大学医療福祉大学医療福祉学専攻科修士課程修了（社会福祉学専攻）

## 障害のあるなしを越えて、つながるためのアート・ワークショップ —群馬の地域文化財・上毛かるたを使って—

【座長】福西 敏宏（一般社団法人メノキ 副代表理事）  
大澤 誠（医療法人あづま会 大井戸診療所 理事長）

【演者】三輪 途道（一般社団法人メノキ 代表理事）  
福西 敏宏（一般社団法人メノキ 副代表理事）  
秋本真由美（株式会社 JINS 地域共生事業部 グループリーダー）

定員 40 名  
当日会場先着順

\* オーディエンスは  
出入り自由

一般社団法人メノキは、2021年に、視覚障害当事者で彫刻家の三輪途道と、その友人たちによって設立された。当初は、視覚障害者が芸術文化を楽しむ環境を作ることを目的に、群馬県内の大学・美術館・企業・点字図書館と協働し、視覚に頼らず、触覚やその他の感覚で芸術作品を楽しむための方法を研究することから始め、触覚を使って、視覚障害者・健常者が共に楽しむための展覧会を開催した。また、視覚障害にとっては美術鑑賞というハードルが高くなるため、点字図書館からの依頼で作成した、群馬県の郷土カルタを立体版にして、触覚を使ってかるた遊びをするための「みんなとつながる上毛かるた」を、視覚障害当事者で彫刻家でもある三輪代表が自らの作品として作成。その過程で、対話をしながら作品を触る「触察」の可能性に気づいた。

単に、かるたをとった数を競う競争としてのゲームではなく、この立体版かるたをコミュニケーションツールとして捉え、障害のあるなしを越えて、札を触りながらそれぞれが得た感覚を対話によって共有することで、感覚の違いの豊かさを知り、他者への共感を育み、様々な個性を持った人々がつながるためのワークショップの形に発展することが分かった。このかるたの作成当初から関わってもらった株式会社 JINS の地域共生事業部と共に、「ミルミルつながるプロジェクト」を開始し、県内の教育機関や、最近では東京大学での TEDxUTokyo でワークショップを行い、今年度後半からは、群馬県のインクルーシブ教育指定校である上陽小学校において、授業を行う予定である。今回の NPO 地域共生を支える医療・介護・市民全国ネットワークでもこのプロジェクトとして参加し、このワークショップを体験していただく予定である。

また、美術館との協働では、美術館を障害者でも気軽に楽しめる場にするために、アテンドができるボランティアスタッフの養成をするべく、ぐんまインクルーシブアート研究会を3年ほど行なってきたおり、インクルーシブな芸術・文化のあり方を、地域社会にいかにか根付かせるかを模索しているので、そのことについても触れたいと思う。

## 医療と交通問題を考える対話型ワークショップ

【座長】佐藤 高彦（医療法人 健友会）

医療を受けるにあたり、遠隔診療や訪問診療などを除き、多くの場合受診者本人が医療機関への交通手段を確保する必要があります。医療と交通は一体だと捉え地域の「医療と交通」の現状、課題、問題点またその対策・解決策などについてみんなで考えるワークショップです。

この「医療と交通問題」を考える上で、地方都市における共通の課題として、【高齢者ドライバーの免許返納】【公共交通機関の縮小】【タクシー（ドライバー）不足】が挙げられると思います。

医療機関を主に利用する年齢層の高齢者が、地方において主要な交通手段である自家用車の免許返納を推奨される一方で、バスを始めとする公共交通機関が利用者減少などの理由により縮小しています。

ここ鶴岡では市街地を回る小型の循環バスが運行され、各医療機関がコースに入り一定の利用はあるものの、市町村合併後東北一の面積となった当市では市内全域をカバーする交通手段にはなり得ていません。

鉄道が郊外から市街地への移動手段になり得るものの、バス同様に本数の少なさに加え、駅からの移動手段を確保する必要があります。

タクシーを利用しての通院は、ドア to ドアで歩行が困難な高齢者に重宝されていますが、コロナ禍による利用者減の大打撃を受けたタクシー業界では、運転手不足の問題が通院以外の様々な場面でも顕在化されています。

救急搬送された際の帰りの手段が確保できない、といったケースもあります。

当ワークショップでは「医療と交通」における、

- 鉄道やバスの交通機関の利便性の低さ（本数減少）、空白地域（バス停が自宅から遠い）の存在
- 高齢者特有の困難（杖などを使用し歩行に自信がなく、運転もできない）
- 家族のサポートに依存（送迎）してしまう全体的なサポート不足
- 高齢化社会の進展（自力で自宅から医療機関に行けない人口の増加）
- 移動料金の高さ（タクシーは便利だが経済的な圧迫が想像される）

という問題を共通認識として、参加者皆さんの地域での身の回りの事例紹介をはじめ、実際の対策例などを紹介していただいたり、解決策を考えたいと思います。「患者さん目線で医療機関に通うための方法に関する問題をどう考えるか」にフォーカスした対話の場として、参加者同士で情報共有することで、地域にとっての最適な「医療と交通」を考える機会にしたいと思います。

## 認知症になる前に知ってほしい！家族信託という選択肢

【座長】小倉 和也 (医療法人はちのへファミリークリニック理事長・院長)

【演者】高橋 英之 (あおばの杜グループ代表)

日本は超高齢社会を迎え、認知症の有病率も年々増加しています。認知症を発症すると判断能力が低下し、不動産や預貯金の管理、相続や事業承継などの重要な手続きを自分で行えなくなる場合があります。その結果、本人の希望が実現できず、家族に大きな負担が生じることも少なくありません。

こうした課題に対応する新しい仕組みとして注目されているのが「家族信託」です。家族信託とは、不動産や預貯金、自社株などの資産を、あらかじめ定めた目的に沿って、信頼できる家族に託し、その管理や処分、承継を任せる制度です。例えば、認知症になったとしても自宅をスムーズに売却できるよう子どもに権限を託す、親が認知症になっても相続税対策やアパート経営を継続できるようにする、障がいのある子どもの将来の生活保障を備える、といった活用が可能です。また、遺産分割にまつわる不安や、共有名義不動産の処分に関するトラブル、さらには事業承継の円滑化など、幅広い課題に対応できるのが特徴です。

本セミナーでは、司法書士として多くの実務経験を持つ高橋英之氏 (株式会社あおばの杜) を講師に迎え、家族信託の仕組みや活用の実例、制度のメリットと注意点について、事例を交えながらわかりやすく解説していただきます。認知症に備える財産管理の方法を具体的に学べる貴重な機会です。

「いつか必要になるかもしれない」と思っているながらも、知識がないまま対応を先送りしてしまうと、いざという時に選択肢が限られてしまうこともあります。認知症になる前に知っておくことが、本人と家族の生活を守り、安心して暮らし続けるための第一歩です。ぜひこの機会にご参加ください。

### ■略歴

高橋 英之 (たかはし ひでゆき)

あおばの杜グループ代表・司法書士法人統括代表社員

福島県須賀川市出身

福島県立安積高等学校卒

明治学院大学法学部卒

簡裁訴訟代理関係業務認定 (第 501123 号)

宮城県司法書士会 常任理事・企画広報部長

一般社団法人家族信託普及協会会員

一般社団法人民事信託推進センター会員

共催：医療法人はちのへファミリークリニック

## 虐待の本質的予防について

【座長】和田 忠志 (ひだまりホームクリニック院長)  
【演者】鷺山 拓男 (とよたまこころの診療所院長)  
須田 仁 (聖徳大学心理・福祉学部 社会福祉学科 准教授)

わが国には四つの虐待防止関係法規が存在し、それぞれ、子ども、障がい者、女性、高齢者を対象として、虐待防止に努めている。そして、市町村等の虐待対応部署の理念には「虐待の予防」が必ず掲げられている。しかし、虐待の本質的な予防にはほとんど手がつけられていない。というのは、子どもの虐待を子どもを担当する部署が担当し、障がい者の虐待を障がい者を担当する部署が担当し、という縦割りのシステムでは、本質的予防は困難だからである。

児童虐待において虐待死亡が最も多い年齢は0歳児である。演者の鷺山は、社会的困難を抱える妊婦を「子どもが生まれる前から支援する」ことにより、子どもが生まれたときに虐待死亡が生じないように「予防」する活動を行ってきた。一方、市町村の子ども担当部署や児童相談所は妊婦をその支援の対象としない。つまり、子どもを担当する行政の部署を超えた支援が、0歳児の虐待死亡予防のために必要なのである。

演者の須田は、座長の和田らと共同して高齢者虐待防止に取り組む中で、8050問題(80代の親と50代の子が共存する家庭の課題)に関連する高齢者虐待事例(80代の親に対して50代の子がネグレクトや暴力を行う例)に頻りに遭遇してきた。そして、50代の子の多くが障害(たいていは軽度の知的障害、軽度の精神障害、または軽度の発達障害)を有することを発見した。その子の障害は、多くの事例で、既に20歳前後には顕在化しているが、当該障害者はたいてい親の庇護下に生活するため社会的には顕在化しないままになってしまう。つまり、8050問題といっても、その30年前に、その子の「就労能力障害」「対人関係能力障害」「生活能力障害」として現れているのである。つまり、本質的には、30年前の「5020問題」という支援課題である。須田と和田は、「5020問題」を発見し、障害のある子を支援することによって、8050問題になる前に、高齢者虐待の予防ができるであろうと提唱している。つまり、高齢者を担当する行政部署を超えた支援が、8050問題としての高齢者虐待予防に必要なのである。

このように、虐待の本質的予防には、行政の縦割りを超えた年齢横断的・対象横断的な取り組みが必要であることを本セッションで論じる。加えて、事例対応においては被害者および加害者をレスペクトし「指導ではなく支援を行う」発想が必要であること、育児や世話の責任を母親・養護者・保護者に転嫁せず、「社会によるネグレクト」という概念を認識し、行政がそれらの事例を支援する必要性についても論じる。

共催：ひだまりホームクリニック

## ユースクリニックから考える性と生殖の健康と権利

【座長】菅原 由美（全国訪問ボランティアナースの会キャンナス 代表）

【演者】門間 美佳（藤沢女性のクリニックもんま 院長）

当院では2019年のクリニック開設当初より助産師・看護師・思春期保健相談士・性教育認定講師が担当するユースクリニックを始めた。

きっかけは、2017年2018年と隣の市の新生児遺棄事件で高校生が逮捕されたことだ。日本では、避妊や中絶が個人の責任と矮小化されているが、新生児遺棄事件が減らない原因は女性の『性と生殖の健康と権利』（以下SRHR、Sexual Reproductive Health and Rights）が日本で守られていないからだ。

SRHRを守るために、①包括的性教育 ②若者対象の相談・カウンセリング ③性的健康サービス医療的ケアへのアクセス改善の3つの柱が重要である。2024年10月の女性差別撤廃委員会でもこの3つの改善が勧告された。

ユースクリニックは人権尊重の考えを基盤とし、若者のSRHRを守り、身体的・精神的なウェルビーイングを促進し、若者が当然享受できるべき支援を簡単に受けられるようにする。

若者を尊重しフレンドリーな対応をすることが重要である。

スタッフ育成も重要で、当院では思春期保健相談士、性教育認定講師の受講費、交通費などをクリニックで負担し、意欲あるスタッフが専門家としての的確に若者に対応できるようバックアップしている。

500円で20～30分、1対1で専門家に相談できる『ワンコインユースクリニック』と、月に1回（第1土曜14-17時）の『オープンユースクリニック』がある。

2023年6月から爪心理士さんによる無料ネイルサービス、ヘアメイク、ナプキンバイキングなども取り入れた。当院かかりつけの子とその友達が多い。NHKや朝日新聞に取り上げられても来訪者は増えなかった。

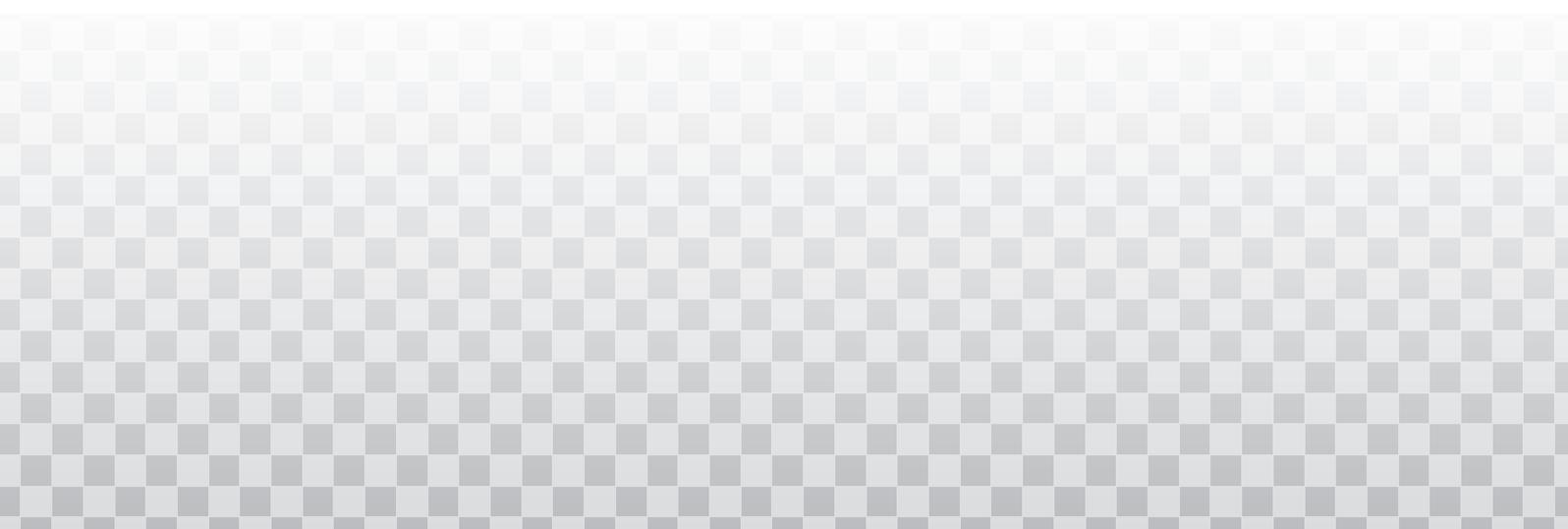
現在は大学生にミニレクチャーを行い、ピアカウンセラーとして活躍してもらっている。ピアカウンセラーは、自分のフィールドでも学んだ知識を広め、地域のヘルスリテラシーの向上に一役買っている。

児童相談所や児童養護施設からオープンユースに何回か遊びに来ている子の妊娠が発覚したり、オープンユースをきっかけに医療に繋がりピルを開始したり、ミレーナを挿入してから児童養護施設を卒業する子も増えている。土曜の午後にオープンユースに来るのは居場所がない子、通信高校に通学している子、児童養護施設卒業の子など、期せずしてハイリスクの子が集まっている。これからも若者、特にハイリスクで声を上げにくい若者の性の健康のために尽力していきたい。

共催：地域共生ネットワーク東海共同代表 亀井克典



# 助成・協賛・後援・広告



## 公益財団法人 在宅医療助成 勇美記念財団

### 協賛企業一覧

(敬称略・五十音順)

#### ■寄付 (3社)

医療法人あづま会 大井戸診療所

医療法人いぶき会 宝田整形外科クリニック

医療法人清風会 宮坂医院

#### ■共催セミナー (7社)

一般社団法人栄樹庵

医療法人佐倉の風

株式会社ストローハット

特定非営利活動法人 tomoni なごや

医療法人はちのへファミリークリニック

ひだまりホームクリニック

地域共生ネットワーク東海 共同代表 亀井 克典

#### ■広告 (14社)

医療法人あいち診療会

医療法人あづま会 大井戸診療所

河淳株式会社

株式会社蔵王サプライズ

株式会社三和化学研究所

医療法人社団彰耀会

医療法人すずらん会

医療法人生寿会 覚王山内科・在宅クリニック

セコム医療システム株式会社

日本調剤株式会社

パラマウントベッド株式会社

医療法人社団 萌気会

ユニ・チャーム株式会社

株式会社 Local Power

#### ■展示 (5社)

大井戸診療所と“ミルミルつながるプロジェクト”  
ミルミルつながるプロジェクトとは、(一社)メノキ×(株)ジンスによる活動です。

株式会社ストローハット

セコム医療システム株式会社

メタジェンセラピューティクス株式会社

ユニバーサル・サウンドデザイン株式会社

株式会社聴脳科学総合研究所

#### ■大会オリジナルTシャツ制作 協賛 (1社)

三原皮膚科

(2025年9月24日)

NPO 地域共生を支える医療・介護・市民全国ネットワーク第4回全国の集い in 鶴岡 2025 の開催にご支援・ご協力いただき誠にありがとうございました。

## 後援一覧

厚生労働省

公益社団法人 日本医師会

公益社団法人 日本歯科医師会

公益社団法人 日本薬剤師会

公益社団法人 日本看護協会

公益財団法人 日本訪問看護財団

公益社団法人 日本理学療法士協会

一般社団法人 日本作業療法士協会

公益社団法人 日本栄養士会

公益社団法人 日本社会福祉士会

公益社団法人 日本介護福祉士会

日本ホームヘルパー協会

公益社団法人 全国老人保健施設協会

公益社団法人 全国老人福祉施設協議会

一般社団法人 全国デイ・ケア協会

公益社団法人 日本認知症グループホーム協会

一般社団法人 日本リハビリテーション病院・施設協会

一般社団法人 日本介護支援専門員協会

一般社団法人 日本在宅医療連合学会

一般社団法人 日本プライマリ・ケア連合学会

一般社団法人 全国在宅療養支援医協会

一般社団法人 日本ケアマネジメント学会

特定非営利活動法人 日本アビリティーズ協会

一般社団法人 全国介護付きホーム協会

一般社団法人 全国福祉用具専門相談員協会

一般社団法人 日本訪問リハビリテーション協会

一般社団法人 全国訪問看護事業協会

NPO 法人 高齢社会をよくする女性の会

一般財団法人 高齢者住宅財団

一般社団法人 シルバーサービス振興会

公益社団法人 全国有料老人ホーム協会

公益財団法人 全国老人クラブ連合会

公益社団法人 日本歯科衛生士会

公益財団法人 さわやか福祉財団

公益社団法人 成年後見センター・リーガルサポート

特定非営利活動法人 全国移動サービスネットワーク

一般社団法人 全国介護事業者協議会

公益社団法人 全国国民健康保険診療施設協議会

一般社団法人 日本福祉用具供給協会

日本弁護士連合会

地域共生ケア全国ネットワーク

NPO 法人 全国コミュニティライフサポートセンター

社会福祉法人 全国社会福祉協議会

一般社団法人 日本言語聴覚士協会

一般社団法人 日本慢性期医療協会

全国小規模多機能型居宅介護事業者連絡会

JA 高齢者福祉ネットワーク

公益社団法人 日本医療ソーシャルワーカー協会

一般社団法人 全国在宅療養支援歯科診療所連絡会

一般社団法人 全国薬剤師・在宅療養支援連絡会

特定非営利活動法人 全国連携実務者ネットワーク

一般社団法人 日本在宅ケアアライアンス

一般社団法人 日本認知症予防学会

鶴岡市

山形県庄内総合支庁

山形県医師会

公益社団法人 山形県看護協会

一般社団法人 山形県薬剤師会

一般社団法人 鶴岡地区医師会

一般社団法人 鶴岡地区歯科医師会

鶴岡地区薬剤師会

社会福祉法人 鶴岡市社会福祉協議会

鶴岡商工会議所

公益社団法人 鶴岡青年会議所

一般社団法人 DEGAM 鶴岡ツーリズムビューロー

慶應義塾大学先端生命科学研究所からだ館

毎日新聞社

NHK 山形放送局

山形新聞・山形放送

株式会社さくらんぼテレビジョン

株式会社テレビユー山形

株式会社荘内日報社

株式会社コミュニティ新聞

有限会社鶴岡タイムス

(敬称略・順不同)

## ネットワークへの入会のご案内

NPO 地域共生を支える医療・介護・市民全国ネットワークは 2021 年に、地域医療研究会と NPO 在宅ケアを支える診療所・市民全国ネットワークが合併をして設立された団体です。

安心をして最期まで自分らしく暮らせる地域を作るため、市民を含む多職種が連携・協働して、地域共生社会の実現を目指すことを活動目的としています。

この目的を達成するために、年に一度全国の集いを開催しております。全国の集いでは、地域共生社会の実現に関する様々なシンポジウム・講演会だけでなく、実践交流会と言って、普段の活動を発表して、会員の皆様からの意見を聞くことでその活動を見直し、改善してゆく場を設けております。会員となれば、職種に関わらず、だれでも参加をして、発言・発表することが可能です。

さらに、全国の集いを盛り上げる目的で、プレ大会を年に数回全国各地開催をして、全国大会へ議論を繋げております。会員となれば無料で参加することが出来ます。また、「風の萌」という、機関紙を年4回発行しており、会員の皆様にお届けしております。

地域共生社会は、診療所、病院、介護施設・事業所がそれぞれ単独でも取り組んでも実現することはできません。医療・介護に関わるすべての職種が地域住民や行政と連携、共同しながら創り上げてゆくものです。

是非皆さんにも入会をしていただき、会の活動に参加をして、一緒に地域共生社会を創り支えてゆきましょう。皆様の参加を心からお待ち申し上げます。



**NPO 地域共生を支える医療・介護・市民全国ネットワーク**

(略称：地域共生全国ネット)

事務局 | 〒 270-0021 千葉県松戸市小金原 4-3-2  
TEL : 047-347-2231 FAX : 047-347-2551  
メールアドレス : jimukyoku@sasaeru-net.org



# 入会申込書

年 月 日

私は「NPO 地域共生を支える医療・介護・市民ネットワーク」の活動方針、内容に賛同し、入会を申し込みます。

会員種別 (下記、種別番号)	(①～③のどれかを記載)	(会員種別③) 個人会員氏名	
(会員種別①②) 団体会員名 団体名・ご担当者名		職 種	
住 所	(郵送先をご記入ください) 〒	(勤務先・ご自宅)	
TEL		FAX	
e-mail		ホームページ	
入会動機またはご紹介者名		ひとことコメント	

## <入会の手続き>

- ① 「入会申込書」に必要事項をご記入の上、事務局へ郵送または FAX で送信してください。

◆郵送先 / お問い合わせ

〒 270-0021 千葉県松戸市小金原 4-3-2 いらはら診療所内

TEL : 047-347-2231 (10:00 ~ 16:00) FAX : 047-347-2551

- ② 年会費をご確認の上、下記口座のいずれかへお振込み下さい。

種別番号	会費区分	年会費
(1) 団体会員	法人・事業所・市民団体	
①	病院・診療所（法人格をもたない病院・診療所を含む）	20,000 円
②	病院・診療所以外の法人、団体等	10,000 円
(2) 個人会員	医師・歯科医師・薬剤師・その他（医療系資格者）介護支援専門員・社会福祉士・介護職・市民	
③	個人	3,000 円

※正会員は上記年会費に加え 20,000 円

### 振込先

【1】三菱 UFJ 銀行 野並支店（店番 697）普通預金口座 0025988

（名義人）NPO 地域共生を支える医療・介護・市民全国ネットワーク

【2】ゆうちょ銀行 記号 10080 番号 86488031

（名義人）NPO 地域共生を支える医療・介護・市民全国ネットワーク

注）振込人欄の先頭には個人名を記載して下さい。冒頭に法人・団体名を記載されると、振込人の判別が出来ない場合があります。

**株式会社 WONDER  
株式会社ワンダー**

**東北 浩仙**

〒 559-0013 大阪府大阪市住之江区御崎 7-15-2-103  
TEL.06-6654-6492 FAX.06-6115-7194  
wonder@wonder-osaka.net

**大川歯科医院**

**大川 延也**

〒 207-0015 東京都東大和市中央 1-1131-21  
TEL.042-565-2588 FAX.042-843-6022  
bobned@star.ocn.ne.jp  
okawa-shika.com

**医療法人すすらん会  
たろうクリニック**

**内田 直樹**

〒 813-0043 福岡県福岡市東区名島一丁目 1 番 31 号  
TEL.092-410-3333 FAX.092-410-3332  
naoki.uc@gmail.com  
<https://taro-cl.com/>

**(医) みどりグループ  
リハビリセンター大村**

**石田 一美**

〒 856-0014 長崎県大村市田下町 930-3  
TEL.0957-55-7811 FAX.0957-55-1520  
riha-omura@maroom.plala.or.jp  
<https://midori-group.com>

**医療法人あづま会  
大井戸診療所**

**大澤 誠**

〒 379-2234 群馬県伊勢崎市東小保方町 4005-1  
TEL.0270-62-3333 FAX.0270-63-2412  
info@ooido.net  
<https://www.ooido.net>

**医療法人生寿会  
かわな病院在宅ケアセンター**

**亀井 克典**

〒 466-0807 愛知県名古屋市昭和区山花町 62 番 1  
TEL.052-759-5535 FAX.052-759-5537  
kkamei@eos.ocn.ne.jp  
<https://www.seijukai.or.jp/kawana/center/>  
真の共生社会を目指すため、市民が大会長の本大会に期待しています

**医療法人  
はちのへファミリークリニック**

**小倉 和也**

〒 031-0072 青森県八戸市城下 4 丁目 11-11  
TEL.0178-72-3000 FAX.0178-72-3300  
renkei@hachifc.jp  
<http://hachifc.jp>

**医療法人秋櫻  
さくらクリニック**

**石田 賢二**

〒 856-0026 長崎県大村市池田 1-50-1  
TEL.0957-53-9990 FAX.0957-53-9981

医療法人 宮田医院  
**宮田医院**

**宮田 信之**

〒 308-0031 茨城県筑西市丙 59  
TEL.0296-22-2440 FAX.0296-24-7701  
nbmiyata@qj9.so-net.ne.jp  
<http://gogyo.hs.plala.or.jp/miyatacl.html>

**パルシステム生活協同組合連合会**

<http://www.pal-system.co.jp/>  
大会の盛会を心よりお祈り申し上げます。

医療法人社団揚石医院  
**揚石医院内科小児科循環器科  
訪問看護ステーションクオレ、  
こぶしリハビリセンター**

**揚石 義夫**

〒 944-0011 新潟県妙高市石塚町 1-14-8  
TEL.0255-70-1155 FAX.0255-70-1156  
ageishi@ageishi.com  
[www.ageishi.com/clinic/](http://www.ageishi.com/clinic/)

医療法人社団若林会  
**湘南中央病院**

**呉 鐵仁**

〒 251-0056 神奈川県藤沢市羽鳥 1-3-43  
TEL.0466-36-8151 FAX.0466-35-2886  
kure@swg.or.jp  
<http://www.swg.or.jp/>

医療法人財団 **はるたか会**

**前田 浩利**

〒 110-0015 東京都台東区東上野 4-27-3  
上野トーセイビル 9階  
TEL.03-6456-1701 FAX.03-6456-1751  
<https://harutaka-aozora.jp>

神奈川県勤労者医療生活協同組合  
**横須賀中央診療所**

**春田 明郎**

〒 238-0011 神奈川県横須賀市米が浜通 1-18-15  
TEL.046-823-8691 FAX.046-823-9591  
ycc2007@nifty.com  
<https://sites.google.com/site/ycchp2014>

医療法人社団ささえ愛よろず  
**ささえ愛よろずクリニック**

**今村 達弥**

〒 956-0854 新潟市秋葉区滝谷町 4-20  
TEL.0250-47-7285 FAX.0250-47-7286  
imatatu527@gmail.com  
<http://www.yorozu-caretown.com>

11月8日第10回日本多機能型精神科診療所研究会新潟大会 at 新潟薬科大学新津駅東キャンパス開催します!

医療法人社団 実幸会  
**いらはら診療所**

**苛原 実**

〒 270-0021 千葉県松戸市小金原 4-3-2  
TEL.047-347-2231 FAX.047-347-2551  
minoru@irahara.or.jp  
<http://www.irahara.or.jp>

鶴岡大会のご盛会をお祈り申し上げます

**医療法人 防治会**

**楠木 司**

〒 781-0011 高知県高知市薊野北町 2 丁目 10 番 53 号  
TEL.088-826-5511 FAX.088-826-5510  
<https://www.izumino.or.jp>

**医療法人永原診療会**

**永原 弘毅**

〒 602-8475 京都府京都市上京区千本五辻上る牡丹 556  
FAX.075-461-0636  
[nagahara.hiroki@nagahara.or.jp](mailto:nagahara.hiroki@nagahara.or.jp)  
<http://www.nagahara.or.jp>

**JA 長野厚生連  
佐久総合病院小海分院**

**由井 和也**

〒 384-1103 長野県南佐久郡小海町豊里 78  
TEL.0267-92-2077 FAX.0267-92-2441

**有限会社ファイン  
わかば薬局**

**本多 裕子**

〒 856-0026 長崎県大村市池田 1-175-3  
TEL.0957-48-5070 FAX.0957-48-5071  
[wakaba-p@lake.ocn.ne.jp](mailto:wakaba-p@lake.ocn.ne.jp)

# あいちに“愛”ある医療・介護を。 あいち診療所グループ



## 医療法人あいち診療会

愛知県名古屋市天白区福池2-330-2  
TEL052-895-6637 FAX052-895-1200

理事長 畑恒土

あいち診療所 野並 院長 野村秀樹  
あいち診療所滝の水 院長 岡崎嘉樹



## 社会福祉法人淳涌界

愛知県弥富市又八二丁目128番地 1  
TEL0567-67-7201 FAX0567-67-7203

理事長 畑恒土

あいち診療所おふくろ院長 村岡敦  
特別養護老人ホーム おふくろの家  
施設長 笹元慶仁



## 有限会社ナインアンドフォー 代表取締役社長 犬飼亨

愛知県名古屋市天白区古川町 7 9 番地 TEL052-891-9495 FAX052-891-5955

<https://nineandfour.travel/about/>

「旅エスコート」では「心のこりの旅」を実現するために「受注型福祉旅行」をご提案しています。介護タクシーやリフト付き大型バス・人工透析施設近くの宿泊探しなど医療・介護目線からの福祉旅行をご要望に沿ってご紹介いたします。

*Cherish Every Day*

医療法人社団彰耀会



メモリーケアクリニック湘南



栄樹庵診療所

EIJUAN CLINIC



「認知症になっても、安心して豊かに暮らし続けることができる街」として  
日本を牽引する地域になれるように湘南から様々な活動を推進します

湘南健康大学



湘南から「日本の未来をデザインする」認知症情報発信サイト



あなたに寄り添う、かかりつけ医として。

## 覚王山内科・在宅クリニック

- ・ 外来受診（内科・糖尿病・甲状腺・内分泌・循環器内科）
- ・ 訪問診療
- ・ がん緩和ケア/在宅ホスピス
- ・ 訪問リハビリ
- ・ 健康診断・検査・予防接種
- ・ オンライン診療

院長 亀井克典 副院長 若見和子

医療法人生寿会 覚王山内科・在宅クリニック

〒464-0841 名古屋市千種区覚王山通九丁目19番地8KIRARITO覚王山2階2A号室

TEL. 052-757-5218 FAX. 052-757-5233



地域包括支援センターを  
受託している診療所

医療法人あづま会  
大井戸診療所  
内科・精神科・心療内科

〒379-2234

群馬県伊勢崎市東小保方町4008-1

TEL:0270-62-3333

Mail:info@ooido.net

URL:https://ooido.net

ホームページはこちらからもご覧いただけます →



人にやさしい“くすり”を  
世界の人びとに

健康は世界の人びとの共通の願いです。

三和化学研究所の使命は、健康を願う皆さまに、

新しい価値を持った“くすり”を創出しお届けすることと考えています。

三和化学研究所が考える“くすり”には、病気の治療や診断に使用する“薬”と、  
医療関係の皆さまへの“情報提供やソリューションの提案”といった  
2つの意味があります。

このような“くすり”を世界の人びとに提供し、健康創造という大きな夢と  
化学の力をしっかりと結びつけたい——。

そんな願いを企業理念に込めています。



株式会社 三和化学研究所

SKK

[本社]

〒461-8631 愛知県名古屋市中区東外堀町35番地

TEL 052-951-8130

https://www.skk-net.com



私たちが何と向き合っているか、  
知っていますか。

人生100年。生き方が多様化する時代。生きることも意味もまた、ひとつではありません。私たち日本調剤グループは、人とデジタルの力を融合し、あらゆる人の健康を支える調剤薬局をはじめ、高品質で安価な医薬品の安定供給、医療従事者のキャリアサポート、医療データを活用した価値創造など、医療を軸とした幅広い活動を展開。プロフェッショナルとして専門性を究めながら、枠に捉われない発想と行動で、一人ひとりの「生きる」を支えています。生活の一番近くで、一番に相談したくなるヘルスケアグループへ。

すべての人の「生きる」に向き合う、  
日本調剤グループです。

 日本調剤グループ



3F リハビリセンター浦佐  
2F たもんの郷  
1F 浦佐診療所



コム・ソフィ  
二日町診療所  
曼陀羅華



## 医療法人社団 萌気会

〒949-7302 新潟県南魚沼市浦佐 330-5

URL <https://www.moegien.jp>



理事長 黒岩 巖 志

- ・萌気園浦佐診療所
- ・萌気園通所リハビリセンター浦佐
- ・しょうたき萌気 たもんの郷
- ・病児保育室「花てまり」
- ・萌気園あやめ診療所（発達障害専門）
- ・萌気園浦佐ヘルパーステーション
- ・萌気園浦佐有料老人ホーム「ハイマートハイム・島田」
- ・萌気園グループホーム「ふきのとう」
- ・萌気園大和通所介護「地蔵の湯」
- ・萌気園二日町診療所
- ・萌気園二日町診療所デイケア「曼陀羅華」
- ・しょうたき萌気 コム・ソフィ
- ・萌気園訪問リハビリテーション りらいふ
- ・萌気園老人ホーム「すみれ草」
- ・萌気園居宅介護支援事業所
- ・萌気園小規模多機能ホーム さくりの郷
- ・法人事務局
- ・浦佐認定こども園

# 一年中スッキリ！環境衛生の新しいスタンダード 除菌 & 消臭 なら 次亜塩素酸

# iPOSH

次亜塩素酸弱酸性) アイポッシュ

**次亜塩素酸とは** 弱酸性領域で除菌作用が高まり、ニオイの原因物質を元から分解する消臭作用を発揮します。

私たちは特許技術のイオン交換法\*により、次亜塩素酸分子が持つ分解しやすい課題を解決し、1年間の有効期限を実現しました。アイポッシュは使いやすさと有用性の両方を追求した製品です。

\* 特許第 5692657

## — 用途に合わせて選べるラインナップ —



PICK UP!

## 日々の衛生管理を効率的に！



広範囲にらくらく噴霧

## iPOSH ナノスプレー

コードレス充電式  
W202×D67×H213mm ※iPOSH 別売

### クリニックでご利用いただいているお客様の声



コードレスであちこち手軽に持ち運べるのがいいですね。

壁やパーテーションの高い所へも届き、作業が楽になりました。

製造販売元

株式会社 Local Power

〒010-0962 秋田県秋田市八橋大畑2-3-1 White cube1F

MAIL [faq@lpower.jp](mailto:faq@lpower.jp) TEL **018-838-6943**



[iposh.jp](http://iposh.jp)



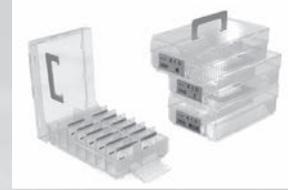
### 開発テーマは、『顧客ニーズ』×『今まで世の中になかったもの』

現場の声を第一に、「問題の解決」と「今までに世の中になかったもの」をテーマに開発を行っています。製品を通じて、患者様・医療従事者の方々に安心・安全をお届けするのが我々の使命です。

機能的な配薬ツールで日々の業務負担を軽減し、インシデントの発生防止に貢献します。



**LFリブレースケース**  
スライドして上下連結できて輸送しやすく、キャビネットで引出管理もできる配薬ケース。



**Aユニットボックス**  
スライドして上下連結できるフタ付きの配薬ボックス。大判湿布なども収納できます。



**Nと薬カート**  
プライバシー保護とセキュリティ機能を併せ持ったシャッターレスと薬カート。



河淳株式会社 **メディカル事業部** 本社/〒103-0007 東京都中央区日本橋浜町3丁目15番地1号 <https://me.kawajun.jp/> ホームページ▶  
東京店/〒103-0007 東京都中央区日本橋浜町 3-15-1 TEL.03(3669)8611 仙台店/〒980-0014 仙台市青葉区本町 2-15-1 TEL.022(262)9161



快適な介護用品を地域密着で

「まごころ」込めてご提案します

福祉用具でお困りの時は…



## 株式会社 蔵王サプライズ

ホームヘルスケア事業部

庄内営業所 TEL 0234-43-0622  
酒田市下安町 15-6

新庄営業所 TEL 0233-32-0036  
新庄市大字鳥越字新町後 1005 番 9 号

ホームヘルスケア事業本部 TEL 023-674-9600  
山形市銅町二丁目 21-4

PARAMOUNT BED

WELL-BEING for all beings



気持ちいい角度に。  
自動運転ベッド。



パラマウントベッド  
直営店

眠りギャラリー TOKYO	〒104-0031	東京都中央区京橋1-6-1 三井住友海上テコビル1階	TEL : 03-5250-1515
眠りギャラリー SAPPORO	〒060-0062	北海道札幌市中央区南2条西13-318-11	TEL : 011-219-8800
眠りギャラリー NAGOYA	〒461-0001	愛知県名古屋市中区泉1-20-17	TEL : 052-963-6800
眠りギャラリー KITTE 大阪店	〒530-0001	大阪府大阪市北区梅田三丁目 2 番 2 号 3 階	TEL : 06-6485-7633
眠りギャラリー FUKUOKA	〒812-0013	福岡県福岡市博多区博多駅東3-14-20	TEL : 092-461-0666

支店・ショールーム

仙台支店	〒984-0015	宮城県仙台市若林区卸町2-3-3	TEL : 022-239-5211	広島支店	〒733-0834	広島県広島市西区草津新町2-15-17	TEL : 082-293-1311
さいたま支店	〒336-0967	埼玉県さいたま市緑区美園3-23-1	TEL : 048-878-0100	高松営業所	〒761-8031	香川県高松市郷東町223-1	TEL : 087-881-8900
横浜支店	〒194-0004	東京都町田市鶴間5-3-33	TEL : 042-795-8800				



**unicharm**  

---

**Love Your Possibilities**

2026年

9月21日 (月・祝)

9月22日 (火・祝)

千葉県佐倉市で開催

地域共生って、なに？

それ、大事

改めてみんなで考えてみませんか

NPO地域共生を支える  
医療・介護・市民全国ネットワーク

第5回 全国の集い  
in 佐倉 2026

【大会長】 三嶋泰之 (医療法人社団佐倉の風)

【副大会長】 和田忠志 (ひだまりホームクリニック)

松永平太 (医療法人社団優和会)

梅野福太郎 (医療法人社団まごころ)

高梨子淳一 (合同会社BOND)

# 認知症を正しく理解するために

本人も家族も、医師でさえも勘違いしやすい  
「認知症」に関する早合点を  
認知症の専門医が徹底解説！

認知症について、古い理解  
のままになってませんか

全国で開催している「認知症見立塾」  
の内容がこの一冊に



【著者紹介】医師。医学博士。認知症専門医。日本精神神経学会専門医、日本老年精神医学会専門医、医療法人すずらんたろうクリニック院長。福岡大学病院精神神経科医局長、外来医長を経て2015年4月より現職。認知症の診断や対応、介護家族のケアなど、在宅医療において精神科医が果たす役割が大きいことを実感。また、多くの看取りを経験し全国で講演を行っている。「名医がすすめる名医」としてたびたび取り上げられる認知症専門医。

認知症専門医

## 内田直樹

- 「もの忘れイコール認知症」という誤解
- 加齢によるもの忘れと認知症のもの忘れの違い
- 見逃しNG! 認知症を起こす「治療できる病気」
- 早合点認知症で見逃されやすい病気がある!
- 生活習慣病と認知症の深い関係
- お酒の飲みすぎも認知症と大いに関係する
- 認知症予防&備えに、スマホを使いこなそう!
- 血管性、レビー小体型、前頭側頭型、アルツハイマー…意外と知られていない、認知症4つの種類とその特徴
- 認知症の人への支援は「お世話」ではない
- どんな社会なら認知症の人は生きやすい? ほか

定価＝本体1540円(10%税込) ISBN:978-4-7631-4197-2 C0030 サンマーク出版

お求めは  
こちら

書店へ



Amazonで



お電話で

0120-29-9625  
(ブックサービス)

